
流久の転生者、神殺しとなりて

論理派青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流久の転生者、神殺しとなりて

【Nコード】

N 2 4 5 6 W

【作者名】

論理派青年

【あらすじ】

その回数を数えることができないほど転生、憑依、トリップ等々を繰り返し、永きに渡って生き——この場合生きるというのか分からないが——生きてきた存在、全ノ一零。当然その永い人生において多数の名を持つに至ったが、彼個人を識別する真名はこれだけだ。そんな彼が今回流れ着いた世界は……

注意! : 「原作の雰囲気を出したい」「作者の文才不足」の二つの理由から、完全に原作から乖離するまでは、原作の文章、表現のト

レースが結構多いです。人によっては不快になるかも知れませんが、運営から指摘が入るかも知れません。それでもよろしいですか？

設定集

強さ早見表

モノ	モノ	lv1	きわめて弱い	蟻
ジ	Di	lv1	非常に弱い	小動物
トリ	Tri	lv10	弱い	成人一般女性の平均的
テトラ	Tetra	lv50	やや弱い	成人一般男性の平均的
ペンタ	Penta	lv80	やや強い	凶暴な肉食獣／熟練した武術
ヘキサ	Hexa	lv100	強い	魔物／魔法などの運用一つの
ヘプタ	Hepta	lv150	非常に強い	悪魔／魔法などの運用

熟練者

二つ以上の熟練者

オクタ	Octa	lv200	きわめて強い	魔人／神格者
ノナ	Nona	lv250	破壊的	下位魔神／下級神
デカ	Deca	lv350	破壊的	中位魔神／中級神
ウンデカ	Undeca	lv500	壊滅的	上位魔神／上級神
ドデカ	Dodeca	lv1000	絶望的	絶対神／創世神
アディナトス	Ad?natos	-	不可能	越えられない壁
アヘロ	peiro	lv ∞	全ての頂点	全ノ一零

注意：後ろ2つはギリシャ語

アディナトス

Aδ?vατο?↓Ad?natos

アヘロ

?πειρο↓?peiro

設定集（後書き）

個の強さ早見表。しばらくは無意味です。その内出します。

01話 幻燐の裏舞台で（前書き）

今話について

VERITAのAppend2・Overの追加シナリオに当たります。

知らない人も多いかも知れません。

括弧の使い分けについて

「」……通常会話

「（）」……セリカ心話

（ ）……ハイシエラ心話、まれに補足の括弧

01話 幻燐の裏舞台で

ラウルバーシユ大陸の一角に広がるオウスト内海。

その北側に接している地は、レスペレント地方と呼ばれている。

レスペレントには多くの国家が存在しているが、そのなかでもひと
きわ大きな勢力を維持しているのがカルツシャ王国だ。

豊かな国力を有するカルツシャ王国に足を運んだ俺は、その首都で
あるルクシリアを訪れていた。

「（俺が俺になってから、お前との付き合いも長くなるな）」

（そうなの…）

依頼所を兼ねる酒場のカウンターに座り、魔剣として俺に永く付き
添うハイシェラと共に感傷に浸る。

俺は全ノ一零。この世界における名はセリカ・シルフィル。

永きにわたって転生を繰り返す最中、強い力に引つ張られてこの世
界にいた『セリカ・シルフィル』とぶつかった『零』。

二つの魂は衝突して『アストライア』の体を互いに奪いあう。

単純な力量差などだけで言うならば『零』が圧勝するのだが、『セ
リカ』は遠い記憶の中に忘れてきてしまった、かつての恋人が刻ん
だ強い生への執着によって、互いに綱引きは拮抗し、その末に二つ

の魂は一つとなった。

『セリカ』の持っていた、記憶障害と感情障害は『零』と融合した
ことにより無くなった。

……王女達が帰ってきたか。

不意に響いてきた耳をつんざく声に反応する。

（見物にでも行くのか？）

「（そうだな。行ってみるとしよう）」

無量大数の無量大数乗を有に超える転生を繰り返しておきながら、
なんだかんだこの世界には来たことがなかった。

最初の人生で、俺がただの人間であった頃にプレイしたゲームの世
界であることは覚えている。

が、覚えているものは殆ど無く、名前を聞いたり顔を見たりして軽
いデジャヴュを覚える程度だ。

その程度も、数瞬でなくなるほどの薄いものなので大して意味はな
い。

それらは思い出そうと思えば魔術などを用いて思い出せるが、基本
的にそういうことはしない主義だ。

酒場を後にする。

姫將軍の持つ異質な呪いと特殊な魔力を辿り、王族をより眺めやすい場所へと移動した。

（ふむ、えらく強い魔力の気配だの……なに、急ぐ依頼でもあるまいし見物がてらに覗くのもよかるう）

鞘に収められた魔剣の柄が光る。

馬の手綱を握った美しい姫が、王城に向かって伸びる大きな通りを通り過ぎる。

「（枷か）」

姫將軍の付ける仮面を視認しそう言う。

（すさまじい力を抑えているようだの）

唐突に馬上の姫がこちらを向く。

仮面の向こうから飛んで来る視線と交わる。

それは瞬く間の出来事であり、些かも経たぬ内に姿勢を正していた。

眩しい光のなかで徐々に遠ざかっていく後ろ姿を見送りながら、俺は目を細める。

「（彼女とはまた何処か出会っ気がする）」

（それは勘か？）

「（……そんな気がするだけだ）」

その場から音もなく跳び去る。

とにかくさっさと依頼を終わらせてしまおう。

カルツシャのはるか東、メンフィル王国にて魔族が蜂起した。

その魔族を率いる半魔人は恐るべき手腕でメンフィルを蹂躪し、勢力を急速に拡大させている。

しかしそれはあくまでも辺境での話。

カルツシャの民は時には面白おかしく、時には子供を司会付けるための話の種にしている。

「辺境で放棄した例の半魔人、ついにメンフィルの首もとに剣を付きつけたってよ」

そんな声が酒場から聞こえてくる。

誰かれ構わずしゃべりまわる酔っぱらいに構われないよう右へ左へかわしながら酒を呑む。

そんなこんなで人も落ち着き、自身も酒場の出口へと向かう。

後どれくらいで街を離れようか。そんなことを考えながら俺は街へと出たのだった。

最近、酒場の話題の中心を占めているのは、東の小国、メンフィル王国で発生した一大事件のことだ。

蜂起した魔族は恐るべき速さでメンフィルを掌握し、新たな王として半魔人が名乗りを上げ君臨する。

その後、半魔人の王は人間の国に近づこうと努力。

ついには和睦の使者を送りつけてきた。

国力においてカルツシャは圧倒的に優位……本来なら和睦など受け入れる必要はない。

だがカルツシャの王はこう宣言したのだ。

尊き命を無為に散らしてはならない、戦争を避けるべく魔族と手を結ぶべきだ、と。

国の権威よりも民を優先し、英断を下した大国はテネイラ宮廷魔術師を代表に据えて和睦に臨む。

……それが魔族どもの狙いだった。

聞こえのいい言葉と笑みの裏側で、じつくりと牙を研いでいたのだ。

残虐で狡猾な半魔人の王は会見の場でテネイラを殺害。

カルツシャに宣戦布告して国境の砦を攻め落とした……。

というのが世間に伝わる大体のあらすじであり情勢だ。

が、その真相はカルツシャ王国内部の確執によるものであることを俺は掴んでいる。

テネイラ師の姿勢を懸念した宰相サイモフ・ハルーンと姫將軍エクリア・テシュオスを疎んだ

王妃ステシア・テシュオスが、ユーリエの街にいたリウイとエクリアに刺客を放つも、

反魔族派であるエクリアがその刺客を利用してテネイラ師を殺害したのである。

カルツシャ王国の首都、王都ルクシリアの一角。

すでに馴染みとなった酒場の定位置である角の席で、味気のない酒を口に運んでいた。

最近とみに話題に上るメンフィルと半魔人の王——リウイの噂は、聞きたくなくても耳に入ってくる。

武力により王位を奪い取った半魔人のメンフィル第11代国王。

レスペレント地方を統一し、闇夜の眷属と人間族・その他あらゆる種族が共存する国づくりに努めた。

性格は基本的に理性的なお人よし。状況を冷静に判断して手段を選

ぶものの、その根底には自分を慕う者、認めた者、ともに戦う者達の助けになりたいという想いがある。

一方で魔神の血統により、常に戦いと殺戮に求める本能に翻弄され、抗っている。

侵攻の決定を促されるという意味で、幻燐戦争は自身のこの衝動との闘いであつたともいえる。

また『王とは綺麗事だけではやっていけない』という考えのもと、捕虜を陵辱し籠絡する、罪人を生贄にするなど必要とあれば他者を踏み躪る行為を行うこともあつた。

逆に元は平民であることもあるのか虚飾を嫌い、民に交じって土地を耕し馬車を押すことにも何ら躊躇いを持たない。

知性面も優れており、極めて勉強家で博識。

その政治的手腕は即位からこの4年間にメンフィルの経済力を急成長させたことや、都市国家長レイナを相手にした立ち回りからうかがえる。

(わかつてはいたことだが、この戦争はさらに激化するの)

後に幻影戦争と呼ばれるこの両国間の戦争。

まあ適当に観察するでしょう。

(主)

「（どうした）」

（妙な奴が入ってきた、用心するが良いぞ）

俺も気づいている。

背の高いすらりとした女が、ゆったりとした足取りで酒場の主人のもとに向かっていた。

身につけている服と同じデザインの布で髪を束ね、後ろでもう一度くくっている。

ぎりぎり前髪に隠れるあたり、左目の左下辺りのほくろが特徴的だ。

腰元まで切れ込みの入ったスカートが揺れて、ちらりと垣間見える白く長い足に客の視線は釘付けになっている。

俺？俺はあまりにも永く生き過ぎて、既にそういうことで目移りはしなくなっている。

酒場の主人と親しげに会話する女を遠目で観察する。

どうやらここに来るのは初めてではないようだな。

そのうち主人が俺の方向けて指を指し、女と視線が合った。

女は柔らかな面持ちのまま真っ直ぐに近づいてくる。

女の実力はたいしたことがないのは人目で分かるが、念の為に剣に手をかけておく

そして女はそのまま何の遠慮も無しに相席へ座った。

「……………」

「……………」

動作の一部始終が洗練された女は何も語らず、意志の強そうな瞳で見つめてくる。

瞳は上から下へと流れるように動くが、そんな動きにさえ無駄がないのは賞賛に価する。

（何を暢気に褒めておるのだ、それともわざとかの？）

「（わざとだ）」

ひとしきり上下左右に動いていた女の瞳が最後に、フードを被った俺の顔を覗き込んだ。

「ツツ!?!」

「どうしたんだ?」

顔を真赤にしていたのは気づかないふりをしてそう聞いた。

「い、いえ……想像していたよりもずっと綺麗だったから」

そう言つて一息ついた女はうなじから垂れる淡い紫の長髪を書き上げ微笑んだ。

わずかに赤く染まったその表情は、艶麗な雰囲気醸し出す風体と違い、どこか健康美を感じさせる。

「名乗らせて頂くわね。私はルクレッティア・ローバント、カルツシャの貴族よ」

「ふむ、それではこちらにも名乗るのが礼儀だな。俺は全ノ一零。零が名だ」

セリカの名は神殺しとして通っているのでこちらを名乗っておいたほうが無難だろう。

「……聞いたことのない名ね。どこの出身？」

「ラウルバーシュ大陸南方のセトリ地方はわかるな」

「ええ」

「そこにあるディスナフロディという国だ」

もちろん嘘だ。零の出身は異世界であり、セリカの出身も中原のセアル地方にあったマクルの街だ。

ちなみにディスナフロディとは、南方の人間領域の三割を占める人口約280万の大国だ。

「へえ」

たまに入ってくる南方の情報でユイドラが発展してきたと聞いた。

面白いことでも起こるかもしれない。そのうち行ってみよう。

「一つ尋ねてもいいかしら」

「なんだ」

「貴方は稼ぎの少ない地味な依頼ばかりを、進んで請け負っている
と酒場の主人から聞いたわ。何故？」

「……」

「私が来てからずっと腰の剣に手を置いている辺り、腕が立たない
というわけではなさそうだけれど」

「人助けが好きだからだ」

「……え？」

「稼ぎの少ない依頼だけに誰も引き受けないだろう。だから俺がや
った。……何かおかしいことでもあるか？」

切れ長な目を丸くして驚く相手に心底不思議そうな眼差しを送る。

しばらく硬直していたルクレティアは満面の笑みを浮かべて手を
差し出した。

「貴方のこと気に入ったわ。是非私に力を貸していただけないかし
ら」

それに対して鋭い視線を返し、

「……荒事か？」

「今夜にでも私の屋敷に来て頂戴。ここに場所と行き方が書いてあるわ」

差し出された手のひらには、文字が細かく記された紙切れが乗っていた。

「了解した」

そう言つて、紙切れを受け取る。

「待っているわ、それじゃあ」

答えを待たずに席を立ち、酒の入った客の視線を受けながら悠々と酒場を出て行くルクレッティア。

（中々に強引な嬢ちゃんだの。言いたいことだけ行つて帰りおつた）

「（普通だろう。上には上がいる）」

力に物を言わせてほしい物を奪つていく地の魔人とか

（ええい、昔のことを掘り返すでない）

「（黒歴史）」

（あ、主）

俺はひとしきりハイシェラいじりを楽しんだ後、ぬらりとその場から消え去った。

酒場の主人は十数分後にその場に置かれた会計分の代金に気づき、

一体彼は何時帰ったのか？という狐に化かされたような疑問を味わうことになる。

座標を指定し、彼女の待つ部屋へ直接空間を跳んだ。

そして、こちらには気づかず部屋の戸の方を未だに気にしている彼女に声をかける。

「来たぞ」

「きゃあッ」

もちろん、この場に現れた時点で、部屋全体に遮音結界など諸々を張り巡らしているため、

今の悲鳴が部屋の外に漏れる心配もない。

整った調度品は部屋の気品を損なうことなく、まあまあ良い配置が成されている。

極ありきたりな貴族の部屋といった感じか。

「どうしたんだそんな可愛らしい悲鳴を上げて」

「あ、貴方が悪いんじゃないの！」

「ああ、すまなかった。確かに心臓に悪い現れ方だったな、次からは気をつけよう」

「そうして頂戴」

彼女は酒場で出会った時と同じ扇情的な格好で、腰に手を当てながら顔を少し赤く染めていた。

「……さてと、よければ本題に入りたいのだけど。こちらに来てもらえるかしら」

（ほう…こんなに早く切り替えれるとは思わなんだ。この嬢ちゃんなかなか肝が座っているのだの）

脳裏に響くその声に同意する。

部屋お片隅に配置された小さな机の上に招き寄せられ、机の上に広げられている資料に目を向けた。

「貴方はカルツシャの王宮がどのようになっているか、知っているかしら」

「……大体はな」

「じゃあ、宰相派、国王派、姫將軍派——今のカルツシャがこの三つの派閥で構成されているのは知っているのね」

「ああ、王は部屋に閉じこもり、現在実権を握っているのは宰相と王妃だというのも間違いないな？」

「ええ。そんななか、姫將軍である第一王女：エクリア様は大変辛い立場にいるわ」

「いろんな意味でな。」

「前王妃の娘であり、多大な功績を残している彼女はもつと正当に評価されるべき。姫將軍である私たちは彼女を支持し、支える役目を担っているのよ」

彼女はワインを手に取りグラスに注ぐ。

「……そうか。それで俺に彼女を助ける手助けをして欲しいと」

「そうよ、それも裏仕事ね」

ふむ……しかし腑に落ちない点が一つ。

「なぜお前は彼女を支持するんだ？功績があるから……だけでは少し納得がいかない」

「……私と彼女の母、つまりリメルダ王妃は懇意の間柄だったの。お茶会を開いたときには必ずお互いを呼んでいたくらいにね。美しく聡明なりメルダ王妃は私の憧れだった。一緒にいるときは彼女から片時も目を離さなかったわ。だからこそ、彼女の娘であるエクリア様には幸せになつてもらいたいよ。それと同時に、病死とされているリメルダ王妃の死の真相も知りたいの。正直に言つと私は暗

殺だと思っているの。その犯人を世間に知らしめることへ王妃への手向けとするつもりなのよ」

（なるほどの……）

ルクレッティアはグラスを片手にゆらりゆらりと酒を揺らす。

俺は目を閉じて熟思黙想する。そしてしばらくの後口を開き再度質問する。

「わかった、協力しよう」

「本当ね？」

「ああ」

どうせ失敗するがな、と分かりきったことを心のなかで思う。

この程度のことの調べが付いてないはずがない。

「勇気ある決断を尊重するわ。ふふっ、人がいいだけでなく賢い人物でよかった」

（ついでに腹黒いを付け加えると完璧なのだがの）

「（人聞きの悪いことを言うな）」

（違うのかの？）

……………。

「少し酒をもらえるか」

「いいわよ、はい」

空いたグラスを差し出され、受け取ると濃い紅色のワインが注がれた。

無造作に口へと運びながら視線を窓の外へ向ける。

薄く雲のかかった空には赤い満月がぼんやりと輝いていた。

（承諾した理由があるならぜひ聞きたいところなのだが、どうかの）

「（気まぐれというところが大きいな、ついでに彼女は気に入った）

」

（性的な意味で？）

「（いろんな意味で）」

茶化すような質問に茶化すように返答する。

外に向けた視線を戻すと、机の上に広げられていた資料を片付ける様子が目に入った。

そして、片付けを終わらせたルクレティアは、俺の手をとって布袋を置いた。

「ひとまず前金として渡しておくわ。今後仕事も依頼するたびに

報酬を渡すから期待して頂戴」

「いや、俺の求める報酬は金銭ではない」

「あら、今までの人は一様に眼の色を変えたのだけど……では何がほしいというのかしら」

「お前が欲しい」

「——えっ」

(ほづ……)

「正直に言つと、お前のことが気に入った」

これは事実だ。

そのいきなりの告白にあたふたとするルクレッティア。

今までは忙しすぎてまともな恋愛など出来なかったのだ。

彼女は恋愛に関してはある意味で乙女よりも乙女らしかった。

そんな彼女に俺は、

「いい、返事はすべてが終わってから聞かせてもらおう。とりあえずは仕事に片付いてからな」

と言った。

彼女は少し落ち着いたのか、少し黙りこくった後、

「……わかったわ」

と言った。

「これを渡しておこう」

俺は彼女にプラチナのチェーンで下げた銀のロザリオを渡した。

「これは？」

「プレゼントだ……と言いたところだがそれはまたの機会だな。

俺を呼びたいときはそのロザリオを首に下げ、両手で握って願え」

俺はそれを言い終わると「ではな」と一言言い、その場から姿を消した。

後には、渡されたロザリオを左手に、顔を赤く染めてポーズする女が一人残された。

彼女から仕事の連絡が来たのはその二日後のことだった。

01話 幻燐の裏舞台で（後書き）

さて、始めましたこの二次小説ですが、二作目です。

一作目はモチベーションやらネタやら色々が続かなくて挫折しました。

そちらは再開予定今のところなし。

作者は現在高校生です。

一作目と同じようにテンション不足または時間不足などで挫折する可能性もなきにしもあらず。

そして、九話ほどのストックが切れた後は更新不定期になるのは確定です。

まあ、適当に応援してください。

別の転生者や別作品のキャラが登場する予定は今のところないです。
ディル＝リフィーナ内で完結するつもりでいます。

3日ごとに一回の更新を予定しています。

主

>セリカが零セリカになったことでハイシェラのセリカに対する意識が変化。

「い、いえ……想像していたよりもずっと綺麗だったから」

>原作のセリカは自分の美容に無頓着でアレだった。今のセリカは自覚していて、美容に無頓着でもないのです……

2011/9/10 「——えっ／／／」↓「——えっ」（変更）

2011/9/10 （あ、主／／／）↓（あ、主）（変更）

2011/9/11 ユイドラが急激に発展してきた↓ユイドラが

発展してきた

<よくよく考えれば神採りはV E R I T Aが終わった後の話。この時期に急発展してたらおかしい事に気がついた。

作者から読者様に依頼。 永続依頼。

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どいつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル・リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどし願います。

02話 闇に紛れて(前書き)

今話について

VERITAのAppend2・Overの追加シナリオに当たります。

知らない人も多いかも知れません。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシエラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシエラ思考

02話 闇に紛れて

「貴方には今日の深夜、ルクシリア宮殿に潜入してもらうわ。王の許可なしに宰相派が独断で集めている武具や財宝……それらが集められている倉庫に放火するのが仕事よ。途中には巡回の兵士が多数配置されている。なるべく見つからないように行動して欲しいのだけど、見つかったときは迅速に始末して。初仕事にしては大きな仕事ね。けれど貴方なら無事に冠水してくれると信じているわ」

直々に命令を受けた俺は姫將軍派の貴族の手引きで、ルクシリア宮殿の内部へと潜り込んだ。

他にも同じ密命を受けたものが十数名いるとのことだが、到着は俺達が最後だったらしい。

担当する場所が各々違ったため、すでに潜入を開始しているとのことだ。

「一番奥の武器庫を担当するのは貴方よ。事前の打ち合わせで披露したとおりの腕前を發揮して頂戴」

そう。事前の打ち合わせで俺は実力を披露した。その一端をだが。具体的に言うならば、一流の剣士、ただし下級魔神には勝てない。程度の腕としてだ。

ちなみになぜか、今回の任務にルクレッティアも同行するらしい。

「言うまでもないけれど、戦闘が起こった場合はあなたひとりに頑

張ってもらうから、そのつもりで」

（ではついてこなければ良いではないか）

「（待て、ハイシエラ。こいつの脳内を読んでみる）」

俺に言われたハイシエラは、俺が魔剣に付与した能力の一を使い、彼女の心を読む。

（うん？……あははははっ、これはこれは、なるほどのっ）

一番危険なところに立たなければ周りは付いてこないというのが表向きの理由だが、この長い永い人生経験から、俺は彼女の心理を見抜いていた。

——おかしい。確かに愛の言葉を囁いた記憶はあるが、ここまでフラグを立てた覚えはない。

相棒と談話をする傍らで、直下の森へと垂らされていた縄梯子を回収する。

「順調に行けば、その後の如何でエクリア様の発言権を増加させられる。それはカルツシャの未来にも繋がるわ」

（残念ながらそれはないだの）

滅ぶとまで行かずとも、カルツシャの先行きが暗いことに違いはない。

「では……作戦開始！」

まあ、仕事だしな。

（とりあえず、派手な魔術は控えよ、主）

「（あたりまえだ、隠蔽術式を使う）」

「吾闇に願う。我が姿無に見えん事を」

十メートルもない横長のベランダを歩きながら、空を十の指でなぞり詠唱する。

それぞれの指先には闇を象徴する黒色の光が表れ、それらが空をなぞるたびに複雑で美しい幾何模様が見える。

「ステルス」

術式を完成させ、ルクレッティアを含む俺達はその場から見えなくなる。

もちろんお互いには見えるようにしてある。

ベランダに連なる三つの部屋の大窓の内明かりの付いてない部屋の鍵をピッキングし、侵入する。

足止めしたけりや構造上ピッキング不可能な鍵を使え、とこの世界の技術力的に無理な話を考えながら

左右に二つずつホテルのようにセッティングされたベッドの間を悠然と歩き、廊下への扉を開いた。

辺りでは、鎧を身に纏った兵士が巡回している。

もちろん、そんなことは気にもとめず、普通に歩き始めた。

「ちょっと」

慌てたようにルクレティアが小声で話しかけてくる。

「なんだ？」

「戦闘は避けてくれるって言ったじゃない」

確かに言ったな。そのつもりで行動しているのだが……。

「このまま行ったら見つかるのは私でもわかるわよ！」

ああ、そのことが……って小声で叫ぶって器用だな。

「だから、さつき、隠蔽術をかけただろう。見つかることはない」

「隠蔽術？」

そこからか……。

「聞いて字の如く、気配を消す、音が響かなくするなど……本来ならば暗殺者が体得する技術を、魔術によって再現している。相手はこちらを視界に入れることはできても気づくことはできない」

「……」

そんなこんなを話しているうちに、往復して戻ってきた兵が目の前を通り過ぎる。

が、道の中心に突っ立っている俺達に気づくことはなかった。

「わかったか？」

「……わかったわ」

さすがに眼に見える形で示されては信じないわけにはいかなかった。

「じゃあ行くぞ」

巡回の兵士の真横を平然と通りぬけ、奥へと進む。

しかし、もうもはや迷宮の間違いだろうと思える作りをしている。

右へ行き左へ行きまっすぐ進んで右へ右へ。

もはや、迷宮のほうがり分かりやすいかもしれない。

大きな階段を下に降りたすぐの部屋で赤い回復の羽を見つける。

「お、いいものを見つけた」

これを集気瓶に詰めて……よし。

「今、何をしたの？」

単純にやっていることがわからなかったのだろう。

「赤い回復の羽の魔力を瓶に詰めたんだ」

「どうやって？」

「そういう性質の瓶なんだ」

「そんなことをしてどうするの」

「即席の万能治療薬」

よくよく考えてみてほしい。

触るだけで自動的に体内に取り込まれ、消費系ステータスが全て回復し状態異常も治すような魔力。

エリクシールとどこが違うのだろうか。

ただし、白い回復の羽はただの魔力のたまり場であるため、上記のような特性は持っていない。

しばらく道なりに進み、金の刺繍が施された赤い絨毯の引かれた広めの廊下へとたどり着いた。

これを道なりに進むと正面玄関へと辿りつくのだろうか。

とにかく俺は右に別れた道へと入り行き止まりの壁にある金属製のレバーを力強く下ろす。

「これで武器庫への扉が開かれたわ。目的達成まで後ほんの少し……。いよいよ最後の大詰めというところでこけたくない。気を緩めることなくしつかりとやり遂げて頂戴」

そして数時間後には解けるであろう幻術を掛ける。

「任せておけ」

待ち伏せであることは既に承知済み。

近づいてきた数名の足音を耳に入れるが、平然として踵を返す。

「なんて間の悪い……言わずとも分かっているわね」

「俺達は奴らに見えないのを忘れたのか？」

「あ……」

おい、ボケるにはまだ早い歳だろう。

後ろから、「あれ？おかしいな」という声が聞こえてくる。

それは当然だ。レバーが降りてないように認識させているのだから。

とにかくそこで屯つとけ、俺が楽だから。

再び絨毯のある廊下へと戻り、レバーによって開かれた武器庫への階段を下っていった。

武器庫にたどり着いた俺達ははさっそく、革袋に入れてきた油を満

遍なく撒いた。

その上で放火すれば、武器庫は瞬く間に炎で包まれていくだろう。

「任務は完遂ね……ありがとう零。難しい仕事をこなせたのは腕達者なあなたのおかげよ」

どことなく、零というときに声に力が入った気がしなくてもないがスルーしておく。

「どういたしまして、だが帰るまでが遠足だぞ？」

「わかってるわ」

燃え盛る炎を背にし、侵入場所として使用したベランダへ最短経路で戻って行く。

「闇に力を借りて使った隠蔽術だから、既に効果は切れている。急ぐぞ」

そういうが否や、俺は彼女を横抱きに持ち上げ走りだした。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

「きゃあ!？」

ルクレッティアは突然のことに驚き少し頬を染める。

まだ静けさに包まれている城内だが、じきに大騒ぎとなるだろう。

なれば巡回の兵士に見つからないように慎重に進む必要は最早無い。

腕の中で顔を真赤にしている彼女へ顔を向けると、ルクレッティアは首を傾げた。

「む」

前方に気配を感じて俺は立ち止まる。

「何かあったの……？」

異様な空気を悟ったのか、ルクレッティアはそう尋ねてきた。

「人の気配だ。待ち伏せをされていたな」

「ほう……」

俺がそう返事をし、ルクレッティアがそれに息を飲む。

それとともにどこからともなく声が響いてきかと思えば、壁であった箇所が崩壊音と共に勢いよく開いた。

続々と飛び出してきたカルツシャの宮殿騎士は、瞬く間に廊下を埋め尽くしていく。

「宮殿に忍び込み、武器庫に放火するとはいかなものかな、ローバント卿」

「さ、サイモフ宰相……！」

騎士たちと同じく隠し部屋からぬらりと姿を表したのは中年の男だ

った。……てっぺんハゲwrs。

男は落ち着いた眼差しでルクレッティアを見据える。その威圧感の上に立つものに相応のものだ。

「火を放ち大事にした上で、秘密裏に集められている武具を公にし、私の立場を悪くする……その着眼点はよろしい。ですが些か詰めが甘すぎたようですね。あなた方姫將軍はの動きを監視していなかったともお思いか」

「……！」

腕の中でルクレッティアが息を飲むのが分る。

そんな彼女を他所に、この場をどう切り抜けるかを思考する。

さて、どうしようか……？ふむ、こうするか。

ルクレッティアを下ろして後ろにやり、前方に駆け出す。

「な——！？」

突然の行動に驚いて隙だらけになっている騎士をあえて飛燕剣でまともに薙ぎ払う。

「むう！？」

続いてサイモフへ向けて剣を構えしなやかに風を始め

「させぬわ……！」

（ほう、超究極に手加減していたとはいえ主の攻撃を受け止めれるとはな）

追撃の体勢を取るサイモフから飛び退き、距離を置いた。

「紅い髪に、その剣技……もしやお主は……」

「俺を知っているのか」

「……神殺しか」

サイモフの目付きが異様に鋭くなっていく。ふむ、逃走の手立ては……用意しているようだな。

「そうか……ならば騒ぎになる前に口を封じさせてもらう」

もちろんそんな気は一切無い。

「……悪いが殺されてやる訳にはいかぬ。まだ私にはやらねばならぬことがあるのでな」

転移魔法の輝きがサイモフを包み込んでいく。

「……………」

そこに飛び込むように一撃を叩き込むふりをした後にサイモフの姿はなかった。

「零、貴方という人は！」

「仕方無い。あれが最善だった。それよりも他の騎士たちは？」

「……宰相が転移したと同時に退却して言っただわ」

「ならば今のうちに宮殿を脱出しよう」

「……」

再び彼女を抱えるも、彼女は無表情に何かを考え込んでいた。

走りだした俺達は誰も居なくなつた廊下を突き進んでいく。

「宮殿をでた後はどうする。顔は割れているんだ、屋敷に戻っても遠からず捕まってしまうぞ」

その後の行動など分かつてはいるが念の為に聞いておいた。

「かといって他に行くところなんてないわ……」

他の姫將軍派に頼つてもそれこそ本末転倒に派閥が一網打尽にされる危険がある。

「失敗したら失敗した人が全てを請負い、責任を取る。誰も助けはくれない……それが姫將軍派の実情よ」

己に言い聞かせるが如く、されど自嘲の響きを匂わせて明言する。

「……まあいい、屋敷に戻るか」

渋々頷いたルクレッティアと共に脱出現場へと急いだ……。

ルクシリア宮殿から脱出してまもなく、ルクレッティア・ローバントの屋敷は軍隊に包囲されてしまった。

蟻一匹たりとも通さない包囲に逃げ出せるような穴は一つとしてなく――

ルクレッティアは部屋からそれを絶望的な目で眺めていた。

「……いつあれが屋敷の中に突入してくるのかしら」

「突然攻撃されることはまず無い、おそらく使者を送ってくるだろう」

現状を冷静に分析しそれを伝えるも、ルクレッティア表情は冴えなかった。

使者が来るとしても、投降を呼びかける者であることはまず間違いないからだ。

「ルクレッティア様、宰相より使者が送られてきました！」

「あなたの言うとおりになったわね……いいわ、通しなさい」

「はっ！」

騎士と入れ替わるように入ってきた使者が仰々しく告げる。

「ルクレッティア・ローバント卿、並びに神殺しは共にルクシリア

宮殿に来られたし。その際には一切の武装を禁ずる。また、これを断る場合には問答無用で屋敷を制圧、情け容赦は一切かけぬことを前もって告げておく」

「くっ……！」

計画通り（「――」）b

表情に出さぬも内心そんなことを考える俺。

（「やはり腹黒いの」）

そんな俺の感情を読み取り内心で思うハイシエラ。

「貴殿らの懸命な判断を期待する。では」

言うべきことを一通り述べた使者は速やかに部屋を退出した。

「……貴方は一体何者なの零。神殺しってどういう事？」

「……いずれまた話そう。今はなんとも言えん」

「……わかったわ」

「それよりもどうするつもりだ。断るのか」

「断れるわけがないじゃない。仕える者たちを守るのも私の役目なのよ。使者に伝えなさい。これから私と零が二人だけで外に出る、屋敷に残っているものは丁重に扱うようにと」

「はい……っ」

「貴方には付き合ってもらっわよ。何があってもいいように覚悟をしておくことね」

前とは違って日が高く登っている内に、兵士に連行されながらルクシリア宮殿へとやってきた。

途中で貴族たちが侮蔑の視線をあらわにしてこちらを眺めてくる。

「（見せしめか…俺はどうでもいいけどな）」

（嬢ちゃんは相当神経質になっているようだが大丈夫かの）

衆目に曝されても俺は気にしないが、眉を釣り上げている辺りルクレティアはかなり堪えているようだ。

ルクシリア宮殿の一角、執務室前まで連行された俺達は何かを隠していないか検査を受ける。

ちなみに元から武器などは装備していない。

ハイシェラは普段は腕輪として変化しているし、他の物は「倉庫」に収納しているため関係ない。

それ以前に素手だけで十分強い。星一つ吹っ飛ばせる程度には。

その上で執務室に入室すると、ずっと待ち構えていたかのように直立不動で佇む宰相サイモフの姿が居た。

「御苦労だった。お前たちは下がって良い」

「は、しかし……」

「下がれと言っている」

淡々と命じられた騎士は、最後に縄がしっかり閉まっている火災確認して退出した。

「このような形で向かい合うこと大変残念に思う。伝説の“神殺し”よ」

サイモフは一定の距離を保ったまま俺に対して慇懃な礼をした。

別に、殺しちゃいないし、縄なんて既に縄抜けしてるしな……まあ教える義理はないが。

隣をつかがうとこちらを心配そうに見つめる瞳があった。それに視線だけで大丈夫だと伝える、

「下手な前置きは邪魔だ。俺を読んだ用はなんなのかを言え」

「では単刀直入に申し上げる。私に力をお貸し頂けないだろうか」

「俺の力が必要なものといえば……フェミリンスか？」

「！？……知っていたか」

「当然だろう。——で、暴走時の対抗策か？」

「そのとおりだ」

それに対してルクレッティアが何かを言おうとする直前に滑り込むように、俺は口を開いた。

「——いいだろう、ただしだ。方法は俺が選ぶ、暴走を止めることが俺の役割だ。それと彼女を解放しろ」

「——わかった。感謝する」

宰相は人を呼び、屋敷の包囲を解くように伝令を出した。

「話はこれで終わりだ。卿の屋敷の包囲も時期に解かれるだろう」

「しばらく、ルクレッティアの屋敷に滞在する予定だ。使者はそちらに送ってくれ」

「わかった」

サイモフに背を向けた俺は、ルクレッティアに目配せし共に執務室を出た。

案内に従って宮殿の外へと向かう、潜入した時とは違って世紀の門に向かっていているようだ。

一応覚えておくか、いつかまたここに潜入することがあるかもしれない。

その時にまた迷宮探索をするのは骨が折れる。今のうちに内部構造を覚えておこう。

「セリカ……」

ルクレッティアが不安そうに俺の名を呼ぶ、

「どうした？」

「貴方は本当に姫將軍を殺すつもりなのかしら」

「いや、全然そんな気はないあくまで暴走を沈めるだけだ。俺にはその術がある」

「よかった……でも、どうして？」

「色々理由はあるが……なにより、彼女の幸せがお前の望みだろう？」

そういつて彼女を抱きしめながら、俺達は彼女の屋敷へと転移した。

02話 闇に紛れて（後書き）

それぞれの指先には闇を象徴する黒色の光が表れ、それらが空をなぞるたびに複雑で美しい幾何模様が見える。

>イメージは伝説の勇者の伝説のあれ。^{アニメ}

2011/9/10 計画通り（ーー）b↓計画通り（顔文字消去

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神探りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、いつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば

は感想の悪い点にお願いします。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はごしどしお願いします。

しばらく感想を非ユーザーにも開放します。マナーを守って投稿してください。

03話 姫將軍エクリア（前書き）

今話について

VERTITAのAppend2・Overの追加シナリオに当たります。

知らない人も多いかも知れません。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシエラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシエラ思考

「「」」 セリカ思考

03話 姫將軍エクリア

メンフィル王国は各国を制圧ないし同盟によって取り込み、破竹の勢いで進撃を続けた。

冗談交じりに戦況を語り、敗北した国を非難していたカルツシャの民も、最近では恐れや不安を隠せなくなっている。

予断を許せぬ事態はカルツシャ第一王女エクリア・テシユオス——姫將軍の裏切りによってさらに悪化する。

魔に魅入られエクリア・フェミリンスとなった王女は説得にまるで応じず、ルクシリア宮殿に大穴をあけて逃亡。

半魔人の王に味方するべくメンフィルへ向かったという噂まで流れ、カルツシャから逃亡しようとする民は後を絶たないそうだ。

そろそろ来るか……と思った矢先に現れた使者によって呼び出された俺は、その日の内にサイモフの元を訪れた。

「これ以上国の秩序が崩壊する前に“殺戮の魔女”を殺害して、民に魔は滅びることを見せしめなくてはならない。だが、あれほど強力な魔力を持った物。既に人の力では捉えることもできぬ。神殺しよ。そなたならば神によって呪われ、世界に破滅をもたらす殺戮の魔女を捕らえて、殺すことも可能であろう」

「神の、呪い……ね」

どうも、あの類の呪いは、神というより、人によるものだと思うの

だが。

さらに言えば、神に呪われたというよりは神が呪われたといった感じの……まあいいか。

さてはて、とにかくどうするか……。

「どうした。何を迷っている」

「ふむ……それでは当初の約束通りにするとしよう」

それだけ言い残し、言葉を待たずに部屋を後にした。

宮殿にしてはあまりに人通りの少ない廊下を歩いて行く。

全体的に探ってみても人の気配が余り感じられない。

（ここも寂しくなったものだ……前線に次々と兵士が送られておるせいだの）

メンフィルが目前まで迫っている影響は外だけでなく、中枢までも達しているようだ。

（で？主のことだ、すでに姫將軍の居場所は掴んでいるのだろうか？）

「（当然だろう。国境付近、エーリエの街の郊外にある森。彼女は今、そこを隠れ家としている）」

転移術式を発動し、エーリエの街へと跳ぶ。

——とはいえ、戦時中であるために、街の影になっているところに跳んだ。

開戦を間近に控えた街は物々しい雰囲気に入れ、カルツァ騎士の怒号が飛び交っている。

市民の姿はどこにもない。皆に収納されたか逃げ出したかのどちらかであろう。

現場の混乱に巻き込まれぬよう、硬結界で足場を作り上空2000メートルほどに移動する。

ここからならば、エーリエの街はもちろん公路の様子さえ目に届く。

戦地から遠ざかろうとする民によって埋め尽くされている様子がかかる。

（まったくどこいつもこいつも必死だのお……魔族を大げさなほどに恐れておる）

「（それは仕方ないだろう……なにせ人の恐怖から生まれる魔族……妖怪という存在すらいるのだから）」

ちなみに硬結界とは、半物理化した結界のことで使い方によっては上記のような用法もある。

目を閉じ神経を長い紐のようにして放出すると、如何にも開戦前という熱気と高揚が感じられる。

「（まあ、結末は分かっているけどな……見つけた）」

ふと異質な雰囲気を感じて空を仰ぐ。

カルツシャ軍やメンフィル軍とは別に、抑えきれない激情のようなものが伝わってきた。

それを捕らえて一瞬で元を辿る。

（凄く強い邪心だの……自信と憎悪……いや、小さいが強く感じられる……羨望と嫉妬かの）

感覚を半共有するハイシエラは俺が彼女を捉えると同時にそれが伝わったようだ。

（これが神に飲まれた最大の要因だの）

隠し切ることの出来ていなかった感情は開戦と共に薄れ、邪神に満ちた魔力の気配のみが残った。

「（彼女もこの戦が終わる前頃までは動かないだろう、少し見ていくか？）」

（うむ見届けてゆこうぞ）

姫將軍の位置を常に把握しながら、ハイシエラと共に戦を観察する。いつの間にか開戦していた戦はメンフィルが一方的に押し、カルツシャ勢はどんどんと後退していく。

カルツシャ勢の最後の砦であつたもんが打ち破られ、続々とメンフイル軍が侵入していく。

後は大将の首が落ちるか降伏すれば戦は終わるだろう。

「——行くか」

（そうなの……最期まで見ていたかったのだがの）

存在を補足している姫将軍が移動を開始したのを察知し、空中から飛び降りる。

脱力し慣性に身を任せて真っ逆さまに落ちて行く。

途中、侵入者を探知する膜結界があつたが、気にすることはなくそのまま突き抜け、

ただの柔術を用いて、常人ならミンチになっている高さからの着地を、事も無げに音も立てずに行う。

俺は殺戮の魔女エクリア・フェミリンスの前に立っていた。

「!？」

まさか空から現れるとは思っていなかったのだろう彼女は驚きを顔にする。

——が、それも一瞬の内に消え去り、後退しすぐに攻撃できる態勢を整えて、切れ長の目を細める。

（これほど巨大な探知結界を一人が維持するとは……さすがは神の力を持つ者というところだの）

先程の結界についての賞賛を述べるハイシエラ。

今更のように感じるが、飛び降りてから着地までの時間は数秒足らずだ。

「！？誰だっ！！」

「……お前、この魔剣の声が聞こえるのか？」

明らかにおかしいことなのに、何処かで納得してしまう自分が居る。

「魔剣だと？人の言葉を放つほどの剣など、並の人間族では操れぬはず……」

（その通りだの、並の人間では我は操れぬ……ならば聡い嬢ちゃんには察しもつこう。ふふっ……心当たりはないか。我は嬢ちゃんのような並々ならぬ魔力を持った娘を前に、血が滾っておるのだがの）

ただの変態のようにしか見えないぞ、ハイシエラ。

俺を凝視する視線は内面まで見透かそうと眼力を強めていく。――
ヒントぐらいはやろうか。

「感じるか……お前と同様に神の意識を内包したこの体を。気配を」
どこかで引っかかるものがあつたのか、釈然としない面持ちであつたエクリアがびくつと体を震わせ絶句した。

「もしや貴様は神殺し……いや、ありえぬ……」

（頭の回転と察しはいいようだの）

「ハイシエラ……それはもう答えを言っているのと同義だぞ」

（良いであろう。主が困るようなことでもあるのかの？）

「いや、別にないが？」

気が抜けたように呆然とこちらを眺めていたエクリア・フェミリンスはたと佇まいを正した。

放心していた己を恥じるように高められていく魔力。

合わせて俺はゆったりと刀へとその姿を変えた相棒を構える。

「一応確認しておく。お前はエクリアだな？」

エクリアと名前を呼ぶところを強調して尋ねる。

「？……如何にも……私がエクリアだ。——にして神殺しよ……この私を殺すことが目的ならば、御託など並べずさつさと斬りかけてくださいよろう」

「それもそうだったな。すまない」

「ふん……久々に戦いがいのある奴だ、せいぜい私を楽しませてくれ」

剣の節々が分かれ伸縮する連接剣を構えたエクリアは冷ややかな笑みを浮かべた。

「ふむ、美しい女性と剣舞を舞うのも風流なことかな……」

「無駄口を叩くな!!」

連接剣の刀身を分裂させる傍ら、片手に魔法の印を結ぶエクリア。

鞭のように飛んで来る連接剣をしゃがんで避け、後ろでに構えた刀で弾き、足元への攻撃を飛んで躲す。

当然そこまでは予想済みだろう。並列して行っていた魔法の詠唱を完成させて放ってくる。

辺りが真っ白に染まるほどの強い光を放つ純粋な魔力砲。

それをギリギリまで引き寄せ、この身に当たる直前に亜光速で動き彼女の後ろへと回る。

縦横斜めと薙を続ける。ふむ……このレベルを防ぐか……合格だ。

「はああああっ!!」

連接剣を俺に巻きつけるようにして飛ばしてくるエクリア。

それを光速移動しながら真上に飛び上がり、空を『蹴って』彼女の後ろへ回り、

「秘剣・峰之燕返し！」

剣技における極地の一つを峰打ちで披露する。

ただの技術だけで多重次元屈折現象を引き起こすこの技は本来人のみでは成せない物。

峰打ちとはいえ全く異なる軌跡を描く100にも及ぶ斬撃を、文字通り全く同時に全身に受けたのだ。

「グアアアッ！！」

多数の打撲による痛みによってエクリアはその身を地に伏せた。

また多数の斬撃に耐えられなかったであろう。

胸元の鎧はめくれ落ち、服も所々破れて、形の整った傷一つ無い乳房があらわとなり、素肌も晒され、見るも無残な状態になっている。

「——俺がやったこととはいえ」

（どう考えてもやりすぎだの……）

呆れるような相棒な声。

ついカッとなってやった。後悔はしていない、反省はしている。

裾から集気瓶を取り出す。赤い回復の羽の魔力が入っている瓶だ。

今の俺の格好は、f a t eのアサシンの和服を白と黒で構成したも

のだ。

だから裾は広いので、こんなことができたわけだ。

瓶の蓋を外し、瓶から魔力がもれないうちに彼女に押し当てる。

「んっ、あっ」

何故、このような声を上げたのかはわからないがとにかくステータス諸々は回復したようだ。

「……ん、はっ！？」

丁度、覗き込むような形でエクリアの顔を見つめていた俺の唇に何かが当たる感触。

それは、柔らかく、生暖かくて湿っているが不快なものではない。

つまり、何かというのはエクリアの唇だ。

想像以上に相性はいいらしい。何をせずとも触れ合ったところから魔力の親和が起こっている。

唇を合わせたまま至近距離で見つめ合うこと数秒。

やがて、何が起こっているのかを正確に認識し始めた彼女の顔は真っ赤になって行き、

ゆっくりと頭を下ろすことで俺の唇から彼女の唇を離す。

真っ赤にした顔でこちらを下から見上げる彼女に俺がかけた言葉は、

「えっと……とりあえず服を着な」

だった。

立ち上がりながら、彼女の着ていた服を服のかけらに残っていた記憶から再構成し、彼女に手渡す。もちろん胸当てとかも含めて。

「服……？つつつ！？」

そういつて、羞恥に染まる彼女の顔はとても年頃の乙女らしいものだった。

「——何故とどめを刺さなかった」

「戦意を失ったものにとどめを刺す気はない」

「負けを認めた。死を覚悟したのだ……戦士としてもこの私を辱める気か」

睨め付けてくるものの瞳に力がない。

どこかすべてを諦めてしまっているような、そんな気さえ感じさせる目立った。

絶望している要因としては、やはり神を身に背負っていることだろう……。

「お前の呪いは母親から受け継いだものらしいな」

「——そうだ、母も、その母から呪いを受け継いだ。フェミリンスという伝説の昔にまで遡る魔女から、延々と続いている呪いなのだ」

「呪いを解く方法は知らないのか？」

「唯一呪いを解く方法を知っていた母を、父上が……ラナート国王が宰相と共に殺した」

「自分で呪いを解く方法を探さなかったのか？」

「探した……だが見つからなかった。だからもういいのだ。もうどこで死のうと関係ない……私を慕っていたはずの民すら今は恐れ慄いている。人とは、そういうものならば……」

口を嚙んだエクリアの顔へ刻まれた冷笑には、狂気の沙汰が見え隠れしている。

（たった二十数年しか生きておらぬのに、ずいぶん殺伐とした小娘だの……）

陰湿に揺らめく影は神の意識に翻弄されたものなのか、それとも元々エクリアが抱えていたものであるのか。

おそらくは両方だろう。

「——エクリア。お前の生きる未来をもう少し先まで見たくなった」

「……」

「呪いを背負いながらどんな道を生きるのか……好きなように生きてみる。いつか……いつか、殺して欲しくなったら俺の所へ来い。その時は『フェミリンス』を殺してやるう」

さて、今の言い回しに気づくかどうか……まあ気づかないだろうな。

「じゃあな」

「——っ、神殺しよ！お前の、名は……？」

彼女はぺたりと座り込んだ姿勢のまま俺に尋ねてきた。

「——セリカ・シルフィル。またの名を全ノー零という」

もうこれ以上語ることはない。俺はエクリアに背を向け、カルツシヤの首都に向けて足を進めた。

03話 姫將軍エクリア（後書き）

硬結界

> 方囲！定礎！結！（ry

明らかにおかしいことなのに、何処かで納得してしまう自分が居る。
> 既に記憶にはない原作知識だが、デジャヴユやこういった形で影響する。

今の俺の格好は、f a t eのアサシンの和服を白と黒で構成したものだ。

> f a t eはテンプレ展開で何故かトリップ確率が通常の五倍だったので原作を覚えている。また、なぜか、f a t eのゲームが出ている世界も多かった。
らしい（笑）。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。
作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神探りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どいつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しま

せん。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

04話 流久の屋敷（前書き）

今話について

VERITAのAppend 2・Overの追加シナリオと序章の間の閑話になります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

04話 流久の屋敷

「戻ったぞ」

ルクレッティアの私室へと直接に転移する。

「お帰り」

現れるたびに可愛い声で驚いていた頃が懐かしい。最近ではすっかり慣れてしまつて。

「エクリア様はどうだった？」

「強い奴だったな……まあ問題も少々あったが大丈夫だ。殺してない」

「そう……ありがとう、零」

「どうしたんだいきなり」

「だって、貴方は約束を守ってくれたわ」

「そうか、それならばどういたしまして、だ」

しばらくお互いに無言の時間が続き、次に口を開いたのは俺だった。

「あの時の返事を聞こう」

「え……？」

「言っただろう、返事はすべてが終わってからだと」

その言葉で思い出したのだろう、彼女は顔を染めた。

「お前が欲しい。俺と共に行かないか？」

しばらく考えこみ、熟考し、そして彼女は答えた。

「でも……私はカルツシャの貴族よ。国を見捨てて貴方についていくななんてできないわ」

「ふっ……なるほどな」

お前らしい。

「この本をやろう」

裾から古めかしくも新しくも見えるなんと矛盾した神秘的な本が出てくる。

その本は表と裏で交差するように鎖で締められそれを鍵で閉められている。

「これは……？」

「如かるべき時に開くだろう。持っておけ」

ルクレティアはしばらく無言で神秘の本を見つめ、無言のままそれを手に取った。

「でわな……また逢おう、ルクレッティア」

俺は彼女の耳元でそう囁き、居なくなる。

その場に残った彼女を窓から注ぐ夕陽が優しく照らした。

それから三年が経った。

「ツつ！！」

突然の目覚めだった。城にいた時よりもずっと寝心地の良い寝台から跳ね起きる。

意識が覚醒して自分が生きていることに驚きを感じる。

なぜ？どうして？

次に場所だ。一体此処はどこなのだろう……。

貴族の屋敷にしては、少し変だ。

なんとというか言葉にすることは難しいが、違和感を感じる。

部屋の角から角へ至る全てが単色で構成されている普通の壁や天井であるはずなのに、美しく感じる。

部屋に置いてある家具もそう、その配置もそう。

全てが、至って普通のものである筈なのに違う。美しい、いえ、それも違う。

「起きたか」

「!？」

突然かけられる声。いや、彼は最初からこの部屋にいた。

「は、はい」

心を落ち着かせながらなんとか返事を返す。

「それは何よりだ」

彼はそう言い、続けてこう言った。

「ここは俺の屋敷だ……と言っても、辿りつけるものしかたどり着けないところにある。条件さえ満たせば、魂だけでも此処に来る可能性はあるのだ」

どういふことなのか、さっぱりわからない。

「その上、この屋敷には完全修復の術式もあるからな……」

「あ、あの」

「どうした？」

「私は、一体どうなっているのですか？確かに私はあの時に死んだはずですよ」

思い切って尋ねてみることにする。いったい自分はどうなっているのか。

「ああ、死んだよ。確かに死んだ。しかし、神の贄として死んだお前の魂は天に召されなかった。そうして、地方を彷徨うことになったお前の魂はここに迷い込んだ。この屋敷に入ったものは、たとえば魂だけだろうと、そのすべてを快復する。呼び寄せられたお前の魂が、この屋敷の法則に従ってその身を再構成した」

理解不能。それを理解しようとするには意味のわからない言葉が多すぎた。

いや、なんとなくは理解できた。だが、私はそれを信じることができなかった。

真実を知る好奇心と知りたくない恐怖心に挟まれながら聞いてみる。

「つまり、どういう事でしょうか……？」

「一回死んで、生き返ったのさ」

ここまで明確に言われれば、否が応にでも理解できてしまう。

「まあ、しばらくは此处にいろ。そのうちリウイとも会える」

「リウイと!？」

もう逢えない……そう思っていた最愛の人と会える。そう言われて私の心は舞い上がった。

「ついでにエクリアともな」

「っ!……姉さま……」

そうだった。私はお姉さまに殺された。一体どんな顔をして合えばいいのか。

「案ずるな、悪いようにはならん」

それは……、

「どういことですか？」

思わず聞いてしまった。

「そうだな……今の彼女はフェミリスだ。エクリアではない。今、リウイたちが交戦中だ。後数刻で辛勝するだろう。意識はエクリアにもどる。数ヶ月以内に奴は俺は暗殺の依頼を受けて彼女に会いに行くことになるだろう」

「待って下さい!それはお姉さまを殺すということですか!？」

つい、声を張り上げてしまっ。

「いや、殺さんよ。俺が殺すのはフェミリスにかけられた呪いだ

けだ」

「それは……まさか……」

フェミリンスの呪い……当然私は知っている。私はそれに殺されたようなものなのだから。

「少し休みな、頭が追いついてないだろう？」

たしかにそうだ。さつきから頭が混乱している。少し休んでしまいたかった。

「ではな」

そう言つて部屋を出ようとした彼に、私は、

「待って下さい！」

と声をかける。

部屋の戸に手をかけていた彼はそのままの姿勢で振り返った。

「あなたの……お名前は？」

「セリカ・シルフィル……またの名を全ノ一零。神殺しと言った方が分かりやすいかもしれん」

神殺し……私も何度かはその名を聞いたことがある。

まさか、伝説ともされる人に拾われるとは思わなかった。

そう思って再び見た部屋の戸にはもう彼ははいなかった。でも……、

「おやすみ」

と、どこかで優しく言われた気がした。

「（アイドスを復活させる）」

イリーナへの説明を一旦終え、自室へと帰ってきた俺はそんなことを言った。

（一体何を言い出すだの。どのような経緯でそのような考えに至ったのだ？）

呆れたようにそう反応するハイシェラ。

「思いつきだ。ま……そうと決まれば、早速始めよう」

（まで、準備物とかはないのかの）

「要らん。俺が誰だか忘れたか？」

（そうだったの……非常識を突っ走る主様だったの）

ひどい言い草だ。まあ否定しないが。むしろ積極的に肯定するが。

「時間開放」

まずは時間による縛りを解く。アイドスが死んだのはだいぶ昔のことだからな。

「仮想空間……決戦の地」

今いる自室を仮想的にアイドスとの決着を迎えた地とする。

これで空間的にも時間的にもアイドスが死んだ瞬間に接続した。

「対象指定……アイドスコア」

これから使用する術式の対象にアイドスの神核を選択し、

「神核再生」

その言葉と同時に、様々なものに汚されたアイドスの神核『得体の知れないもの』が再生される。

慈悲の大女神アイドス。

かつて戦いを繰り返す人々を姉である女神アストライアと共に諫めていた。

しかし、人々は戦いをやめることはなく、姉のアストライアは嘆き悲しみながら天へと帰ったが、それでもアイドスは諦めることなく地上に残ることを決意。

その時に姉に「人と現神と手を組んでも哀しい世界を変えてみせる」と強い意志を見せていた。

だが人々は彼女の言葉に耳を貸さずその意思を裏切り続ける。

『神は人々に影響を与え、人々は神々に影響を与える』

終に、増える一方の人々の悪意の影響を受けたアイドスは『雨露の器』へと姿を変える。

姿が変わる際、姿を保てなくなり崩壊し、魂は『得体の知れないもの』に、身体は『雨露の器』へ変わり2つに分離し、雨露の器は虚ろの器へと変貌する。
ウツロノウツロ

それでも世界から争いを無くすために、人々の感情を消し去ろうとしている。

そんなモノを再生し、

「器再生」

そして『虚ろの器』も再生される。

「融合」

それらが合わさり、歪んだ邪気を放つ女神が現れる。

（ぐっ、やはりきつい。かつて、一度は相対したがここまで強い邪気とは）

やはりハイシエラほどの魔剣でもキツイらしいな。

この工程はさつさと終わらせるとしよう。

「邪気浄化」

それにより、歪みに貯めこまれていた人々の悪意が浄化され昇華されていき、その身を歪ませていた原因がなくなったことにより、邪気も消えて行く。

「使徒契約……全行程完了」

（ふう……やはり主には常識がないようだの）

「失礼な言い方をするな……常識が通じないだけだ」

腕の中に横たわるアイドスの顔を撫でる。

どうやればあのような異形と成るのか説明がつかないほど、無垢で可愛い寝顔だ。

部屋の片隅に設置してある寝台に彼女を運び寝かせる。

「……………？」

おっと、起きたかな？

「……………はっ、此処は誰私はどこ？」

（あはははは、逆だの逆）

——スルーすることにした。

「目は、覚めたな？」

「——お姉さま？……違う……似てるけど」

「アストライアは生きてる。体は此処。神核は砕け散り各地へ。

魂は三つに裂かれ一つはここで眠り一つは地方を彷徨い一つは人の身へ転生している」

例を挙げるとすればルナ・クリアとかだろう。

「——あなたは？」

まさか、こいつ……、

「覚えてないのか？」

「なによ、あなたなんて知らないって……ば……」

「どうした？」

様子がおかしい。

「——あ……ああ……ああ……私……なんてことを」

——どうやら、思い出したようだが……また話が続かないな。

錯乱して、顔を真っ青にしていく彼女のそばに座り、抱き寄せ、頭を撫でる。

抵抗もなく胸元に収まった彼女は服を掴み、泣き始める。

「落ち着け……お前はよくやった。——あれにお前の非はない」

そう。彼女は悪くない。すべての根源たる悪は混沌や悪意を生み出した『ヒト』そのもの。

しかし、ヒトが『全ての負』を生み出すことも、世界に『全ての負』があるのも世の理。

それを悪だということもできない。

彼女の涙で俺の服は濡れていくがそれを気にせずに、強く抱きしめる。

「でも……でも……！」

「いい……いいんだ。もう過ぎたことさ」

俺達はそうして二人静かに抱き合っていた。

「セリカ」

まだ少し涙目涙声で一見ぶっきらぼうなように感じる物言いで、彼女に呼ばれる。

「なんだ？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

何に対する礼なのかさっぱりわからないが、とりあえず受け取っておく。

「それにしても……」

そこで一旦言葉を切り、俺の体をジロジロと舐め回すように凝視した後、

「雰囲気変わったわね……なんていうか、昔私を倒した時よりも神聖になっていく気がする。属性の話じゃなくて……なんていうか……そう。魂の位がずっとずっと上の……そんな感じがするの」

（ほう……なかなか鋭いの）

「流石分かるか……。あの後、数百年後かに一悶着あってな……」

ある時、セリカ・シルフィルというサティアの……アストライアの肉体を持った人に、

いろいろあって全ノーゼロという二人の人物の魂が衝突してな。融合した」

「へ？」

「だから、今のオレはセリカ・シルフィルであるとともに全ノーゼロ

という人だ」

しばらくの間、そうしてお互いに話をした。

今の「セリカ」という存在はなんなのか。

今はいつで、あれからどれくらい経っているのか。

此処は何処なのか。

姉は今どうしているのか。

これからはどうすればいいのか。

そんなことなどを話したりした。

「じゃあ、私はしばらくこの屋敷で暮らしてればいいのね」

「ああ、色々と施設はあるから暇はしないはずだ」

「わかったわ、貴方はこの後」

「ああ、とりあえず一年程は単独……ハイシエラはノーカンで、単独行動の予定だ」

着物の袖から取り出した首飾りを彼女の首に付ける。

「プレゼントだ」

「あ、ありがとう」

真っ赤になりながらおどおどと礼を言うアイドス。

「——似合ってるよ、綺麗だ」

「~~~~~!」

声にならない声を上げ、りんごのように顔を赤くして下を向く彼女は本当に可愛らしい。

ちょうど撫でやすい位置に頭があるのもチャームポイントだな。

「一応、装備品としての効果もあってだな。簡単に言うぞ、無敵、男避け、俺との念話、この屋敷の出入り……だな」

無敵は、悪い方にステータスが変動するのがなくなるといったところだ。

傷を負わない（HPが減らない）、状態異常ならない、疲れない（スタミナ減らない）、MP切れしない（MP減らない）、健康状態下がらないとかだな。

男避けは……そのまんまだ。美人だな程度には思つかもしれないがそれ以上の目で見られることがなくなる。

念話は話したいと思うだけで何時どこでどうしていようが俺と念話できるようになる。

この屋敷の出入りは、願うだけで発動する。

エウシュリーハウスとこの屋敷。その他行ったことのある所へに行ける転移魔法だ。

「じゃあ、いつてくるよ。イリーナと仲良くな」

「行つてらっしゃい」

まるで新婚のような雰囲気を漂わせながら俺は出立したのだった。

04話 流久の屋敷（後書き）

裾から古めかしくも新しくも見えるなんとも矛盾した神秘的な本が出てくる。

> 闇の書封印状態の茶色部分を白に変えたイメージ。
リリカル

Q・セリカに対するアイドスの好感度が高い

A・ZERO終了時点でセリカに対してある程度の好感度があったが、邪神化したのでかき消されていた。零セリカになったことで魅力も上がったのでそれが一気に増幅。——という設定。どうしてそうなったかは各自で妄想してくれ。

無敵

> ポケモンで言うなら、チート使って現在HPを999にし続けている状態。

新婚のような雰囲気

> アイドスについては上参照。零セリカは相手の好感度を無意識に感じ取って返答するからこれで正しい。

2011/9/10 「あ、ありがとう／／」↓「あ、ありがとう」
（変更）

2011/9/10 俺がここへ呼んだのだ↓ここに迷い込んだ（変更）

2011/9/10 それから三年が経った。（挿入）

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。

作者はファッションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どのつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどし願います。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

05話 日陰の遺跡（前書き）

今話について

VERTITAの序章になります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

05話 日陰の遺跡

フレスラント王国の国土の大半を占める広大なマータ砂漠。

戦いに敗れ祖国カルツシャを追放された私は、ある男を追ってこの地を訪れていた。

言葉は無い。ただ足音のみが響き渡る。

容赦なく照りつける太陽の下、私は数歩先に行く男を追って重い足を進める。

……暑い。砂漠の熱気に当てられて意識が揺らいでいるのが自分でも分かる。

汗など出る水分もないほど体はからからに乾いている。しかし……どうでもいい。

「……」

——不意に、男が足を止めて振り返った。

冷めたその眼差しを見て、彼がようやく『その気』になってくれたのかと私は期待した。

「やっと……叶えて、くれる……？」

「俺が殺すのはフェミリスだといったはずだ」

何度となく交わしたやりとり。いったいいつになったら彼は私の願いを叶えてくれるのだろう。

十年、二十年、五十年……百年や二百年先か。人ならぬ彼にはそう長くもない未来なのだろう。

けれども、私にとっては……。

それでも私は儚い希望にすがって、その日を待ち続ける。

私が背負った罪の報いとして。呪われた私が『彼女』にしたことへの罰として……。

だから……私は彼に願う……神を殺めて恐ろしい力を入れた彼に全てを委ねる――

「お願い……私を殺して……セリカ……」

呪われた私を断罪できる唯一の『救い』……。

神を殺し、その肉体を手に入れた者……セリカ・シルフィル。

そう……彼は神殺し――

意識を半ば失った若い女の頭を膝に乗せ、身を横たえる。

倒れた彼女を遺跡らしき建築物のある洞窟の影に運んできた。

日も陰って気温も下がってきたし、休ませれば大丈夫だろう。

彼女はエクリア・フェミリンス。この砂漠に隣接するカルツシャ王国の王女だ。

彼女の国は『幻燐戦争』と呼ばれる、光と闇の勢力が争った大戦乱のさなか、内紛を起こして敗北。

かつて俺は一度暗殺の依頼を受け彼女へ近づいたことがある。

その時は、彼女を殺めることなく見逃した。

その時に、『呪いを背負いながらどんな道を生きるのか……好きなように生きてみる。いつか……いつか、殺して欲しくなったら俺の所へ来い。その時はフェミリンスを殺してやるっ』と言った覚えがある。

追放の憂き目にあった彼女は、それを思い出し俺のところへとやってきた。

そんな彼女を俺は連れていくことにした。

同情とかではない。理屈とかではなく、魂で何かを感じたのだ。

それから俺達は『三人』であてのない旅をしている。

（どうじゃ、嬢ちゃんの様子は）

腰に差した剣からもう一人の同行者が『心話』で尋ねてきた。

「軽い熱中症だ。水分補給を怠っていたらしい」

何度か振り返って見たところでは、水が切れてから二日ほどずっと水分補給をしていなかったからな。

（主が気を使ってやらなくてどうする）

「だから、此处へ来たのだろう」

全てを超えし者たる俺は、一切の水分や栄養を必要としない。

食べることもあるがそれは生命活動ではなくあくまで娯楽の一つだ。

よって、俺は水など持たずに砂漠へ入った。

一方エクリアの方は、その身に宿る神の力で人よりは丈夫であるが、

健康を保つのに水分や栄養が必要だ。

戦時中、単独行動を経験したことはあるらしいが、「サバイバル」の経験はなかったらしい。

まして、その身一つで広大な砂漠を越えるという経験はある筈もない。

彼女が用意してきた水は少なく、三日もすると空となった。

俺が何度か水を創り出し彼女に手渡そうとしたが、受け取らず、ただただ「殺して」と繰り返すのみ。

仕方がなく、行き先を砂漠にしては多く水気を感じられるこの遺跡に変え、やってきた。

（そうか、ならばよい）

罪の意識……か。

人から外れた強い力を与えられ、その力が暴走し、多くの者を不幸にしただけでなく、彼女自身にとっても大切な人の命を奪った。…
…まあ、彼女は生きているが。

故に彼女は断罪を望んでいる。他者から与えられる死を。

俺は改めてエクリアを観察した。

砂漠の旅路で熱の籠もった身体は上気し、白い肌に赤みが差している。

衰弱した弱々しい人間の女。ただ、それだけだ。

さて……手段はいくらでもあるのだが、どれを使って「それ」を殺そうか。

そんなことを考えながら俺は彼女の頬に手を差し伸べ、その肌に直接触れた。

やはり俺とエクリアの相性はかなり良いらしい。前と同じく接触部分で魔力の親和が起こる。

サラツとした髪質の良い金のブロンドの長髪を梳きながら、彼女の

顔を眺める。

「ん……」

軽く息が漏れる。起きるようだ。

「……………？……………っ！」

「おはよう」

起き抜けに飛んできた平手を軽く受け流しながら言う。

「……………おはよう」

不機嫌に返事を返しながら、俺を睨んでくる。なにか悪いことをしたのだろうか……？

（主が悪いの、断りなくおなごにふれるからだ）

（此の様な事で目くじらを立てるような女は俺の周りにはいなかった……しかし気が強い奴だな）

（潔癖症だの）

「気が強い上に潔癖症で悪かったな」

（おっと、嬢ちゃん是我らの親和が聞こえるのであったな）

「ああ、聞こえている」

俺とハイシエラの心話は普通他者には聞こえないのだが、エクリアには聞こえてしまうらしい。

それも、彼女を連れていこうと思った理由の一つではある。

「少しは元気になったか？」

「……まだ気分が悪いけど、少し休めば平気よ……」

毅然と言いつつ、エクリアはぐったりと首を落とす。

俺を叩こうとしたことで体力を使い果たしたのだろう。

「どうして……なぜ触れていたのだ……」

「……特に理由はない……が、一種の癖だな」

今までの人生の中で、いい髪があれば撫でる。撫でやすい頭があれば撫でるなどの

もはや条件反射とさえいえる癖がいくつかできてしまっているからな。

いつだったか、ハイシエラにその説明をしたときは、

『一体何なんじゃそれは……』

と呆れたような諦めたような口を聞きながら、俺に髪を弄ばれていたな。

「……そのまま休んでいろ」

辺りを見渡すと、近くにきれいな水が湧いている。彼女が干からびることもないだろう。

崩れた柱や、砂に埋れ風化した石の床等も見える。が、古い街の遺跡とかではないだろう。

彼女を岩にもたれさせ、立ち上がる。

「……ええ」

この調子なら今日はこの辺りで野営することになるだろう。

「周囲におかしな魔獣がいないか様子を見てくる」

それを伝え俺は日陰の遺跡の奥地へと歩を進める。

水辺のすぐ近くにあるものを見つけて俺は近づいた。

帰還の門だ。備え付けのオーブに魔力を込めることによって、使用者を登録し。

対応している登録されたもの同士間での移動を可能とする装置。

ブレアードの関係する遺跡にあるもので、彼が開発者であろうと推測できる。

まあ、自前でテレポートが出来る俺には大して意味はないので無視することにした。

瓦礫に埋もれてよく見ることは出来ないが、扉があつたのだろう所へやってくる。

隙間から流れてくる空気が、さらに奥があることを知らせてくれた。

（どうやら瓦礫をのかせば中には入れそうなの）

たしかにそうだな。

……では退かすしよう。

ハイシエラを大剣の形に変え、瓦礫に向かって強く薙ぐ。

そこにあつた瓦礫は砕け、それなりの大きさの通り道となつた。

ハイシエラを腕輪の形状に戻し、その道を通る。

（ほう、このような場所に魔力の柱とは……）

そこを通り抜けると正方形の形のそれなりに広い部屋があり、

中央には青い捻れた石英状の透明な柱が立っていた。

その周りには風化し霞んではいるが、手書きであると思われる魔方阵の痕跡も見られる。

入って正面の左右には道があり、左の方は下に降りる梯子もかかっていた。

「それなりに広い遺跡のようだな」

そうやって少し遺跡を観察していると、右の道、つまり奥から緑の髪少女が現れ、此方の姿を確認するとともに元来た方向に逃げ去っていった。

「あれは……」

はつきりとは確認できなかったが、白い猫耳と白い尻尾を付けていたような気が……。

（どうやら獣人族の娘のようだの……砂漠では貴重な水源ゆえ、此処にはいきものも多く住み着いているのだろう）

このまま此処で立ち尽くしていても意味はない。

「追って見るとするか……」

両側に柱が立ち並ぶ、道を進む。

柱の殆どは崩れ落ち、それにもなって天井も抜け落ちている。

柱に道を塞がれた分かれ道もあったがそれを無視し、一直線に進む。

すると再び、先ほどと同じように魔力の柱がある正方形の部屋に辿り着いた。

どうやらここらは人工的に作られた回廊のようだな。魔力の柱も何本か立っていたのを確認した。

既に放棄されて久しいようだが……。

俺が部屋にたどり着くと同時に、その部屋を抜けた猫少女は壁に備え付けられたレバーを下ろし、

檻を下ろして道を塞いだ。猫少女はその檻の先で此方の様子を伺っている。

（あの猫め、道を塞ぎおったか）

仕掛けを解いても、檻を切っても良いのだが……ふむ……檻の隙間を通れる奴か……いたな。

彼女の召喚石は……ないんだったな。

仕方がない、高度召喚魔術を使うか。

「我望む。縁の下に汝此の場に現れん事を。汝の名はパズモ・ネメシス、小さき風妖精也」

丁度、顔の目の前あたりの空間が光り、彼女が呼び出される。

「……？……！？……！！………」

何が起こったのか一瞬理解できなかった彼女は次の瞬間目の前にいる俺に驚き、一体何があったのかは知らないが、感極まって俺の顔に抱きついてきた。

「久しぶりだな……パズモ。元気だったか？」

!

上下左右に飛び回り、身体全体を使って精一杯俺にそれを伝えようとする。

「そうか、俺も元気だったぞ。……ところでパズモ」

┐
?
└

「ペルルも呼んだほうがいいか？」

確かこの二人は一緒に行動している筈。急に片方がいなくなったら
びっくりするだろう。

..... ! ! ! ! !

忘れてやんなよ……まあいい、さっさと呼ぶか。

「我望む。縁の下に汝此の場に現れん事を。汝の名はペルル。……」

愛称『手羽先』

「手羽先って言うなー！ってあれ？セリ力？」

「U、T」

「セリカセリカセリカー！！」

ペルルはそう言って、俺の胸に飛び込んできた。

「会いたかったように会いたかったように……」

そう言っただけ泣き始めるペルル。俺はそんな彼女をそっと抱き寄せる。

「ああ、俺も会いたかったぞ」

俺はペルルの頭を撫でながらそう言った。

いつの間にかパズモも左の肩に抱きついて、

俺達はしばらくそうして身を寄せ合っていた。

それから五分後。最初に口を開いたのはペルルだった。

「あれ？　そういえばセリカ」

「なんだ？」

「……もしかして、感情戻った？」

ああ、その説明も必要なのか……ハイシエラ、よろしく。

（やれやれ、そう言った説明はお主がせんかい）

「……………！！！」

（おう、久しぶりだね）

それから三十分ほどを説明に費やし、その後、

「あれ？　そういえばなんで私たちを呼んだの？」

「なんだ、嬉しくなかったのか？」

「そうじゃないよ！そうじゃないけど……」

「まあ、呼びたかったのが一番大きい。表向きの理由はパズモに檻抜けしてもらえばいいな」と

そう言つて、閉じられた道を指刺した。

「……？」 意識（向こうのバーをあげたらいいの？）

「そうだ、お願いできるか？」

「……」 わかった 意識

パズモがフワフワとその背中の羽を動かして檻の向こうへ飛んでいき、その小さい体でレバーを下ろす。

どこにそんな力が？と思うが装備品のブーストと魔力補助だろうと当たりを付ける。

ガタン

そんな音が響いて、歯車が回る音を出しながら檻は上がっていった。

「さて、行くか」

「うん！」

「……！」

ちなみに猫少女はいつの間にかどこかへ去っていた。

「！」「セリカ」

「わかつている」

この回廊の奥に力のありそうな異質な気配が感じられる。魔神程の強さではないようだが……。

敵意があるなら片付けてしまつか。

回廊を進んでいくとまた魔力の柱が見つかった。

同じように床の魔方陣は劣化しているようだが、柱の方には魔力が通っており、柱の表面に魔法文字の一種が浮かび上がって、柱全体が光っている。

「生き残っていたというよりこれは……」

（何者かが蘇らせたのであろう）

「しかし、奥から感じる気配には、こいつを蘇らせるだけの知性は感じられない……」

しかも魔力の柱の状態を見るに蘇らせられたのはつい最近のことだと思われる。

「……ともかく、気をつけて行こう」

「はい」「……！」

俺は、魔力の柱に触れずに、その場を通り過ぎた。

少し過ぎると神殿風に作られた部屋のような所へやってきた。

ゼルダの伝説の神殿とかを思い浮かべれば分かりやすい。

俺はたまに、たまにこういう神殿を作るような奴らの気持ちが本気で分からなくなる時がある。

神殿とか宗教的なものならまだいい。俺もたまに作るしな。

神殿風回廊ってなんだよ。回廊作るならもつと機能的に計算しろよ。

そう思って、過去に同じような感じでとある人に聞いてみたところ、

「ん〜なんでかな……まあ、なんとなく？気まぐれって感じ？」

とのことだった。要するにちよつとしたお茶目らしい。

部屋の周りに階段が配置されている部屋で、後から水位が上がったのだろう。

一番下の階層は膝くらいの高さまで水に浸されていた。

ところどころに宝箱も見あたるが、無視。

俺は魔の気配の方向に一直線に進んでいった。

右の階段を降りその途中にある道へ進んで行く。進んで行くと左右に道が分かれておりそれを左へ。

そのまま道なりに進んだところに帰還の門と回復の羽のある部屋へ到達し、その部屋の奥にある扉を押し開ける。

「それなりに強い魔の気配だね」

「ちよつと力のある雑魚とも言つがな」

「www」

おい、妖精それでいいのか？本当にwwwなんて使っていいのか？

……スルーしよう。

扉の先にある長い階段を登る。登りきって少し道なりに進んだ先に祭壇があつた。

正八角形の床、それに内接するように正四角形の頂点上に配置された魔力の柱。

その正四角形に内接するように描かれた円状の魔法文字。

どう考えても祭壇だ。

その中央には、植物なのだろうか？葉の形状をしたものを背中に七枚羽のように付けられており、下半身は木の蔓が絡まり合っていて出来ているように見える。

どうやら顔と腕らしきものはあるが、スライム状のもので形作られており、歪な配置ではあるが見た目がまともなのは牙だけだった。

俺の姿を見た魔獣は敵意を剥き出しにして牙を剥いた。

気持ちの悪いことに魔獣は益々興奮し、荒れ狂うままに襲いかかってきた。

戦闘狂、美少女以外、お断り。

五七五になってしまったが、そんなことを思いながら4096等分に切り捨てる。

切り捨てられた魔獣は4096等分のまま色が失われていき灰色となった。

うしろから覚えのある魔力が近づいてくる。

どうやらエクリアが俺たちを追ってきたようだ。

顔色は良くなっている。

「うっ」

バラバラでかなりグロテスクなことになっている魔獣の残骸を見てエクリアが顔を顰める。

「……これは……ブレアードの魔獣か」

「カッサレか……」

あの一族は揃いも揃って変態ばかりだからな。

「セリカ……」

それを見たペルルが心配そうに俺の名を呼ぶ。

「大丈夫だ、ペルル」

かつてレスペレント地方に君臨した闇の大魔術師。

レスペレント地方に広大な地下迷宮を建設し、数多の魔族を召喚して姫神フェミリスと凄まじい戦いを繰り広げた。

自らの欲のためには他の犠牲を厭わない。デイル＝リフィーナの邪悪な魔術師の典型である。

その欲と嫉妬から魔力を奪おうと姫神に挑むも、初戦はあえなく敗退。

東のモルテニア地方に潜み、そこからブレアード迷宮を建設し、グラザやディアーネなど魔神をはじめ数多の魔族を召喚した。

その後長い戦いの末にいに姫神を下したが、その膨大すぎる魔力はとても奪うことができず、その怒りから姫神に殺戮の魔女の呪いをかける。

姫神を下した後はテリイオ台地の麓にある迷宮「野望の間」の地下百階にて、魔人と化した姿で意識を保ったまま何故か長い間潜んでいる。……その理由は不明である。

一応史実として残っている歴史では、人間の守護神フェミリンスが亜人や魔族等の迫害を黙認していたことに対して立ち上がった彼は、十の魔神を呼び出し万の魔物を率いて再三に渡る戦いの後フェミリンスを打ち破った、とされている。

「こいつは門番だな。此処に何かがあるかもしれないことは覚えておこう」

「それにしても……遺跡は深い眠りについていたはずなのに、どうして目覚めているのか……」

さてな、ブレードが再び表舞台にたとうとしているのが原因か、深凌の楔魔が再び轟き始めているのが原因か、まあ、いずれにせよ推測だしな。

「今日は野営だ。さっさともどるぞ」

そう言つて、俺はその場に背を向け元来た道を戻り始めた。

ゆっくりと後ろから付いてくる気配を感じながら。

05話 日陰の遺跡（後書き）

手羽先

> [Wiki](#) 参照

Q・性格がおかしい

A・ZEROは一年くらい前にやったままなので性格を余り覚えていません。永焰の戦姫で軽くおさらいした程度です。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないのが下手なすれは「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どのつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点にお願いします。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

06話 もう一つの始まり（前書き）

意見をくださった方すみません。

色々悩んだ末に、一旦こっちを投稿してみてから考えよう…と思いました。

一応既にダイジェストはできてますが、内容を濃くしたいので、ここだけ適当に……というのは納得がいかなかったのです。

とはいえ、次の話からオリ展開を突っ込むので文章的にも展開的にもリウイサイドで完全に一致するのはこの話だけとなります。意見をくださった方本当にすみませんでした。

では、本編をどうぞ。

今話について

VERITAの一章、リウイサイド前半になります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシエラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシエラ思考

「「」」 セリカ思考

06話 もう一つの始まり

後に『幻燐戦争』と呼ばれる戦いがあった。

その戦いは、姫神フェミリンスの血を代々受け継ぎ、光の勢力に属するカルツシャ王国と、闇勢力であるメンフィルの対立から始まった。

レスペレント地方を統べるカルツシャ王国はメンフィルを攻め、対するメンフィル王国も、光勢力からの弾圧をはね除けようと交戦。

両勢力の争いは大きな戦乱へと発展し、メンフィル王国の勝利で終結した。

その戦争の中で、両勢力の間で苦しみ翻弄されながら、理想を貫きとうしたものがいた。

そう、いたのだ。

彼女の名はイリーナ・マーシルン。

カルツシャの第三王女であり、自らもフェミリンスの血を受け継ぐ彼女は、奪われるようにリウイ王の元へ嫁ぎ、

その後、リウイ王最愛の妻として、メンフィル王国が目指す人と魔の融和という理想の道標となった。

しかし志半ばにして彼女は命を絶たれた。実の姉エクリア・フェミリンスの手によって。

最終決戦の地となったフェミリス神殿。

姫神の血を暴走させたカルツシャ王国第一王女エクリア・フェミリスは、その矛先を実の妹イリーナへと向けることになる。

流されたイリーナの血——フェミリス血族の血は、姫神の覚醒を促し、戦闘を激化させた。

そして決着の時を迎えた……

「……ねえリウイ、どうしちゃたの？」

——呼びかけられた声に目を開く。そこに惨劇の光景はない。

最終決戦地となったここフェミリス神殿には、いまだ戦いの爪痕が残っている。

あれから一年。記憶は鮮やかなままだ。

「大丈夫だ。少し感傷に浸っていたただけだ」

イリーナ……メンフィル王妃イリーナ・マーシルン。俺の妻だった人。

彼女と出会うことで、それまで憎しみを糧として戦っていた俺は初めて理想を描いた。

最愛の妻であり、良き理解者であり、共に理想を目指す伴侶だった。

このフェミリス神殿でイリーナは非業の刃で貫かれた。……実の姉エクリアの手によって。

——彼女の指が少しずつ冷たくなっていった感触を、俺は忘れない。

ラウルバーシュ大陸、レスペレント地方。

この地は永らく人間によって統治され、亜人間族や魔族は迫害を受けていた。

人と魔神の子である俺——リウイ・マーシルンも例外ではなく、母と共に酷い迫害を受けた。

母は人間だ。だが同じ人間族から弾圧され、それでも俺を庇い、必死に育ててくれた。

唯一の拠り所であったその母が人間族の手によって殺され、俺は人間族への復讐を誓った。

成長した俺は闇夜の眷属らと徒党を組んで憎き人間たちに反乱を起こし、メンフィル王国の王座を奪った。

その過程で、メンフィルに嫁ぐ筈だったカルツシャ王国第三王女イリーナ姫と出会い、妻として迎えた。

彼女と出会い理解し合えたことで、俺は変わることが出来た。

それまで人間族を憎むだけだった俺は、自分の本当の願いに気付かされた。

それは魔と人が共存できる世界。俺はその理想のため、イリーナと共に歩み始めた。

だがイリーナの母国カルツシャを始めとした諸国は、俺のような半魔人が支配する国の誕生を喜ぶはずもなかった。

カルツシャの第一王女『姫將軍』エクリアが中心となり対メンフィル連合が成立。

圧倒的な不利が予想されたため俺は先手を打って攻勢に出た。

後に『幻燐戦争』と呼ばれる大戦争が勃発した。

俺とイリーナ、それに人間と闇夜の眷属との共存という理想を信じた仲間たちは、

カルツシャを打倒して勝利を収めた。

版図と発言力を大きく増したメンフィル王国は、レスペレント地方の最大国家となり、

理想を目指して諸国を導いている。

だが、その代償は大きく……俺は己の半身を永遠に失った……。

「まだイリーナのこと引きずっているのね……それも当然か」

彼女はカーリアン。まだ人間族と対立する前の一集団でしかなかった俺たちと共に戦ってきた戦友だ。

睡魔族と悪魔族の混血児である彼女の生き方はまさに風来坊だが、大事な時は常に傍にいてくれる。

俺とイリーナの目指す理想も早くから理解してくれた。俺にとって姉のような存在だ。

「陛下にとってイリーナ様は最愛の方でいらっしやいましたから…」

もう一人の同行者、シルフィアも傍にやってきた。二人とも、俺に氣を使つて離れていたのだろう。

出会った時のシルフィアは、今も敵対する軍神マーズテリアの聖騎士であり、メンフィルの主権を争つて剣を交えた。

だが、現在ではメンフィル国民や共存の理想に共感し、俺の軍門に下っている。

「時間を取らせてすまなかつたな。そろそろカルツシャ領の視察に戻ろう」

「私たちなら気にしなくてもいいのよ？」

「いや、もういい。近くを通つたから寄つてみただけだしな。王としてやるべきことは山ほどある。そうだな、シルフィア」

「はい、陛下にご決裁いただかなければならないことは増えております。私たちが預っている土地も広大になりました」

戦争に勝ち、領土を広げていくに従い、懸念も増える。王としての執務は増える一方だ。

これも理想のためではあるが、忙殺される毎日といえよう。

「ちゃんと王様のお仕事しなくちゃってことね。偉いわねえ」

「いつまでも弟扱いするな……」

「あーら、私にとってリウイはいつまでも弟よん」

親しさを振りまくカーリアンと、鬱陶しがる俺を見つめ、シルフィアが微笑んでいる。

「……行くぞ」

気恥ずかしさもあって、俺はカーリアンを置き去るように歩き出した。

「ちょっと、置いてかないで!」

護衛兵のところへ向かう途中、立ち止まって妻を失ったこの地をもう一度顧みた。

「きゃん!急に立ち止まらないでよ!」

「陛下?どうなさいましたか」

「……ここまでよく来たものだと思ってな」

俺はこれまでの戦いを振り返った。

平穏な日々などなかった。皆を率いる王としても、虐げられる闇夜の眷属としても。

だが俺たちは理想のために歩んできたのだ。

「そうね……厳しい戦いだったわ」

「失うのも大きかったです、陛下は苦難の道乗り越えられて立派になりました」

「いつもピーピー泣いてたりウイが、今やレスペレントーの王様だものねえ」

カーリアンの言葉に苦笑する。俺が王になっても態度が変わらないのは彼女くらいなものだ。

「陛下は私が去った後も、メンフィルや諸国の民を正しく導いてくださると信じております」

「シルフィア……」

——シルフィアもまた、この戦争で失うものの中に名を連ねることになる。

シルフィアは己の信念に従い、先の戦争の間も俺に従って戦った。

しかし彼女の信仰する軍神マーズテリアの神殿と、俺達のような闇夜の眷属は敵同士だ。

神殿はシルフィアの破門を公に告知し、メンフィル王国にも通達してきている。

シルフィアにとって破門は処刑と同義だ。

彼女はマーズテリア神の神格位を授けられることで不老を得、

祖国の誕生から現在まで二百年余りを生きて見守ってきた。

破門となれば神格位を返還し、本来の寿命に従ってすみやかな『死』を迎えることになる。

そのための死者はまもなくやってこよう。

「リウイ……何とかならないの？あなただってシルフィアを助けた
いと思ってるんでしょ？私も戦友を失いたくないわよ……」

「ありがとう。でも、もう決まったことです。私は信じて進んだ道
を後悔していません。陛下やあなたと背中を合わせて戦えたこと……
…こういつては不謹慎ですが、本当に嬉しかったのです」

「リウイ……」

カーリアンが泣きそうな顔で俺を見つめる。

だが俺はそれに応じられない。王としてシルフィアを救えないのは
分かっている。

メンフィルと友邦は多くの民族、種族、宗教を抱えて成り立ってい

る。

メンフィルの支配地域にはマーステリアだけでなく光の現神の使徒も少なくない。

特定の勢力との決定的な対決は、人と魔の融和という俺達の理想のためには避けなければならない。

シルフィアもその理想のために力を貸してくれた。

シルフィアを救うためにマーステリアと対決すれば、結局は彼女の意味を否定することに他ならない。

……しかし、俺とて気持ちはカーリアンと一緒にだ。

「陛下、そろそろ視察へ戻られませんか」

「……そうだな、兵士を待たせている。カーリアン」

「……うん」

ここは嫌なことばかりを思い起こされる。来るべきではなかったな。

カルツシャでの予定を早く終わらせてメンフィルに戻りたい。

とその時、何かがつねるような声が聞こえた気がした。

「ん？何か……感じなかったか」

「たぶん獣か魔物の声ね」

「私にも感じられました。奥で戦いが起きているようですね」

「まーた何か奥から湧いて出てきたかな。ブレアード迷宮ってほんと厄介よね」

「よし、俺とカーリアンで様子を見てこよう。シルフィアは兵士らを指揮してここで待機だ」

「畏まりました。……お二人だけでよろしいのですか？」

「心配しなくても大丈夫。王様が王宮では姫や側室の相手で忙しかったからって、つまみ食いはいしないわ」

「執務ばかりで剣が鈍ったなどと言われたくないからな。たまには良いだろう」

「はい。ではお気を付けください」

俺たちはそう言って水の流れる聖堂を進み始める。

左右で道が分かれているが、左の道は途中で崩れてしまっているため右の道をすすんだ。

この道はまっすぐなので迷うこともない。俺たちは走り抜けるようにして通り抜け、階段を上った。

階段を上った先は左側のみちとの合流点となっており、中央にある女神像の真正面には回復の羽。

奥へと進む下降りの階段の手前には巨大な魔物が立ちふさがっている。

青い鱗で覆われ、バチバチと雷を鳴らす龍。サンダードラゴンか。

「あら？思ったよりも大物みたい」

「先ほどの気配はこいつのものか……？」

いや、この奥からさらに強い気配を感じる。

「どうやらこの奥に、こいつが守らなければならない何かがあるようだな」

「ふうん、それなら退屈しないで済みそうね、リウイ……机に向かいっぱなしで剣の使い方、忘れてないでしょうね？」

「お前に言われずとも、戦い方くらい覚えているさ。行くぞ！」

数分後…

俺達は雷竜を倒し先へと進んでいた。

心配していた剣術の腕もそれほど訛っていることはなく、

少し戦っているだけで実戦の感覚も取り戻せていた。

「む、あれが報告にあった転移門か。魔物や盗賊などが入り込まないようにブロックで塞いでいるのだったな」

……しかしこれは塞いでいると言えるのだろうか。

………

気にしないことにしよう。

俺はその先へ急いだ。

——階段を降りるとそこはモワツとした霧で満たされていた。

通路の途中に惨殺された死体が数体、無造作に打ち捨てられていた。

「これは……」

急いで駆け寄り様子を伺ってみる。

「今し方、やれたばかりみたいね……これが戦っていた気配の元だったのかしら」

残留している魔力の密度、地面につけられた傷跡からもカーリアンの言葉通りだろう。

死体は、位の高そうな法衣を着た人型の女性ばかりが数体。

首や胴体が綺麗なまでに切断されているのが致命傷のようだが、血は何故か出ていない。

切断面から見て取れる体内は空洞のようになっている。人為的に作られた傀儡人形の類だろうか。

「リウイ、こつちでも死んでいるわ。こいつらって何かな」

「フェミリンス神殿に関係しているのは間違いない。……守護者か？」

法衣をよく見るとフェミリンスを象徴する紋章が書かれていた。

この者たちが封じていた何者かが覚醒し、この惨状を作り出したとしたら……。

この迷宮の地下で何かが起きている。用心して進んでいこう。

その先の階段を三つ降りた先には、何かが置かれていたと思われるような屋根付きの祭壇があった。

迷宮の奥に気配を感じて足を止めた。カーリアンも気付いたようだ。

「お出まして訳ね。……いわ、ゾクゾクしちゃう」

「油断するなよ、並の魔物じゃない」

そこらの魔物とは異質な存在感が、自らを誇示するように漂っている。

それは邪気や殺気のような敵意を含んだものではなく、

親しみさえ感じてしまいそうなほど馴染みのある気配だ。

……ずっと昔に感じたものに似ているが、思い出せない。

「……お兄ちゃん。やっと会えたね」

声に振り返った。

そこには、まだあどけないとも映る少女が高いところに腰掛けて俺を見据えている。

「へっ？リウイに妹がいたなんて知らなかったわ」

「俺も知らんな。誰かと間違えているのだろう」

「うっん……フェミリンスの匂いもするとは思わなかったけど、大好きな人」

「お前は誰だ」

「エヴリーヌの名前を忘れたの？」

乏しい表情のまま、淡々と告げる少女。その瞳はひたむきに俺を捉えて話さない。

しかし彼女がただの少女でないことは、その内から滲み出る魔力からも分かる。

……人間では足元にも及ばない恐ろしいまでの力だ。

「迷宮で惨殺されていた者たちもお前の仕業か」

「……一緒に遊んであげただけだよ……ねえ……お兄ちゃんもエヴリーヌたちと遊ぼうよ」

岩が歯ぎしりするような音がして上を見上げると、大きな棺が浮かんでいるのが目に入る。

なるほど、祭壇に置かれていたのはその石棺か。

その棺にひびが複雑に走り出し、小さな破片を生んでいく。

「リウイ、来るわよ！」

「きゃは……出ておいで……」

棺が砕け、中から飛び出た大きな影が俺たちに飛び掛ってきた！

06話 もう一つの始まり（後書き）

……しかしこれは塞いでいると言えるのだろうか。

> やった人なら分かるだろう。引つ張って動かせるブロック八個で囲んでるだけ。セキュリティ低すぎ（笑）

次の更新は日曜日の午前0時です。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どのつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、ディルリフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文書のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば

は感想の悪い点にお願いします。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はごしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

07話 手紙（前書き）

今話について

VERTICAの一章、リウイサイド後半になります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

07話 手紙

まあ、それなりに強い相手だったが、俺の敵ではなかった。

それはカーリアンも同じらしく、余裕を持って撃退した。

「ふえ……お兄ちゃん、強いね」

戦いを眺めていた少女は、小さい手を叩いた。

「なら、もっと出してあげるね」

少女が口元を小さく歪めて、手を軽く振った。

すると彼女を囲むように棺が十個ほど、何処からともなく空を駆けて集まる。

——たちまち砕け、先ほど戦った敵と同じ姿が十体現れた。

「……エヴリーヌも行くよ。きやは……！」

エヴリーヌの魔力が高まっていく……！

少女の中にどれほどの力を宿していたのか、その魔力の量は魔神級。

周囲に控える魔物を千体集めても届かない。

「冗談じゃないわよ、ちょっと……」

行くなり膨れ上がったその気配に、焦ったように言うカーリアン。
魔物だけなら何体いても対処できたが、さすがにこれは洒落にならない。

「大丈夫だよ、お兄ちゃんは殺さないもん……そっちのお姉ちゃん
は知らない……それじゃあ——」

「——エヴリーヌ。そろそろ戻りますよ」

響いた声にエヴリーヌは動きを止めて、上を見上げた。

新たに天井の闇から降り立ったのはエヴリーヌと何処か似た雰囲気
を持った男。

「……パイモンお兄ちゃん、起きたんだね。……お家に帰るの？」

「ええ、厄介な方が近づいてきていますから。でもその前にご挨拶
をしてからにしましょう」

油断無く構える俺とカーリアンを牽制するように目を向けてくる。

こいつもエヴリーヌと同等の魔力を……！

「お初におめに掛かります、リウイ王、それと剣士のお嬢さん。私
はパイモン、『深凌の楔魔』が一柱。以後お見知りおきを」

パイモンが優雅に一礼すると、隣にいるエヴリーヌも合わせてちょ
こんと頭を下げてみせた。

「では私達はこれで」

「待て、お前らは——」

「我らのことが知りたいたのでしたら、貴方の配下にいる女魔神にお伺いください……」

「……お兄ちゃん、今度また遊んでね……」

エヴリーヌとパイモンはすつと天井の方へ浮かび上がると、光の届かない闇に姿を消した。

……気配と魔力もまた同時に消え去る。

「『深凌の楔魔』は去ってしまったか。……まあいい、そのうち会えるだろう」

声にばつと振り返る。

十メートルほど先に、赤髪に仮面をかぶった者。

その仮面の趣向は悪趣味にもエキリア・フェミリンスの被っていた物と同じだ。

黒いマントで包みこむように体を覆い、周りの闇と重なって保護色のようになっている。

性別はわからない。闇のせいで体型はよく見えないし、声も中性的だ。

しかし俺にそんなことを考えている余裕はなかった。

この男は一体何処からやってきた？ 気配も魔力も感じられず、突然現れたようにも思える。

「まあ、分かりきっているが一応確認しておこう……お前がメンフィル国王リウイ・マーシルンだな」

油断無く警戒の体制を取り、いつでも剣を抜ける体勢にしながら答える。

「……そうだ」

なんとというか気持ち悪い。先程の二人とは違い、一切のプレッシャーを感じ無い。

まるで存在自体が嘘であるかのような気持ち悪さだ。

「ある人からの手紙を預かっている。受け取れ」

どうやってそれを成し遂げたのだろうか。紙で出来ているはずの便箋を一直線に飛ばしてきた。

どうにかして受け止める。先方もそれは読めていたのだろうか。

「要件は済んだ。帰らせてもらおう」

ずっと警戒して睨みつけていたにもかかわらず、いつの間にか彼はその場から消えていた。

「奴は何者だつたんだ……？」

手の中に残る手紙を見つめながらそう呟く。

「リウイ？なあにその手紙」

カーリアンが声を掛けてくる。

「お前も一緒に見ただろう」

「何の話？」

どういう事だ？彼女はあの男のことを覚えていないのか？

「仮面をつけた者が現れて俺に渡してきただろう」

「知らないわよ」

まさか……あの場には俺と奴しかいなかったということか……？

「そうか……ならいい。俺の勘違いのようだ」

こじれさせないようにそこで話を切る。しかし奴は何者だったんだ……？

答えのない疑問を再び自問自答する。

「それにしても、あのまま二人相手にしてたら、ちょっとまずかったわね」

「そうだな。また得体のしれないのが出てきたものだ」

大きな魔力を持つ二柱の魔神、実力の読めない何者か。

「あいつらは光の神殿側じゃなさそうね」

カーリアンの言葉に頷く。……ひとまず俺達も引き上げよう。

——シルフィアと合流してフェミリス神殿を出た俺は、二つの目的のために伝令や魔術による指示を飛ばした。

一つは、カルツシャ周辺、メンフィル本国や同盟国の支配地域で異変が起きていないか、情報を集めるため。もうもう一つは、ある人物を呼び寄せるため。

「——メンフィル国王よ、来てやったぞ。何用だ」

「少々聞きたいことがあったのでな」

「ふん。聞きたいことがあれば己から出向けば良いものを……遠路飛んで来るのも楽ではない」

反抗的な彼女は魔神ディアーネ。

先の幻燐戦争では敵対し、屈服させた今は俺の気か麾下として一翼を担っている。

「『深凌の楔魔』について知っていることを教えてくれ」

「……えらく懐かしい響きだな。そのような呼ばれ方もあったか」

ディアーネは目を細めて遠くを見るような表情を見せた。

「我やお主の父だった亡きグラザが、魔術師ブレアードによって召喚されたのはお主も知っていたでしょう」

「姫神フェミリンスと戦うためだったな」

「そうじゃ。ブレアードの呼び出された魔神は我を含めて十柱、それらは『深凌の楔魔』と呼ばれておった」

千年もの昔、この地方では姫神フェミリンスと魔術師ブレアードが覇権を掛けて三度争ったという。

「ブレアードはお前たち魔神を喚び、地下に大迷宮を構築してフェミリンスに打ち勝った」

「聞けばフェミリンス神殿と繋がる迷宮へ行ったそうじゃな。あの神殿と迷宮が繋がったのは確か二度目の大戦であつたか」

「ふむ……。魔神のことをもつと聞きたいが、エヴリーヌやパイモンを知っているか」

「小娘と小賢しい男だな、知っておるぞ。あんなやつらが我より上位で扱われていたとは今でも不愉快だ」

「どういうことだ？」

「ブレアードは喚び出した我らの力を勝手に見定め、下らぬ序列を決めて扱った」

「あいつらの序列は？」

「エヴリーヌが序列五位、パイモンが六位だ」

少女の方が上位とは意外だ。外見にとらわれてはいけないということか。

「お前と、父……グラザは？」

「グラザは四位。我は……九位だ。だが序列などブレアードが勝手に決めたこと。今の我はあの時とは違うぞ！」

序列が今の実力と異なるにしても、連中の実力がこのディアーネと同格かそれ以上なのは間違いない。

しかも全員で十柱ならば、ディアーネと亡き父を除いたとしても、まだ八柱はいることになる。敵に回ると厄介だな。

「しかし何故、今頃になって連中が現れたのだ？」

「先の大戦でフェミリンスの力が弱まったせいであろう。我らはフェミリンスと、裏切ったブレアードの力で封じられていたからな」

エクリアが宿した姫神フェミリンスの力を、俺達が打ち破ったからか。

「奴らの目的は何だ。エヴリーヌとパイモンは行動を共にしているようだったが」

「我が知っているわけが無かるう。召喚されたときはブレアードに契約で縛られていたが、今となつては勝手に動いていよう」

「かつてのお前のようにだな」

鼻を鳴らしてディアーネが肯定する。ディアーネはかつて魔族国を築いて近隣諸国を脅かしていた。

ディアーネは雑兵など睨んだだけで簡単に石化させる。魔神を止められる者はほとんどいまい。

「領土を魔神に好き勝手されてはたまらん。連中の目的を知る必要があるな……」

「目的のう……パイモンは何を企んでいるか常に読めぬ男。エヴリ―又は気分のまま、たいして考えておらぬ。だが、もしあ奴も目覚めているなら、何かを指して動いているかもしれぬ……」

「あ奴とは誰だ」

「……ザハーニウ。序列は第一位……『深凌の楔魔』を束ねし魔神だ」

名を告げることさえ恐れるように、勇猛で知られるディアーネが小さく身震いをする。

「せいぜい気をつけるがいい。奴は我が認めるほど格が違うぞ」

「憶えておこう。さし当たっては拠点や居場所を突き止めるため、動きを掴みたいところだが……」

「ならばフェミリス直系の女に注意を払ったほうがよからう。全員とは言えぬが、フェミリスに強い憎しみを抱き、その血筋を狙う奴が出てくるかもしれぬ」

フェミリス直系の女とは、すなわちカルツシャ王国の三王女。

長女エクリアはカルツシャから追放後、南方の砂漠地帯で姿を目撃されたという報告がある。

次女セリーヌは病弱な身体のため、カルツシャ国内の静養地で過ごしている。

彼女はメンフィルの厳重な管理下にある。

三女イリーナは俺の妻で……もうこの世にはいない。

「エクリアだけは離れているな……」

先の大戦で生死をかけて戦った因縁の人物、その縁はまだ切れていないのか。

妻を殺した相手……しかし彼女もフェミリスの呪いに操られた犠牲者だった。

その呪いを解こうとしたこともあったが失敗している。

……複雑な感情がうずまき、未だに解けていない。

「あの憎き女を監視するのかえ」

監視しておけば、もしエクリアの下に『深凌の楔魔』の誰かが現れた時に何か情報を得られる可能性がある。

適任なのは……目の前にいるディアーネだな。実力に加え、相手の手の内もある程度読めるだろう。さて……どうする？

「当面は放っておくか。まだ具体的な動きがあるわけでもない……。エクリアがどうなろうと、知ったことでもない」

「ふむ……むしろ、才主の代わりに敵をとってくれるやも知れぬな。……これは失言であつたか。では我は城に変えるぞ。これ以上ここにいては、嫌な『匂い』が鼻中に染み付くわ！」

ディアーネは翼を羽ばたかせると去っていく。……嫌な『匂い』だと？

……考えてもわかるまい。

そういえば、あの男からもらった手紙があつたな。

俺はしまっていた手紙を取り出し封を切る。

『いつかまた会えることを心より信じております』

そこにはそうとだけ書かれていた。

他には何も無い。

どういう方法をとったのかは分からないが、筆跡も分からないよう

になっている。

……これは誰から送られてきたのなのだ？

同封されていたもう一枚の手紙。そこにはこう書かれていた。

『汝が心、闇の徒と化すれば、汝らが再会は叶わぬだろう。汝が業、如何なるも成さざれば、同じく汝らの再会は叶わぬ』

……俺の心が堕ちれば再会は出来ず、俺が何もしなければ再会は出来ない。

再会の相手は分からないが、つまりこれは試練のようなものなのだろうか。

——その答えを知るのは、だいぶ後のことであった。

それから伝令から報告がやってきた。それはディアーネの言った『匂い』と一致する。

マーズテリア神殿からの使節団がカルツシャ西方の地より訪れ、面会を申し込んできたのだ……。

07話 手紙（後書き）

赤髪に仮面をかぶった者。

> まあ、誰だか分かるでしょ？

その仮面の趣向は悪趣味にもエクリア・フェミリンズの被っていた物と同じだ

> ぐぐれ。画像検索しろ。

筆跡も分らないようになっている。

> ワープロとかで文字打って印刷したら分からないよね。

『汝が心、闇の徒と化すれば、汝らが再会は叶わぬだろう。汝が業、如何なるも成さざれば、同じく汝らの再会は叶わぬ』

> 厨二MAX……はいいとして、文法合ってるかな？誰か分かる人教えてー

今回からしばらく、更新を一週間おきに変えます。

早くすることはあっても、これ以上遅くはしません。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どうしても登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル・リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどし願います。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

08話 砂漠の街（前書き）

今話について

VERTICAの一章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

（ ） 「」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

08話 砂漠の街

立ち寄ったブレアードの遺跡で奇妙な魔物を倒した俺達は、次の目的地を目指して南下していた。

目指すはバラダと呼ばれる街。

一面の砂に覆いつくされた、マータ砂漠では数少ない人の住める場所だ。

砂漠の地平線上に石の建築物が見えてきた。

（バラダの街が見えてきたの）

砂漠のオアシスにハイシエラの声は心なしか弾んでいる。

「宿で寝れるぞ、嬉しいか？」

「……別に」

バラダに入ると、それまでの孤独な旅路が嘘であつたかのように人々が往来していた。

商隊とすれ違ったり、路上で店を開く人々がいたり、他の街と変わらぬぐらい賑わっている。

地理的に見ると、カルツシャとフレスラントに広がるマータ砂漠の

中心よりやや北に位置する。

所属はカルツシャ側だが、フレスラント領にもほど近い。

かつては要所の街として厳しい管理下にあったものの、両国間の関係が良好な近年では交易が発展し、

今では人口の半分くらいが何らかの商売に関わっているという。

俺は表通りから小汚い裏路地へと入り込んだ。

目立つ表通りを歩いていたら、

いつ俺を狙…は別にいいがエクリアを狙う連中と遭遇するかわかったものではない。

彼女が多くの場所で恨みを買って未だに暗殺などが絶えないのも事実なのだ。

エクリアは慣れていないから戸惑っている様子だったが、遅れまいと後を付いてきている。

俺は立ち止まって彼女の方を向いた。

「……？どうかしたか」

「外套の中から服がちらちら覗いている。街中だと余計目立つな」

（その服は姫將軍のものだからの、魔術の装飾やらがごっちゃりと付いておる）

「……他に着る服など持っていない」

「だから服をやろう。お前だってその格好では暑いだろう」

「そんなことは……ない」

（砂漠で倒れたのによく言うの）

「あ、あれは……たまたまだ！普段なら倒れるようなことなど無かった」

（意地を張るでない）

「意地では……」

「分かった、お前の言い分も認めよう。だが道端で言い争うと服よりも目立つ」

エクリアは驚いたのと同時に、恥じるように俯く。

——しかしその俺達のやり取りに気付き、近づいてきた者がいた。

「こんな道ばたで何やっているの？ここは女二人でうるちよろして安全な場所じゃないよ」

肌も露わな格好の女が話しかけてきた。

見た目の華やかさとは逆に、裏道の雰囲気に自然と溶け込んでいる。

「大丈夫だ、問題ない」

俺は腰に剣の体型をとっているハイシエラをちらりと見せた。

「剣士が生業なのね。もう一人は……お姫様？」

「……元、が付く。よく分かったな」

「ちょっと変わった発音とか、歩き方で分かっちゃうわよ」。

あ、でも大丈夫。このご時世だから、逃げてきた貴族様が結構いるの。そう珍しくないからね」

女は柔らかく笑った。

見た目からして娼婦か。堕ちた貴族の娘と言ったところだろう。

（我もそう思うだの）

「名前は？」

「リンユよ」

「リンユ、静かに過ごせる宿屋とかを教えてください」

「……良いわよ、教えてあげる。付いてきて」

案内されたのは一階が酒場、二階が宿屋となっている『砂猫亭』の一室だった。

「この宿はあたしが仕事で使っているの。主人とも馴染みだから、安心していいよ」

「助かる、ありがとう」

「いいのいいの、客を紹介したらお駄賃もらえるからね」

カモフラージュのために持っていた荷物を置き、最近伸ばし放題にしていた髪を後ろになびかせる。

そんな仕草をリンユがずっと見つめてきている。

「じー……」

「何だ？」

髪を再びポニーテールにまとめ、腰を下ろした俺に、リンユは体を寄せてきてさらに俺を観察する。

「ねえ……もしかして男の人なの？」

「ああ」

「ええーっ、ほんと！？すごい、肌きつれーい！」

リンユは俺の腕に触れてきたり、無警戒に接近して横から顔を覗き込んだりしてくる。

「……はぁ……ほんとに綺麗……女神様みたい」

（実際女神の体だからの）

ハイシェラの声が聞こえないリンユは、まだ俺の方を見続けてここにこしている。

「……あ、見とれちゃった。そういえば、まだ貴方達の名前を聞いてなかったよね」

「俺は零。こっちはアテナだ」

（む…？どこかで聞いたことがあるような気も…）

（地球）

（ぬ…おお、思い出した）

世界が『二つ回廊の終わり』になる前のネイ＝ステリナとイアス＝ステリナの内、

イアス＝ステリナに在った地球のギリシャの神話の女神で、オリュンポス十二神の石柱。

かつてネイ＝ステリナより地球に漂着し、人間の科学者たちの手によって機工女神にされた彼女は、

一度は地球で生活したはずである。その際に少しぐらい触れていてもおかしくない。

「零にアテナさんね。零はアテナさんの護衛か何か？

それとも駆け落ち？ 訳ありそうだから細かくは聞かないけど……」

「ノーコメントだ」

そうした談話を少し続けた後、リンユと分かれた。

部屋の入口で着替えが終わるのを待つ。

衣装は俺が創った。

これでも長い間生きてきたので、そう言ったセンスはかなりあると自負している。

とりあえず着やすい服をチョイス。

軽く着方を教え、とりあえず服が着れたら呼んでくれとっておいた。

「……着れたわよ」

ぼそっと、かろつじて聞き取れるほどの声が聞こえた。

部屋の扉を開け中に入る。

「似合ってるぞ」

服に着られていることもない。

「……」

それに対してどう思ったのか、ふんつと小さく鼻を鳴らして無言でそっぽを向かれる。

（これだけ似合っていれば化粧の必要はなさそうなの）

（ああ、素のまままで自然。完全に街娘に溶け込んでいるな。ただ…）

（その美貌だけは隠しきれんの）

まあ、暑さは解消できたし、王族であると思わせる格好でなくなったので良しとするか。

「さて、まだ日も高い。行くぞ」

必要ない荷物を部屋に置き、宿の主人に一泊分の代金を払ってから外へ出る。

「周りの視線が気になるなら言え。」

貴族に見えなくなったとはいえ、特に男の視線を引く格好であることは確かだからな」

「わかった」

宿を出てすぐの裏路地で街の若者から話を聞く。

「このところ商隊が魔物に襲われたって報告が増えてきている。

あの戦争が終わってからだ。……暗い時代が近づいてきているのかもしれない」

魔物の活性化か……。

戦争が終わったことは関係のは間違いない。

と、すれば他に原因があるだろう……。

どちらにしても、何かが起こる予兆であるのは間違いない……か。

少し歩いていると、頭上に『へたれ認定』と、無駄に精巧な魔術で烙印を押されている青年が話しかけてきた。

「あんた、知ってるかい？最近マータ砂漠で新たな迷宮が見つかったんだ。

日陰の遺跡ですら苦勞して言う俺みたいな奴でも、自由に探索できるくらいに楽勝な迷宮なんだぜ？

お宝もざつくざつくだし、自分が強くなったような気がするよ」

鏡をしてみる。

「アンタも言ってみるといいよ。場所は教えてやるからさ！」

結構だ。

そのまま路地を通り、酒場『砂猫亭』へと向かう。

情報の集まる場所といえば酒場だろう。

「よく来たな。今日は何のようだ？」

用と呼べるようなものは特にはないのだが……。

そう考えて宿の中を見渡すと、ふと壁面に貼り付けられた張り紙を見つけた。

（ふむ、どうやらこの宿はギルド（依頼請負所）にもなっているようだの）

まあ、別に金に困っているわけでもない。基本的には請負はしがないがな。

交易地としてそれなりに盛んになっているバラダだ。俺がやらずとも誰かがやるだろう。

酒場を出、街の広場を通っているとふと武器の看板が目についた。

中に入ってみるとラギールの店のようだ。

「いらっしやいませ……」

店に入ると、店員らしい少女が気弱そうな声で挨拶をしてきた。

「……ん？」

（どうしたのじゃ）

「いや……なんというか、すごく懐かしい気分になったとでもいうか。この少女に既視感を感じた」

(……そう言われると、そのような気もするが……気のせいではないかの)

「実際に会っていたとしてもおかしくはない。魂は廻る存在だから」

(なるほどの……)

「……」

少女は沈黙して茫洋とした瞳を此方に向けてくるだけだ。

「名前は？」

「エリザベッタです……初めまして」

改めて店の品をざっと見る。広くもない店内には、こんな辺境には不釣合な武具や道具が所狭しと陳列されている。

そこに儀礼剣などはなく、俺やエクリアが使っても文句がなさそうな逸品ばかりだ。流石はラギールの店、というところか。

武器などは正直言っ必要ないが、研究資材として治癒の水などは必要になってくるだろう。

「治癒の水、小瓶に分けるとしてどれくらいの在庫がある？」

「少々、お待ちください」

エリザベッタはそう言って店の奥へととてと走っていき、すぐに戻ってくる。

「大凡一万ほどかと……」

ふむ……ならば。

「千本分貰おう。ああ、荷物の場所は心配しなくてもいい」

千といったときに若干疑惑の表情を浮かべたのでそう言うておいた。

収納用の魔法があるからだ。

容量無限大自動整理機能付きの収納空間。

服の裾などの『自分の影』から接続し、明らかに入る大きさじゃないものもどこぞの青い猫型ロボットのようにしまい込める代物だ。

「では此方に」

エクリアをその場に待機させ、エリザベッタに促されながら奥へと進む。

ハイシエラはお目付けとしてエクリアに預けてある。

店の奥に入ってすぐの階段を下り、開かれた頑丈そうな扉をくぐり抜ける。

後ろ手に閉められる扉の音を聞きながらその場に立って待つ。

「あの……お客様……本日のお買い上げで特典用紙がたまりましたので……」

特典？そんなものは初めて聞いた。

「お礼を差し上げたいのです」

エリザベッタは辿々しいながらも、はつきりとした意思を込めた瞳で俺を見つめている。

「わかった」

「では……どうぞ、そこへ横になってください」

エリザベッタは恥ずかしそうに俺にまたがると、ゆっくりと自分の服を脱ぎ始めた。

……

……

……

行為が終わり、受け取った治癒の水を魔法瓶——温度が保てる例のあれではなく、同じ種類の液体を無限に入れておけるものだ——に詰め、影にしまう。

エリザベッタは処女だったらしい。

その発展中の体で俺を受け入れるのはかなりしんどかったはずだ。

それでも彼女は幸せそうにこう言った。

「私は……奴隷です……これから、いろいろなお得意様にご奉仕することになります……」。

でも、最初は大好きなお得意様にご奉仕したかった……だから、私は今、とても嬉しいんです」

好意の最中にそう言いながら微笑んだのだ。

「ありがとう……私……奴隷でも、頑張っていきていきます。ですから……」

「……また来る」

軽く頭を一撫でし、そう言いながら扉を抜ける。

「はい。待ってます……」

エリザベッタは微笑み、俺に礼をして見送った。

宿屋に戻り、一晚を明かして一階の酒場に降りる。

宿を出る直前、酒場の亭主が話しかけてきた。

「宝が欲しいなら南西に行け。そこに古くから掘られている岩塩坑があつて、旧坑にお宝が隠されているって噂だ。何でも千年近く昔この地に辿り着いた魔術師が掘らせたって話だ。何かあつても不思議じゃねえよな」

「何故俺にその話を？」

「いいんだよ、流れ者にはこんな話でもしとけば信じるだろ？」

こいつは気に入らねえ余所者に聞かせるとおきの話って奴だからな！」

出発前に情報を集めるか。情報は多いに越したことはない。

とりあえず裏路地へ向かおう。

裏路地に居た太めの男の大声が耳に入る。

「カルツシャが負けてから物騒になってしょうがないよ。盗みや喧嘩なんて日常茶飯事だ。こうなったもの姫將軍が魔物の国なんかに負けるからだ！俺の弟も帰ってこねえんだ……」

「……」

同じく話が聞こえたのだろうエクリアは顔を塞ぎ黙りこくった。

そうして、しばらく街を歩き回っていたが何処もかしこも同じような話ばかりだった。

正直言つて余り気分のいい話ではない。

ラギールの店へと寄って、話を聞いてみた。

なんでも砂漠を南に行ったフレスラント王国のリオーネ姫が、荒廃

と砂漠化を何とかしようと奮戦しているとのことだ。

「あまりの忙しさに荷の関しが緩くて……お陰で稼がせてもらっています……」

それはどうなんだろう……。

街の入口近くを通りかかった時、地面に大きく黒い影が落ちた。

人々のざわめきが広がっていく。

人々は天を指差しながらその影を目で追っている。

俺たちも何事かと空を見上げながら、街の外へと踏み出した。

——平べったい体をした生物らしいものが上空を泳ぐように飛んでいる。尻尾は固い鞭のようにになっているのが分かる。

「あれは、いつたい……」

エクリアが困惑したような声を上げる。

（エイのようじゃな。ずいぶん大きいのもう、魔獣の類か）

異様に長い尻に左右合計八枚の羽を等間隔につけている巨大な空飛ぶ鬼糸巻エイという印象を受けた。

その表皮は海中で暮らしていないことを明確に示す無骨なものだ。

エイはかなり上空を飛んでいるようで、降りてくる気配はない。こ

の界限に巣があるのかもしれない。

（ふむ……どうやら酒場の親父が言って追った『岩塩坑』とやらと同じ方角に向かっておるようだの）

「……エクリア、どうかしたのか？」

「いえ、ただ……微かにブレアードの魔力を感じただけ……」

俺がブレアードの魔力を知らない以上、ブレアードを探知することに置いてはこいつを信用する他無い。

（あの魔獣もブレアードの手のものか）

ハイシエラもそうらしい。

「少なくとも、俺たちに気づいている様子はなかったがな」

さて、どうしたものか。

岩塩坑には巨大エイがいる可能性があるが行って損はしないかもしれない。

「（ハイシエラはどう思う）」

（そうじゃな、エクリア嬢ちゃんを危険に晒すかもしれぬが、呪いについて手がかりがあるかもしれぬの。

まあ、酒場の親父の言葉を借りれば、『余所者に聞かせる取っておき』なのであろう？

既に開拓されつくしている可能性も否定はできんがな

ふむ、まあエクリアは俺が守ればいいとして……やらぬ後悔よりやる後悔ともいうしな。行くことにしよう。

宝は眉唾かもしれないにせよ、古くからこの地方にある場所なら、フェミリンスの呪いについて何か知ることが出来るかもな。

08話 砂漠の街（後書き）

エリザベッタはZEROの謎の少女の転生体……という扱い。
セリカを見た瞬間、なんかビビビツときた、的な設定。

リニュ

> 零セリカは性魔術を必要としないためそこまで深い関係にならなかった。

へたれ認定

> この烙印が押される迷宮はあることにした。何をどうしても消滅することのない不思議な迷宮。昔々のそのまた昔、どっかの神様がお遊びで作った、というどうでもいい設定にした。

魔法瓶

> ダiamond製の小瓶。同じ液体なら幾らでも入れられる。液体の誤差は自動修正される。当然だが中に入れたものの量が増えたり減ったりはしない。というどうでもいい設定。

大凡一万

> 回復系は必需品なので樽等で用意してるんじゃないかなと勝手に予想。

千本分貰おう

> 使うことは無いだろうが念のために備えておく人なのです。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。
作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれ

ば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どうしても登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文書のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどし願います。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

09話 深凌の楔魔序列第八位魔神ゼフィラ（前書き）

今話について

VERTICAの一章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

（ ） 「」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

09話 深凌の楔魔序列第八位魔神ゼフィラ

どうやらここが自然物をくり貫いた粛鎖の岩塩坑と呼ばれる遺跡の入り口のようなのだ。

さて、奥へ行くとするか。

しばらく進むと、道が崩れ、下の道と重なっているところに辿り着いた。

飛び降りようと思えば行ける距離だが……やめておこう。エクリアもいるしな。

そのまま奥へ進み梯子を降りる。

「この迷宮は……やはり……」

（うむ。どうやら、ここもブレアードとやらの息がかかった場所のようなのだ。先日の遺跡とよく似た作りをしておるわ）

その昔、姫神フェミリンスの力を欲した闇の魔術師ブレアードが三度の侵攻を重ね、打ち倒し、呪いを掛けるに至ったフェミリンス戦争。

その二度目の侵攻において創設した広大な地下迷宮、ブレアード迷宮はレスペレント地方全土にわたる。

あまりにも膨大で、結局奪うことのできなわなかったフェミリンスの力。

だが、それを下すことが出来る……その時点で、下級神に匹敵するほどの使い手であることは間違いない。

（ここで考えたところで埒が明かぬ。さっさと調べてみるか）

「……ええ」

真っ直ぐ、迷うことなく奥へと進める正しい道を進む。

地下三階に降りた所で、何者家の強い視線を感じた。

「——何者だっ!？」

それはエクリアも同じようで武器を構えて周囲の様子を窺う。

だが、どこからも反応は帰ってこない。

ある意味当然のことであるが。

「お前も感じたか」

「ああ、誰かに見られている気がした……」

俺の感覚では何者かの視線はエクリアのみへ向かっていると感じた。

エクリアのみを付け狙っているものがあるとなれば、おそらく、

「ブレアードの手の者だろう」

「何故そう思う？」

「視線の先がエクリアだったからだ」

（なるほどの）

その後もサクサクと進み地下五階にあたる巨大な砂の滝のある場所へとやってきた。

大凡百メートルはあるつかという左右の滝の目の真ん中に掛かる吊り橋を渡る。

俺たちの左右では砂が滝のように流れこみ、下では滝壺のごとく渦を巻いている。

規則的に流動し、均一に流れ落ちていくその様は、正に自然の美と称するに値するものだ。

精霊の力を感じることから、この砂は循環している事がわかる。

またこの滝周辺は龍脈になっているようだ。

その左右の滝の間にあるのは、滝の両端の足場。

鍾乳石の様な形状の物や、氷柱が落ちて突き刺さった様な形の物。一般的にキノコ岩と言われる形状のものなど、とにかく巨大で細長い岩。

そしてその中央にある特別に大きい岩と繋がった二つの吊り橋だけだ。

「行こう。気配が強くなってきた」

足場が狭く細い橋を渡っていく。俺は目を瞑ったとしても行けるが、エクリアが危なっかしい。

一歩一歩慎重に、若干荒く呼吸をしながら渡っているその様から、彼女の心中を伺える。

その時、滝の中に感じていた巨大な気配が此方へ動いてくる。

（来るぞっ！！）

滝から飛来してくる影——大きい！

とつさに振り返り、エクリアを腕に抱えて跳んで避けると、非常に長い物体が俺達の体のあった空間を橋に並行するように横薙ぎにした。

同時に、ただでさえ脆くなっていただろう橋が長い物体に引き摺られるようにして千切れていく。

「えっ？」

いきなりセリカにお姫様抱っこされて顔を白黒させながら状況把握をしようとするエクリア。

「はアッ！」

そんな彼女を他所に、下にあった足がかりが失くなり落ちてしまい

そうになったため、空中を蹴って虚空瞬動し、橋のあった先へと渡り切るセリカ。

「キヤアっ!？」

それは、人間ジェットコースターへの絶叫か、セリカにお姫様抱っこされている事実に気がついた羞恥か。

「い、いきなり何するのよ!」

「あれを見る」

エクリア一瞬にして冷静さを取り戻し、戦闘態勢へと変わり、俺の腕から降りた。

「あれはなんだ」

エクリアが質問してくる。

滝の中から、体の一部を出し、此方を窺うように中でしなる長いもの。その形の特徴。一部しか見えないためにはつきりとは言えないが、

「恐らく、バラダの街で見た巨大エイの尾だ」

（我もそう思うの、やはり此处を巣にしておったか）

バラダでは空を飛んでいたために見えなかったその尾の上部はエメラルドのような半透明の鱗に覆われている。

その尾が俺たちに振り下ろされる……が、

「相手が悪かったな」

先端にはある、禍々しさを感じさせる、毒付きであろう巨大な針を指先でつまむようにして受け止める。

そもそも俺に毒は効かないので、触るだけでアウトな毒であろうと平気だ。

「少し眠ってろ」

言った瞬間、隕石の直撃にでもあったかのように尻尾がしなり滝の中へ消えていく。

「くっ……！？」

——甲高い金属音に振り返ると、エクリアが胸元に迫った触手のようなものを接続剣で弾き返していた。

彼女を狙った触手は砂の巻かれた床から伸び、弾かれて影の中に素早く引いていく。

「ハッ！」

エクリアが剣を振るって触手を狙う。だが剣は地面に弾かれた。

次の瞬間、再び砂から飛び出したのは数十本の触手。それがエクリアを包むように広がって——空振った。

もう既にそこにエクリアは居ない。

エクリアは再び俺の腕の中だ。

「大丈夫か、エクリア」

大丈夫なのは一目瞭然なのだが、一応訪ねておく。

「あ、ああ。セリカのお陰でな。感謝する」

戦闘中であるために冷静さは失わず、それでいて少し頬を染めながらエクリアは礼を言った。

「チイツ……捉え損なったか。まあいい」

砂の中からじみ出るように現れたのは長身の女魔族だ。

「人間」

「なんだ」

いや、此の場に人間という種族は居ないのだが、勝手に勘違いしてるのを指摘するつもりはない。

明らかに、俺に対していった言葉だったので返事を返す。

「フェミリンスの本筋を継ぐものを引き渡せ。さすればお前は見逃してやるっ」

「エクリアをどうするつもりだ」

「決まっている——姫神フェミリンスに封じられて幾星霜……その恨みを晴らすまでだ！」

こいつはもしかすると本当に馬鹿なのかもしれない。

恨む相手が筋違いな上に、事実関係を一切把握していないとは……無様だな。

「俺がそれをさせるとでも？」

「人間風情が私と戦うつもりか！」

体から激しい闘志が膨れ上がっていく。

俺は慌てずエクリアを降ろし構えをとった。いや、正確に言うならば構えないという構えをとった。

「ふん……鈍感なのか、ただの死にたがりか。平然としていられるのは今だけだ。——深凌の楔魔が一柱の脅威……身を持って知れ！」

「脅威？どこが」

口上が終わると同時にゼフィラはその体を地に伏せた。いや、地に伏せられた。

「ぐっ、があっ!？」

肺の中の空気が矯正排出され、苦しそうに声を上げるゼフィラ。

「一応聞いておくが、エクリアを諦める気は？」

「ない！フェミリスへの復讐は、必ず果たしてみせるぞ！」

「……そうか」

地に這いつくばったゼフィラの瞳を、上から射抜くようにして軽く睨んだ。

辺りは真っ暗な空間に変わる。

そこに存在しているのは、セリカとゼフィラの両名のみ。

「貴様、何をする！？」

「単純なことだ、貴様を精神戦で屈服させる」

「馬鹿な、私は魔神だぞ！？力で勝ったからといって、精神力で勝てるつもりか！？」

「試せば分かるだろう」

パチン……とセリカが指を鳴らすと共に彼女の格好が変わる。

手足を四方に引っ張るようにして拘束する鎖。

彼女の周囲には古今東西、往古来今ありとあらゆる拷問道具が出現し、

小道具に分類される様々な性具や、その成分が何なのかすら分から

ない瓶入りの薬品が大量に浮遊する。

「ヒッ!？」

鎖だけなら良かっただろう。拷問道具だけなら良かっただろう。小道具だけなら良かっただろう。

しかし、この光景は魔神であるゼフィラが情けない声を上げ、恐怖にガタガタと身を震わせるほどのものであった。

「さて……貴様は何分持つかな？」

ただ無表情に鞭をしながら、迫ってくる様は、ゼフィラの目に絶望として映った。

………

………

………

「一生お仕えます、セリカ様！」

「は？」

「フェミリンスのもすまなかった。真の憎むべき対象は別にあったことを気付かされた」

「は？」

エクリアは思わず声を上げた。それも二度。

つい、一秒前まで戦い、明らかな強い憎しみの籠った目で敵対視されていた筈の相手の台詞に、開いた口がふさがらない。

セリカが行ったことは幻術空間における性拷問である。

ゼフィラは仮にも魔神であり、フェミリンス戦争で魔神ブレアードに召喚された程の実力者である。

壊してしまうのも性奴に堕とすのも、勿体無いと思ったセリカは、従順教育をラインを見極めながら行った。

幻術空間でかかった時間は約180時間。睡眠食事の一切を必要としない幻術空間であるため、寝ず食わずのぶっ通しの行為だった。

その行為を行いながらセリカは己が知るフェミリンス戦争の真相を話す。

確かに並々ならぬ魔のものに対する忌避を持つ姫神だが、そもそもあの戦争の原因は魔術師。

ゼフィラは二度目の侵攻で封じられたから知らなかっただろうが、三度目に勝利した後、結局姫神の力を奪えないことに対する魔術師の逆切れで、残った魔神の大半は姫神と共に封印された。

そして、そもそも使い捨ての駒のように深凌の楔魔を扱ったのは魔術師。

だから、姫神に封じられたのは確かだが、その原因は殆どが魔術師

に起因する。

——と、言ってみたところ憎悪の向かう先のすり替えに成功した。

つまるところ今のゼフィラは、セリカに忠誠心を持ち、フェミリンスではなくブレアードを憎んでいる——ということだ。

「さて、帰るか」

（そうなの）

「え、ええ」

「はいっ」

飛翔の魔法を唱え、遺跡の入り口へ。

そのまま俺を先頭に、バラダの街へと戻っていった。

09話 深凌の楔魔序列第八位魔神ゼフィラ（後書き）

スウーティーログアウトのお知らせ。ゼフィラログインのお知らせ。という訳でスウーティのポジションにゼフィラを投入。

ゼフィラは淫魔から魔神に昇華した存在とします。でないと、幾ら魔神でも、あんな格好しないし触手召喚もできないって（笑）。

ちなみにそのあんな格好はさすがに替えます。

春蘭（恋姫）さんをキャラの参考としました。なんかイメージが近かったから。

真っ直ぐ、迷うことなく奥へと進める正しい道を進む。

> HUNTER X HUNTERで言うところの円を使って建物の構造を読み取って……みたいな。

またこの滝周辺は龍脈になっているようだ。

> いくらファンタジーでもこんな超旧自然遺産がホイホイあったたまるか！……という理念のもと理由付けをした。龍脈とかならまだ分かる。

空中を蹴って虚空瞬動し、橋のあった先へと渡り切るセリカ。

> ネギま！を見てくれ。スマブラの空中ジャンプもイメージ近いかも。

隕石の直撃にでもあったかのように尻尾がしなり滝の中へ消えていく。

> よくわかんない衝撃が摘んでいた指先に発生して、ふっ飛ばしたって感じ。……分かった？

ただ無表情に鞭をしならせて、迫ってくる様

> 零セリ力は別にSではありません。ドSでもドドSでもありません。慣れているだけです。ちなみにMでもありません。

幻想空間における性拷問

> 考えるな！感じる！…… まあ想像に任せる。

幻術空間

> イタチの万華鏡写輪眼とかのイメージ。ただし一秒∞。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どのつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば

は感想の悪い点にお願いします。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はごしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

10話 光と闇（前書き）

今話について

VERITAの二章、リウイサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

10話 光と闇

——メンフィル王国、王都ミルスの郊外には王族が葬られている墓所がある。

その一角でメンフィル王リウイと西方より訪れたマーステリア神殿の使節団による儀式が行われていた。

一同が厳かに黙祷を捧げている中、リウイは聖衣をまとった女性を墓石の前へと導いてから、前を譲る。

彼女は静かにかがみ込んで墓石に向かい合った。

「メンフィル国王陛下が后イリーナ王妃殿下に、マーステリアが僕ルナックリアが謹みまして禱りを捧げる。御身の魂よ、安らかに眠り給え。貴女の崇高な魂は不滅にして、聖なる守護霊としてメンフィルを永久に見守り給わん」

真実を知っている身としては、腹が痛い事この上ない。

まあ、見るものが見なければ分からないほどのポーカーフェイスをしているのだろうか。

朗々と告げたマーステリアの聖女は、手に捧げていた花束を墓石の前に置いた。

その様子はマーステリア神殿を普段快く思っていない者から見ても、最大の敬意が払われていることが察せられただろう。

儀式を終えた彼らは王城に戻ると早速、聖女との会談を始めた。

彼女達はマーズテリア神殿からの正使として訪れたのだ。

「我が妻イリーナへの丁寧な弔辞、改めて御礼申し上げます」

「礼には及びません。立場が違えど、故人を惜しみ、安息を願う気持ちと同じです」

笑わせる話だな。

そもそも屋敷に迷い込んでいなかったとしても、冥き途へは行かなかったはずだろうに。

まあ、そのあたりの知識は、よほどの王道的魔術研究をする魔神か、ナベリウスなどの魂関係を取り扱うものでなければ分かるはずもないか。

「陛下は死者に敬意をもって接していると聞いております。ましてや不死者のようなおぞましい魔を率いてはいらっしゃらない」

「無論だ。マーズテリア神殿や西方は我が国に対して、何か勘違いしているな」

「あなたが否定はできません。このところレスペレント地方では戦乱が続き、不安定な情勢に諸国も気を揉んでおります」

「それに、また新しい動きがあると伺っています。マータ砂漠に正体の知れぬ魔神らが現れた、と」

「統治者としては頭が痛い話だ」

「カルツシャのエクリア王女殿下が絡んでいるそうですね」

「そのようだな。フェミリンスという重しが無くなって、動き出したのだろう」

「争いが争いを呼ぶ……不幸なことです。その上、魔神のことが広く知らればカルツシャの民は動揺することでしょう。ただでさえカルツシャの将来のことでも不安を抱えておりますのに」

カルツシャの地位決定への横槍か。

「美辞麗句のやり取りは止めて本題に入ろう。聖女殿は大変多忙と聞いている」

「ありがとうございます。二人だけで会談させていただく大変貴重な機会は有意に使いたいですね」

「カルツシャとの戦いで衝撃を受けた私達は、今後の陛下のご決断を注視しております」

「というと？」

「もしメンフィルがカルツシャ領全域を直轄領とされた場合、民草の心境をご想像してみてください。カルツシャを走る大陸行路は民の生命線。交易に支障があつては民も落ち着いてはいられません」

説明しよう。

——大陸公路はこのレスペレント地方と各地を結ぶ主要な街道だ。

カルツシャ領西部を南北に走る大陸公路は商隊が往来し、カルツシャ王国に莫大な交易料をもたらしている。

つまり、もしメンフィルが街道の支配権を押さえれば大きな収入源を手にするだけでなく、諸国の生命線を握ることになる。

「望みは何だ。メンフィルが街道の管理権を手にしなければ満足か」

「街道を含む西カルツシャ領全域を私達にお任せいただけませんか」

「なんだと……」

西カルツシャは街道が通るより他に、これといった要所はない。

デメリット言えるデメリットは西方諸国や神殿の軍駐屯を認めることとなるといつことが。

「聖女よ。貴女が神殿や諸国の意見を代弁しているにしか過ぎないことも理解しているが、俺は憤りを感じている。一方的に我が国に負担を望むのは、いさか不合理ではないか」

「短期的に見れば御国にとって良い点はないでしょう」

聖女は表情も変えずに言い切った。

「しかし長期的にご覧いただければ、御国が西方諸国や神殿と争わぬというお心を示されることで、共に長き平和を享受できます」

「もし支配権を譲ったとしたら、マーズテリア神殿が面倒を見るのか」

「いえ、西カルツシャに近いセーナル神殿領、及びバリハルト神殿領から代官が向かうことになります」

ルナークリアの断定的な口調からも、すでに神殿や諸国の間では調整が付いているのだろう。

「陛下、どうぞ民のためにご決断下さい」

——整理しよう。

問。西カルツシャの支配権を手放して、街道における交易の自由化を認めるかどうか選択せよ。

参考、メリットとデメリット。

認めれば、領土と収入源を失う。神殿や西方の安心や信頼という曖昧なものを得る。実利はあるといえばある。

拒否すれば、西カルツシャを支配して交易による収入を確保できる上、神殿税の伸長を防げる。しかし西方諸国や神殿の心証を損ねる可能性がある。

「……諸国と神殿の意志は承った。重臣らとの会議に掛けなければならぬが、可能な限り尊重することを約束しよう」

ほう……そうきたか。なるほどな。

実のところ、正しい選択だといえる。

恐らく彼自身は気づいてない、認めた場合の実利についてだが、余裕ができるということだ。

メンフィルは帝国だ。即ち、多民族、多種族、多宗教の国ということ。

そして、比較的ここ最近急激に発展した新興国家だということと、戦争が終わって一年しか経っていないということ。

それ故に、片付けるべき問題は腐るほど溜まっているはずだ。

その多くの問題の一つが片付くという得があるだろう。

確かに領土と収入源は痛い損失だが、差し引きで考えると一概に損とは言えない。

「ありがとうございます。陛下のご決定は各国にとって平和の礎となりましょう」

「俺たちの望みは人と魔の共存だ。無益な争いは臨んでいないと神殿や諸国に伝えてくれ」

「陛下のお言葉とご意志、確かに承りました」

聖女が深々と頭を垂れてシャイを表したことに、鷹揚に頷く。

「話は変わりますがけれども、『モナルカの滝』で陛下と拝見が相容れぬ者達が集まっていると伺いました」

聖女の言うように、そこは今のメンフィルが抱えている問題の一つだ。

「どうかそのものたちに寛大なご配慮を賜りますよう……特に、天使モナルカを害した場合の同様は、御国だけに留まりません。天使モナルカはカルツシャ王家との盟約により縛られております。……こちらを」

ルナ・クリアが鞘に収められ、ゴシックな装飾を持つ一振りの短剣を机の上に差し出した。

「これは？」

「モナルカがカルツシャの王家と盟約の証に取り交わしたものです。これをモナルカに返せば盟約を終了し、かの地を去ります。さすればモナルカを頼りに戦う者達も、これ以上の争いは無益と悟って剣を置きましょう」

「その話が事実だとして、どうしてその剣をあなたが持っている？」

「……元々はカルツシャ王家より、とある神殿がお預かりしておりました。しかし現在の状況を鑑み、陛下がお持ちになるのが宜しかと。陛下のご意思を確認した上で、私が代表してお渡しすることになっておりました」

「それが西側の意思か……分かった、預かっておこう」

リウイは会談の終了を手で示した。ルナ・クリアは優雅に一礼をすると席を立ち、部屋の外へと向かう。

「陛下。後ほど聖騎士シルフィア・ルーハンスに会うつもりです」

「知っている。我が国はすでにシルフィアのことを受け入れた」

「このたびの訪問はその件ではありません。時を改めて私が派遣されるでしょう。……私人としての発言ですが……このこと、申し訳なく存じます」

静かに扉を閉めクリアはその場を離れていった。

一人残された残されたりウイは、思いつめた表情をしながらグラスに注がれていたワインを一口に飲み干した。

本体との交信中、隔離系結界を感知して飛んできた。

この世界にこれほどの大規模かつ高度な結界を張れる術者はまず人間ではない。

それが張られたのがメンフィルであるとなると、まず間違いなく深凌の楔魔が関わっているだろう。

世界は灰色に染まり、道を往来していた民の動きが一切止まっている。

「——先日、フェミリス神殿では失礼いたしました」

「『深凌の楔魔』だったな。良くも大胆に現れたものだ……」

「いえいえ、陛下のみならず勇猛な将、さらにマーズテリアの聖女まで揃っている場所へのこのこ現れませんよ」

かなり最初の場面から鉢合わせれたようだ。

時間隔離型の結界はへの侵入は、光速での感知、侵入という流れが必要になる。

中でいくら時間が立っていようが、実際は限りなく零秒に近い時間しか経っていないのだから。

それに唯一対応できるのが光速である。

詳しい説明は省くが、光速移動をすれば自分以外の時間が止まる。

だから、結界が発動した刹那光速で対応すれば、結界が解かれる前に侵入することもできるというわけだ。

「用件は何だ」

「先日は慌ただしにご挨拶になってしまったので、改めてご挨拶に参りました。どうかご警戒を解いてください。決して陛下にとつて損になる話ではございませんから」

緑の髪の二つ角のついた男……ゼフィラから聞いた特徴からすればパイモンだろう。

深凌の楔魔の中で最も知識のある者だ、というゼフィラの言ったとおりらしい。

神や超次元的存在などを含めたとしてもこの世界のトップ百に入る智を持っている。

ほんの少し透明がかった姿をしている、幻影だな。

「さすがは闇の王に相応しい将器を持つお方です。陛下のような方がレスペレントを統一されたこと、私達も喜ばしく思うところです」

「よく言う…… お前たちはその統一を乱すために蠢いているようではないか」

「いえいえ、それは誤解というもの。私達は陛下の版図を侵すより、陛下の覇業のお手伝いができればと考えております。確かに、一時的にはお邪魔をしているように見えるかもしれませんが、……」
「陛下が私達との関係を悪化させたいとお望みでないなら、寛大な御心こそ良い結果を生むでしょう。無論、光側の勢力は私達を悪く言うでしょうが……。フェミリンスの末裔にして『深凌の楔魔』の末裔でもある陛下なら、正しいご判断をくだされると存じます」

深凌の楔魔の末裔？

「お前は俺の父…… 魔神グラザを知っているな？」

ああ、そういうことか。

「はい、序列では四位で私より上位の、大変勇猛な方でした。今でもフェミリンス相手に奮戦しておられた姿が目には焼き付いています。それと、今は貴方の僕となっている魔神ディアーネもかつては仲間でした。懐かしいですね。残念ながら私は、彼女からなかなか認め

て頂けませんでした……。これでも勇猛さでは引けを取らぬつもりですよ。この場で試すほど無謀ではありませんがね。……ではそろそろ私はおいとまさせていただきます。その前に一つだけご助言を。『海雪の間』で暴れている悪魔族の件には直接関わりませぬよう。陛下自ら動かれては、闇の者共にも動揺が走るといふものです」

パイモンは意味深に微笑んだ。そこは最近メンフィルが抱えている問題でモナルカの滝に並ぶ。

「忠告痛み入る。だが俺には不要だ」

「いずれまたお目通りが叶う機会もあれば、その時にはぜひ陛下のお役に立ちたいものです」

「……」

「ああ、それから……遅ればせながら、奥様についてお悔やみ申し上げます。私も皆さんの習慣に倣い、墓参りをさせていただきました」

「そうか……妻も喜んでいるだろう」

「ではこれで失礼します。そうそう、エヴリーヌもお会いしたがつていましたよ……」

パイモンは優雅に一礼をすると、その姿は地面の影の中に入り込むように消失した。

それが合図となり、世界の薄闇が消え去った。

周囲で止まっていた人々の一切が動き始め、地面にあった鳥の影もどこかへ遠のいていく。

これ以上、長居する必要はないな。

俺はその場を離れ、本体との交信を再び始めた。

10話 光と闇（後書き）

原文をトレースしてかなり無理やり地の文を第三者視点セリカに。色々突っ込みどころ多いと思うので突っ込んでください。作者の手腕で可能な限り修正します。

特に説明なし。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、いつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル・リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば

は感想の悪い点にお願いします。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はごしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

11話 魔霊の海峡（前書き）

今話について

VERTICAの二章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

11話 魔霊の海峡

砂漠の夜は冷える。バラダの街も例外ではなく、肌寒ささえ感じるほどだ。

「星が綺麗だな」

ゼフィラが呟く。窓から見える砂漠の海原にはさえぎるものもなく、地平線ぎりぎりまで星空が広がっている。

「この辺りは雨も少ない。砂嵐が落ち着いていれば、星の光もよく通ってくるんだろう」

ゼフィラは俺と契約したことで魔の者特有の気質が減り、こういった感情を示すようになった。

いいことだと思う。

ここらあたりの魔物を活性化させていた二大要因である、巨大エイとゼフィラを片したことで砂漠の魔者も鳴りを潜め、商人たちも頻繁に訪れるようになってきた。

それだけならばいいことなのだが、俺達にとっては些か都合が悪い。人の動きが活発になるということは、そのまま俺たちが見つかり易くなることにつながる。

認識阻害やら肉体変化などを使えばどうとでもなる問題だが、そろそろここにも飽きてきた。

（さて、バラダから何処に向かうのが良いかの）

あてのある旅ではないが、エクリアのことを考えればレスペレントからは離れるべきだろう。

特に東はメンフィル国とその友邦が支配しているので避けたい。

（嬢ちゃんには過酷な旅になるからの、砂漠とはまた違う意味で）

マータ砂漠を東に行った先には港町であるサンターフがあるのだが、エクリアが居る以上難しいだろう。

かといって西に行くわけにも行かない。

西方諸国は光の現神を奉る神殿の影響力が強い。噂ではメンフィルを警戒し、東から来るものは誰であれ厳しく取り調べているという。

俺も現神から追われる身であり、使徒であるゼフィラも魔性が落ち着いたとはいえ魔神だ。

さつきもいったが術を使って解決する方法もあるが、出来れば使わないほうが楽だ。

認識阻害など人の意識を弄る術はあまり好きではないし、肉体変化系は自分の体を動かしている気がしなくなる。

そうなると残っている方向は北か南か。

北の北方諸国にはペルークメイルというルーン＝エルフの国があり、

その他も亜人族が多いようだ。

南へ下った先にはケレース・アヴァタール・セアール・ニース・レルンなどの地方があり、

さらに南下していくとディジェネール・セテトリなどの地方へたどり着く。

（南であろう。ケレース地方は我が一時は支配したことがあるゆえ、土地勘もあるぞ）

ケレース地方は人より魔が強く魔神級の連中が跋扈している危険がある。

北方諸国が秩序で成り立ち平和な文化を形成しているのに対し、こちらは混沌としており国と呼べる国は片手で数えるほどしか無い。

水の巫女やリタ、ナベリウスあたりに会いに行ってもいいかもしれない。

南へ行くことにするか。

どちらにしても海の上を通ることになるのは確定だろう。

最も簡単であるサンターフの港経由は無理だ。ケテ海峡を何らかの形で渡るしか無いか。

海峡は狭い。おそらく渡し舟などもあるだろう。なくても船くらいなら出せる。

決まりだな。

「エクリア、ゼフィラ。明日の明朝ここを発つ。行く先はケテ海峡だ」

ついさっきから隣室の入り口に立っていたエクリアと椅子に座っていたゼフィラにそう言った。

「わかった。……じゃあもう私は休むわね」

「私も寝るとしよう」

二人はそれぞれのベッドに入った。

二人が眠ったのを確認し俺は夜の街へ出る。

旅立つ前に挨拶をしておきたい。

「いらっしやいませ……」

俺はラギールの店にやってきた。

「エリザベッタ」

「はい……なんでしょう」

「いや、お前には挨拶をしておきたくてな。明日明朝ここを発つ。ケテ海峡を経由してとりあえずケレースの方へ向かう予定だ」

「……そう、ですか」

「また会えるさ。そう残念そうにするな」

彼女の頭を撫でながらそう言う。

「じゃあな、また会おう」

「ありがとうございました……」

その声を背中に受け、俺は向け店を出た。

明朝。日も登ろうかという時間になった。

これから目指すは南にあるケテ海峡。海峡を超えればそこからはケレス地方だ。

「行くぞ、荷物は持ったか？」

「ええ」

「ああ」

最初にエクリア、次にゼフィラが返事を返した。

「水はちゃんと持ったなエクリア。また倒れられても困るぞ？」

ゼフィラは魔神なので多少の水不足は平気だろうから放置。

エクリアは前科があるからな。

「持ったわよ」

多少の怒気を孕ませながらそう言い返してくるエクリア。

「そうか、ならいい」

俺たちは、街を背にして歩き出した。

殺風景であつた砂漠にところどころ岩が目立ってきた。砂まみれの旅も終わりが近い。

海に近付いたことで、風もかすかに湿り気を帯びている。

地図と俺の距離感覚と方向感覚が正しければこの先にケテ海峡がある。

後は渡し舟を探すのみだ。

「エクリア」

俺の呼びかけに反応するエクリア。

「ここを超えれば、もう二度とレスペレントには戻れないかもしれない。忘れ物があっても容易には戻ってこれない」

エクリアは言われて始めて気付いたように、歩いてきた道を振り返

る。

「俺と共に来るといふのは、そういうことだ。それでもまだついてくるか？」

「……この地は辛いことが多すぎたから。もう、いいわ……」

「それならいい」

本格的に岩砂漠へと突入し湿度も高くなってきた頃、エクリアが呟いた。

「この暑さ……日差も痛いほどね……」

それに追従して俺達も各々の意見を出す。

「そうだな。元からきつかった日差と気温に湿度が加わってきたからなおさらだ。お前にはきついかもしれん。それに、砂嵐もきつい。夜まで待つというのもひとつの選択肢だ」

「だが、それは他のものにも同じ。昼のほづが身の程をわきまえぬ愚か者は少ない」

（それにこの地は、昼の砂塵は見えての通り、夜は霧に包まれると聞く。どちらにしても道は慎重に選ばねばならん）

疲労を承知の上で砂塵の中を進むか、魔物が多く徘徊する夜の霧の中を進むべきか……。

「夜だな」（夜だの）「夜だ」「夜ね」

満場一致だった。

近くの岩を繰り抜くように切り取って洞窟を作り（当然セリ力がやった）、影の倉庫からトランプやUNOなどを取り出して、夜まで時間をつぶす。

（ああ、参加したい……）

「>それ、それを抜いて！<」

「>馬鹿者め、魔神たる我がそんな手に引つかかるはずが……<」

「やったー！」「なん……だと……？」

シャシャシャシャシャシャ↑先が上がったセリ力があの大量のUNOを一気超高速シャッフルしてる音

閑話休題。

夜になって出発ししばらく歩いたところである場所を発見した。

「こんなところに水があるなんて……」

（砂漠のオアシスカ。体を休めるには都合が良さそうなの）

「一応水を汲んで行こう。ただし、人の集まった気配はすぐそこだ。そこで体を休めよう」

（ならばついでに、柄の隙間に挟まった砂をどうにかしてくれい）

「どうせすぐ汚れる。面倒だ。水に濡らしたら余計に砂が付き易くなる」

（やれやれ、常に美しくありたいという純真無垢な乙女心の分からぬやつだの……）

「……純真無垢な乙女？」

そこはスルーしたろうぜエクリア。

水を組み終わり、歩き出す。

恐らく里があるだろう場所に通りがかったところで、後ろから獣人が一人俺たちを追い越していった。

「どうやらここで確定のようだな」

とりあえず、渡し舟の情報があるか聞きに行ってみるか。

俺はさっきの獣人が行った道を追いかけていった。

前方から近づく足音を感じて俺たちは歩みを止めた。

「あんたら旅人かい？ここらで見かけるのは珍しいね」

のんびりした足取りで近づき、友好的な態度で話しかけてきたのは獣人だ。

「南に行く渡し舟を探している」

「マーステリアのдар、だったらもつと向こうに行かないとなあ」

獣人は手振りでも西側を示す。

「こっちは俺達の小さな村があるくらいだよ。俺たちの船に乗りたければ寄ってみてもいいけどな」

「こんなところに村があるのね……」

「ここは辺鄙なところだから、アンタみたいなべっぴんさんには似合わないね」

「じゃあ俺は用があるんで行くよ。ここは『霞の海峡』だ。霧と霞、それに魔霊に惑わされないよう気をつけてな」

獣人は立ち去った。『霞の海峡』とも言づらい、このケテ海峡は獣人の村を目指して進んでいくと、そこは粗末な家屋が数軒あるだけの場所だった。

俺たちに気付いた一人の獣人が警戒気味に近寄ってくる。

「……あなたたちは？」

「旅の者だ。渡し舟を探している」

「乗りたいのなら相応の代金をいただく決まりよ」

「でも恐らく船は出せないわ。出そうとする船乗りがいないから」

「どういうことだ？」

「最近、海峡に奇妙な霧が出るの。海峡はいつも霞がかかっているから『霞の海峡』なんて呼ばれているけど……このところは異常よ。何でも魔料が湧いているって。船を出しても戻って来られないから、誰も船を出さないわよ」

魔霊か。

「では、それを討てば、船を出してもらえるのか」

「たぶんね……でも無理だと思うわ。南へ行きたいなら別の方法を探すほうが賢明よ」

「わかった、感謝する。ここの村人から話を聞いてもいいか」

「いいけど……悪さはしないでよ。この村は盗むものがないくらい貧しいから」

色々と情報を得ることが出来た。

ここの住人は人間族との混血ばかりで、青い月や赤い月に抵抗を感じないらしい。

曰く、まっとうな人間ならマーステリア神殿兵のところへ行く。

曰く、海峡の魔霊に海の奥へ引きずり込まれたら、生きたまま魔霊になる。

霞が来ない場所に村を作ったから船着場から離れてる。渡し舟はもつと東だ。

つまり渡し舟を出してもらうには、東の海峡まで行かねばならないようだ。

まずは東だな……。

風の強い岩場を抜けて東の岸までやってきた。

日が落ちて、空と岩肌が赤く染まっていく。それと重なるように、霞がかっていた周囲の見晴らしが更に悪くなってきた。

逢魔ヶ刻——人と人ならざるものが出遭う時刻。

俺たちを包む世界が変化——否、変質していく。

「魔の気配が……！」

「気づいておるわ！」

薄かった霞が煙霧のように深く立ち込め、絡みつくように俺たちを

包みはじめた。

自然の変化ではない。強い敵意を持った邪悪な気配が向けられている。

（これが噂の魔霊じゃな）

「ただの地縛霊なら放置したのだが……これほどの邪気は抜わずにはいられん」

袖から符の付いた縄を引っ張り出し、周囲に張り巡らせ、大幣を続いて取り出す。

敵意を剥き出しにしてこちらに襲いかかろうとしていた魔霊の動きがピタリと止まる。

「簡易式なりとも強力だぞこいつは」

即席の縄舞台の中で、大幣を振り始める。

「幸魂、奇魂、袂い給え、清め給え」

一度目、魔霊が苦しみだし。

「幸魂、奇魂、袂い給え、清め給え」

二度目、魔霊の体が薄れ始め。

「幸魂、奇魂、袂い給え、清め給え」

三度目、魔霊の気配は完全に消え去った。

振るっていた大幣を足元へ置き、正面に構えて、両手で一度の短拍手を打った。

「これを此の場のお祓いとせん」

拍手の音が広がるのに合わせて、淀んでいた空気も浄化されていく。数瞬空気が止まったかのような錯覚。

しかし、晴れていた霧も徐々に戻ってあっという間に元のようなってしまった。

「やはり海全体を祓わなければ無理か……」

（魔霊は海峡から二度と離れられぬと、獣人共が言っておったな。消滅も出来ずに海に縛られ続けるのかも知れぬ）

「消滅もしない……」

エクリアはポツリと呟いた。

（よくよく気配を探れば、霧の中に無数の生命の反応を知ることが出来よう。しかし個々の意思はない。ある意味で此奴等は生きている。正確には死んではおらぬ。……しかし体のない魔霊となつてこの地に縛られ、意思も失つて、本当に生きていると言えるのかの）

「……」

俯くようにして、何かを考え始めるエクリア。

こいつが何を考えているのかは、手に取るように分かるのだが……
まあ、注意したところで余り変わらない。

荒治療をするしか無いか。

とにかく、先に進むとしよう。

斬り深い道が開け、俺たちは海峡へと突き出した岬に立った。

夕陽で赤く染まっていた世界が、より深い紅に包まれていく。

（赤き月ベルーラか）

四つある月の一つ、赤き月は現神ベルーラの姿とされ、あらゆる者に恩恵を与える。現神の敵である存在であっても。

赤き月と夕陽に照らされたケテ海峡。霞が掛かっかけていて見通しは悪いが、海峡の反対側の大地がおぼろげに確認できる。

エクリアはしばらく真っ直ぐに夕陽を見つめていた。

ケレースの地を臨み、今、エクリアは何を考えているのか。

姫將軍として祖国を戦乱へと導き、実の妹をも手に掛け、国を追放され…… 最後には死を望んだ。

全ての元凶は姫神フェミリンスの血族として受け継がれて来た呪い。

だが死してもフェミリンスの呪いは消えない。最も近い血縁——残されたもう一人の妹セリーヌへと継承される。

「……妹が、イリーナが憎かった。フェミリンスの呪いで、私はずっと苦しみもがいて……自分の不幸を嘆いていた。二人の妹は呪いを継がなかった、なぜ私だけがと、この身を恨んだこともあった……メンフィル王妃となり、一人だけ幸せを掴んだイリーナを想うたび、胸を掻きむしられる思いだった。その上、私は……その呪いの暴走でイリーナをこの手にかけた……妹を、この手で殺した。それなのに私は命だけを許され、生き恥を晒している……」

「……それで？」

「……追放されて頭をよぎったのは貴方だった。『神殺し』の貴方なら私を裁けると思った。私を殺してフェミリンスの呪いを消滅させられるのは貴方しかいない……しかしそれも叶わない夢……貴方は私の望みを叶えてはくれない……それも当たり前だった。私が気付かされたのは、自分の我が儘や穢さ……神殺しの貴方なら人を屠るのなんて躊躇わない……なんて勝手に思い込み、貴方がどんな人なのか知ろうともしなかった。自分の勝手な気持ちばかり押し通そうとしていた。本当に、ごめんなさい……だから、それももう終わり。もしこの海峡の話が本当なら……私は死なずに魔霊となる。そうすれば呪いも残したまま、私という体だけが消滅するもう誰にも苦しみを残さない……そのためには、こうするのが私に残された途……」

エクリアは岬の先端へと歩みを進める。その瞳に絶望ではなく決意を秘めて。

そんなエクリアの腕をつかんで止める。

「勘違いをしているようだな、小娘」

「っ！」

少しだけ開放した覇気に、思わずたじろぐエクリア。

「一つ、俺が殺してやるのは『エクリア』ではなく『フェミリス』だ。」

最初からそう言っている。俺が殺すのはフェミリスだと。

「二つ、お前を裁くことが出来るのはこの世でただ一人『イリーナ』だけだ」

赦しを与えることが出来るのも罰を与えることが出来るのもイリーナただ一人。

「最後……お前のその行動はただの現実逃避だ。それこそがお前の我が儘や穢さだろう」

言い終わると、エクリアはその場にくくりと崩れ落ちて、嗚咽を混じえながら叫んだ。

「じゃあ……じゃあ、どうすればいいのよ！おしえてよ……おしえてよせりかぁ……」

11話 魔霊の海峡（後書き）

報告

ん〜つとですね。

この前に有るはずの、リウイサイドが書けていません。
つていうのも、ちょっと会話が多すぎて文章変更が殆ど（95%）
無いのでさすがにまずいだろうということです。

第三者視点に変更したり、思い切って文章消したりつていうのをや
つて、来週あたりにでも割り込み投稿とかでもするつもりです。

補足説明は今回は後から書きます。

此処どうということよ？つていうのがあれば感想へどうぞ。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。
作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の〜」とか程度の正直言つて想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どいつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほ

うが いいものを」「で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

12話 救済（前書き）

今話について

VERTICAの二章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

12話 救済

「……助けを求めたな」

「え？」

「いいだろう、教えてやる——」

右腕を上から斜め右後に一振り、振り切りピンと伸ばした腕の先には一振りの刀が握られていた。

その刀身は透明な物質で構成され、七色に光っている。

「お前の間違いは助けを求めなかったことだ。頼ることの出来る妹も二人いた。他にも探せばいくらでもいただろう。王族だ呪いだといつて孤高の仮面^{ベルソナ}を被ってしまったことがお前の間違いだ。——とはいっても、もう過ぎた話。お前は今、確かに助けを求めた。それでいいのだ」

光り輝く刀をダランと下げる。

「契約をしよう」

「け……いやく？」

「そうだ……俺がお前を救ってやる、その対価に命を差し出せ」

「私は……私はそれだけを望んであなたについてきた。……今更迷うこともない……やって」

やっと救われる……そんな風な清々しい顔をして、エクリアが肯定した。

「後悔はないな」

「ええ」

「わかった」

俺は刀をゆっくりと持ち上げ上段に構える。目を閉じて神経を尖らせる。

時間という概念が世界から消え去ったかのような錯覚。そして――

「――疾くと死ぬ『フェミリンス』」

音もなく、空気でも割くかのように、刀が振り下ろされていた。

その透明な刀身は、勢い余ってその下の地面まで切り裂いている。

だというのに、血は流れない。

いくらたつてもエクリアに異常は見られない。

しかし確かに聞こえた。

「サクッ」と言う、何かを軽く両断したかのような音を『二つ』。

だが、エクリアは切れていない。では何を切った音だいいのか。

突如エクリアを中心として風が吹き荒れる。

周囲の霧を巻き込みながら渦巻く風は、最後に拡散し清浄な空気をそこにもたらしした。

いつの間にか夕陽は沈み、空には月が上がっていた。

月明かりを受けて煌びやかに光る刀の切っ先をエクリアに向けて宣告する。

「これより、汝の命は俺のものだ」

その言葉を境に、エクリアの頭は朦朧としてくる。

魂が作り変えられていくかのような感覚と共に、視界は薄れ、

「——ここに契約は完了した」

バタリという音と共に、意識を失った。

軽い。体が、心が軽い。

自分を縛りあげていた鎖が消え、足にぶら下がっていた錘が無くなったかのような、そんな軽さだ。

瞼越しに入ってくる光。小鳥のさえずり。

肌を包み込むかのような陽気の中でまどろむ。

「起きましたか？」

何処かで聞いたような声がした。

「え、ええ」

半分空返事。

その声を何処で聞いたのか、戸惑い、思い出そうとする。

記憶を辿っていく、そして答えにたどり着く頃、同時に目を開いた。ふかふかの布団ごとこれまたふかふかなベッドから体を起こし、声のした方を向く。

眼前に一人の人物。ベッド脇に置かれた木製の椅子に座ってこちらを見据えている。

これは誰だ？

信じられないことが起こっている。

そうか、夢か。

頬をつねる。痛い。

いや、まだ信じられない。

きつと私は寝たまま腕を動かして頬をつねったんだ。

そうだ、そうに決まってる。

目の前で苦笑している人物を他所に、再び体を倒し、布団をかぶって目を瞑る。

「あ、姉様。寝ないでください！」

揺さぶられる。

違う、夢なんだ、これは。私を惑わすな。

「もう！怒りますよ、姉様！」

そう、これは夢、夢――

「えいつ！」

ドゴォ！

グハぁッ！

「何するのよイリーナ！」

鈍器で打ち込まれたような衝撃に跳ね起き、怒声を上げる。

そう、イリーナ。死んだはずの……私が殺したはずのイリーナ。

此処に居る筈のない人が目の前に居る。

「やっと名前を読んでくれましたね、エクリア姉様」

そつ、死んだはずの……ん？死んだ？

そうか、ここは死後の世界か。私死ねたんだ。

「——えさま」

そうか……彼は約束を果たしてくれ——

「ね・え・さ・ま……！」

「ひゃ、ひゃい！」

「ちゃんと話を聞いてください」

「ね、ねえちよつと待ってイリーナ」

「はい？」

「イリーナ……よね？他人の空似ではなく」

「姉様……現実逃避もそこまでにしてください。さつきから返事を
してるでしょう。真正正銘イリーナ本人です。ついでに此处は死後
の世界ではありません」

心読むな。

「それでも一応妹ですから。それくらい顔を見れば分かります」

目の前にイリーナが居る。

そのことをはつきりと認識した途端、急に悪寒が走った。

顔は青くなっているだろう。体も少し震えている。

——怖い——

何を言われるのだろうか、想像しただけで怖くなってくる。

「姉様」

これから言われるであろう、非難の言葉に身構える。

「……」

そして無言で顔を上げる。

「戦争の引き金となり、多くの犠牲を生み出し、そして、私を殺したこと……色々ありました」

頭が割れるかというほど音を鳴らし、心臓が早鐘を打つ。そして――

「私は――あなたを許します」

衝撃が、来なかった。

数秒、思考が止まった。

そこにあると思っていた階段が無かったかのような、そんな風に拍子抜けする。

時間を掛けて言葉を噛み砕き、飲み込んで、そして涙が流れているのが分かった。

私は許してもらえたのだ。

これ以上、胸の奥から沸き上げてくる感情を止められなかった。

私は、大声を上げて、涙を流し、涙が枯れるまで泣き続けた。

私を抱きしめた妹のぬくもりを感じながら。

「落ち着いたか？」

「ええ」

恥ずかしい。妹の前で大泣きするなんて。

顔はきつと真っ赤っかだろう。

少し残った涙を手で拭い、俯かせていた顔を上げて、固まった。

「36分27秒。なかなか泣いたな、イリーナも姉がこんなに泣いたのは見たことないだろう？」

「ええ、姉様は一度も私たちに涙を見せてくれませんでしたから。」

それどころか、年々話しすらしてもらえなくなつて……」

「まあ、そんなことだろうとは思つた」

長い赤髪を後ろで一括りにしてぶら下げ、異国情緒あふれる不思議な服を身に纏う人が居た。

つまりは――

「セ、セ、セ、セ、セリカア!？」

「どうした？俺が此処にいたらおかしいか？」

「おかしいに決まつてるでしょう!？」

「いや、此処は俺の屋敷なんだが……」

え？あ？そう……なのか？え？いや、ちょっとまで――

「い、い、いつから？」

「最初から」

「ツ~~~~!!?」

顔面が爆発した。

いや、もちろん比喻だがそれくらい恥ずかしかった。

見られた！見られたのだ！！あんな、あんな様子を……！！

「可愛かったぞ?」

「かつ、かわつ、可愛いっ!? 私が!」

再び爆発した。

「ああ、そうだろう?」

「ええ、とても」

「か、かわ、可愛い……可愛い……」

セリカはハリセンを取り出した。

セリカの攻撃。

「落ち着け」

ばちん!!

「さて、現状を説明しよう」

少し落ち着いてから、話に戻る。

「喜べ、お前を縛る呪いはもう無い」

「え?」

「そのままの意味だ。ついでに、お前に取り付いていた悪霊も抜った」

「悪霊？」

「妄執によって変質した姫神フェミリンスの魂の一部だ」

「……」

啞然とした様子でばかりんと口を開くエクリア。

「お前の器に居座っていたフェミリンスの魂が無くなったことで圧迫、侵食されていたお前自身の魂が軽くなった筈だ」

「……そういうことだったのね、納得したわ」

異常なほどの体の軽さに得心がいった様子。

「結局のところ、呪いが解けたということだ」

「ありがとう」

「礼に及ばん、対価ももらったしな」

「契約……」

「そうだ。ちゃんと覚えていたな」

「失礼ね。忘れるわけ無いじゃない、あんな衝撃的なこと」

「いや、さっきのゴタゴタで全部忘れててもおかしくないと思った」

その言葉で思い出したのだろう。真っ赤になるエクリア。

「忘れて」

「断る」

「忘れなさい！」

「断る」

「……」

「……」

「はあゝ。もういいわ、どうせ無駄だろうし」

「よく分かってるじゃないか」

「分かるに決まってるでしょう……」

えくりあはおつかれのようだ。

「さて、契約の結果、お前は俺の使徒になった。ラインが通ってるはずだ。……感じないか？」

するとエクリアは目を閉じて、しばらくして答える。

「……ええ、わかるわ」

「使徒契約の他に同種の契約を複数重ねているからな。感じやすかるわ」

エクリアは頷いて答えた。

「世の契約には強制、矯正、洗脳、呪縛等の効果が付随するものが多々ある。しかし、これらの契約はその類のものではないと先に言っておこう。……ただし、強いラインが通っている関係で、俺の心に触れ、俺に傾きやすくなるということはある」

なるほどと言った風にエクリアは再び頷いた。

「使徒になった効果として、各能力の強化……お前の精神面に触れる所以外はあらかた強くなっているはずだ」

「どついうこと？」

「精神を強化する……たとえばトラウマに対する心の強さを上げたりするというのは、一種の洗脳と同じだ、此処までいいいな？」

「ええ」

「それに対して、精神操作に対する防御力を上げたりすることは洗脳とは言えない」

「なるほど……理解したわ」

「何処がどれくらい強くなっているかは追々理解して行ってくれ」

「了解」

「次に、不老不死……と言うより、正確に言うと俺が死なない限りお前も死なないし俺が老いなければお前も老いない」

「まあ、珍しいことではないわね」

それもそうだ。この世界には神格者という不老不死が存在するから。

「三つ目。常に心が繋がることになる。さっきもちらつと言ったがかなり強くて太い射程のないラインで結ばれているからだ。それに付随する効果で、生きてさえいれば何時でも何処でも念話が出る」

『こんな感じ……？』

『ああ、それでいい』

まあ、近距離でという制限は掛かっていたとはいえ、頻繁にハイシエラとの念話を体験していたのだ。体得は早くて当然である。

「あとは神々の加護の形が大きく変わることくらいか。幾つかの例外と俺を通じて伝わる加護を除き基本的に契約主以外からの加護の類は受けなくなる」

本来、使徒契約というものは、種族や実力に関係なく行えるもの。

しかし、こういった事情が絡んでくるため、加護を掛けることの出来る存在、つまりは神などとしが行わないものとなっている。

恐らくは、種族や実力に関係ないという事実を誰も知らないだろう。

「そのため、神に依っていた魔術等は、一部の例外を除いて使えなくなっていると考えろ」

「わかった」

他に話すような大きなことはあったか……？……いや、ないな。

「大まかな説明はこのくらいか。細々とした事情は挙げ出したらきりがない。そのあたりも追々確認しよう。何か質問はないか？」

エクリアは少し考えこんでから答える。

「いえ……特にはないわ」

「わかった。また何かあったら言ってくれ」

そう言つて、話に区切りがついたときである。

「零、食事の用意が出来たわよ」

ガチャンと音を立て、シックな木製のドアを開き入ってきたのは、白いフリルのカチューシャと髪留めで赤髪を一つに束ね、その身をメイド服に包んだ女性だった。

「メイド？」

エクリアにとって屋敷にメイドというシチュエーションは王族であるが故に慣れていることであつた。

しかし、自分の契約主である男――セリカにメイドが居るとはついぞ思っていなかった。

様々なごたごたがあつたせいで飛んでしまつていたが、そもそも屋敷を持っていた事自体、彼女には驚きだったのである。

思わず声を漏らしてしまったのは仕方が無いことだろう。

「違うわよ。使徒よ、零――セリカの」

「違うな。お前と同じ、俺の使徒だ」

セリカと女は重なるようにして同時に言った。

「どうした？それは分かったが何故メイド服？とでもいいたそうな顔をして」

エクリアは『心読むな』と心のなかで思った。

「家事全般の師匠をしてもらつてる人に、『物事は何事も形からです』って、言われてね」

「ほう……エウもいい仕事をしたもんだな」

『ありがとうございます』と、何処からともなく聞こえてきたような気がした。……無視の方向でいこう。

「さて、食事だったな。お腹が空いただろう？ほら、起きろ」

と、未だベッドの上で体を起こした状態のエクリアに手を差し伸べる。

「ありがとう」

消え入るような小さな声でボソツと言い、手を掴みベッドから降りるエクリア。

踵を返すと同時にエクリアの服装が入れ替わる。

それまで着ていた、白いネグリジェから、同じく白のシンプルなワンピースに。

突然のことに多少驚いた様子を見せたエクリアだったが、彼女はこの短時間の付き合いの中で、ある一つの解を見出していた。

『まあ、セリカだから』

いつか慣れきるその日まで、彼女の苦勞は続くだろう。

エクリアの明日はどっちだ。

12話 救済（後書き）

やっとアイドスが出てきた。

正直なんで旅に連れてく流れにしかつたのかと思う。

でも溜まりに溜まったストックを全部書きなおすのも億劫だったからやめた。

後付の理由は次話に登場。

質問があれば感想欄へ。

ツッコミもあれば感想欄へ。

どうでもいい作者のこぼれ話。 自慢ではない。

先日定期テストが帰ってきた。つまり平均点+三十を二で割った感じの低めの点数だったのだが理科がおかしかった。

前回の点数三十二点↓今回九十一点。

Σ（。Д。）イッタイナニガアツタ！？

…… 自慢ではない。 大事なk（ry

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の

方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どのつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。原作から完全に乖離するまでは原作文のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどし願います。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

13話 出立（前書き）

今話について

VERTICAの二章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

（ ） 「」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

13話 出立

辿り着いた朝食の席。

「昨日も思ったが、やはりお前の料理はうまいな」

「ありがとつ、零」

赤毛の少女は顔をぱあつと綻ばせ喜んだ。

眼の前で繰り広げられている信じられない現象に、エクリアは目をゴシゴシとこすって瞬きした。

自分と同じ使徒だという少女——少なくとも見た目は——が、古神アイドスだと聞いた瞬間、目眩がした。

それまで自分の中にあつた神という存在に対する幻想が木っ端微塵に砕かれたからである。

「一年だけで培った味だとは思えん」

一方、セリカ——いや、零は本心から褒めたたえていた。

もちろん、永らくの転生人生の中で培った経験から、当然、彼のほうが料理が上手なのだ。

が、しかし、今までの転生人生の中で彼はどちらかと言うと食べる専門である事のほうが多かった。

割合で言うと八割ほどだ。

つまり彼は、手料理に飢えているのである。

「ほんと！？やたっ！」

手元で小さく握りこぶしを作ったアイドスは本当に喜んでいた。

突然前触れもなく復活したのが一年前。

屋敷の探索を終え、そろそろ世話になりっぱなしというのにも嫌になってきたのがその一週間後。

身の回りの世話をしてくれていたメイド天使に相談して共に世話になっていたイリーナ共々、家事修行に励む。

それぞれ、自分の好きな人と再会したら……という思惑があったため、異常なほどの頑張りを見せて急成長。

ついに達成されたその願いと、自分が恋い慕う主からの褒め言葉に、内心天にも昇るような気分になっていた。

「当然です。なにせ私の弟子ですから」

弟子が褒められたことを自分のことのように思い、頬を軽く染めながら、その師匠も追従する。

「……」

と、メイド天使長たる神腕剣士も褒め称える。

え？言っていない？よく聞くんた。確かに言っているはず。

「おいしいです！」

メイド見習い（永遠）の少女もぱくぱくと幸せそうに、実に幸せそうに食べる食べる食べる。

この少女、実は食事が多いのだ。どこぞの騎士王（少女）といい勝負だろう。

ちなみにカップ麺大好き少女は欠席である。

まあ、彼女の好みが好きなら順に、零の本気料理、越えられない壁、カップ麺、越えられない壁、その他、なのでまあ仕方ないといえる。

「羨ましい」

同時に家事を習い始め、いい好敵手のような存在となって競い合っていたイリーナ。

自分も早くリウイと再開したいと、今は遠く離れたメンフィルに思いを馳せる。

「なんだ、お前もさっさと食べんか。なかなか美味であるぞ」

「え、ええ」

ゼフィラに諭されて食べ始めるエクリア。

「……おいしい」

「だろう」

朝の平和な一時であった。

「悪いなエウ、お前にばかり仕事を押し付けるような形になって」
屋敷の玄関には全員が集合していた。

わずかばかりの旅荷を持って扉の前に立つのはセリカを筆頭に、その使徒アイドス、従者のメイド天使二名と、計四名である。

残りのメンバー、エクリア、ゼフィラ、メイド天使の残り、イリーナは居残り組だ。

「いえいえ、いいですよ。これはこれでやりがいのある仕事です
しね」

一体何の話をしているのかというと、新規メンバーの修行の話である。

元姫神の系譜であり、枷のなくなったエクリアや、深凌の楔魔として数えられるほどの魔神であるゼフィラは十分な即戦力として機能するように思われる。

しかしながら、パーティーメンバーにセリカが居るとなれば話は変わってくる。

最低でも音速移動に対応できる肉体戦力を持ち、単純な戦力として Undeca 以上無ければ話にならない。

古神であつたアイドスでさえ、家事修行と並行しながらということを加味して一年掛かつたのだ。

ちなみであるが、同じ修行を受けたイリーナも当然その域に達している。

ではメイド天使はどうかというと、アイドスたちの師匠をしていた以上その上の域にいるのは当然だ。

この世界最古の生物であり、この世界最長齡の者達らしい。

見習いを除いた三名は『二つの回廊の終わり』以前は剣と魔法の世界、ネイ＝ステリナに生きていた。

そのため、自然とその力は研ぎ澄まされていき、世界最強の生物となった。

見習いの方も、ネイ＝ステリナほどの危険のないイアス＝ステリナで生きていたとはいえ、長年の経験から一定以上の強さを得ている。

結局のところ、世界最古で世界最長齡で世界最強な生物集団だということだ。

ちなみにだが生物は『なまもの』と読む。

話が横にそれたが、急ピッチで彼女たちの修行を進めたほうが良さ

げだと、『零』の長年の経験が言っていた。

世界に一定以上の影響を及ぼしかねない大事件が、これから先の百年以内に起こるだろうと、直感で感じ取っていたのだ。

もちろん、彼一人でもどうにか出来るだろうが、それをするというのは孤独を生きるという事に同義だ。

一時期、そのように一匹狼をしていた時期があったが、結局二十九生あたりで、孤独に耐えられなくなった。

彼自身が主体的に動くのは彼にしかできないことが起きたときであって、普通は周りを鍛え周りを動かして解決する。

そのため、最低限の強さ——この際求めるレベルがおかしいとかは無視しよう——を見に着けて貰う必要があった。

そしてだが、修行が終われば自分の足でセリ力たちに追いつく手筈になっている。

「さて、そろそろ出発するか」

出発組に声をかけ、全員が頷きを返したのを

「では行くでしょう、頼んだぞエウ」

「行つてきまーす」

「……行つてくる」

息の合った見習いとアイドスに続いて、黒い羽の持ち主が言う。

「行つてらっしゃいませ」

「……」

「直ぐに追いついてみせます、主様！」

「私もがんばるわ」

二人の従者は早く修行を終わらして追いつこうと意気込みを見せた。開かれた玄関をくぐり後ろ手に手を振るセリカを先頭にして、一行は屋敷から離れていった。

ヴェルニアの楼――

かつてリウイたちが拠点としていたブレアード迷宮の根城から遙か東、北ケレース地方の中核に位置する地底の空間。

そこには串刺しにされた巨大な石像が鎮座している。

その名を姫神フェミリンス。

辱められるような姿で封印された姫神の前に、四柱の魔神の姿がある。

彼らは深凌の楔魔と呼ばれる。

大魔術師ブレアードによって生み出され、姫神フェミリスと戦ったという十の魔神の内の四柱だ。

一際大きな黒い巨体を横たえているのが序列一位のザハーニウ。

眼光を青白く光らせながらどっしりと構え、三柱の仲間達の声に耳を傾けている。

黒き髪、黒き翼を持ち、神妙な顔で聞き入っているのが序列三位のラーシェナ。

かつて仕えた主と共に天界より堕ちた堕天使である。

少女のような身体をしているのは序列五位のエヴリーヌ。

すでに飽きて来ているようで、ぼんやりとしたり、手持ちぶさたに人形を放って遊びながら報告が終わるのを待っている。

最後に緑色の髪に曲がった角を生やしているのが序列六位のパイモン。

見聞して集めた情報を他の三柱に報告しているところだ。

「――報告は以上です」

「メンフィル王はどのような手を打ったのか」

「はい、ラーシェナさん。彼のものは興味深いですね」

「笑っている場合か！海雪の間をみすみす奪われおつて。奴を我らに引き込めると大見得を切ったのは貴様だろうが」

「いやあ、申し訳ないです」

「メンフィル王の目的……未だ見えぬか……」

「予想された範疇ではありますが、私達は少々誤解をしていたのかも知れません」

「これからメンフィル王の扱いはどうするつもりだ？」

「……殺しちゃえ、さくつと」

「まあまあ。彼はこちらがどのような手を打つか試しているのです。挽回する機会はいくらでもあります」

「……ふふん、まあ良からう」

「そういうことで、ザハーニウも宜しいでしょうか」

「……任せる。だが儂らの状況を忘れるな。ラーシェナもだ」

年を押されたラーシェナは、難しい顔をして頷いた。

「ところで同志ゼフィラの件であるが……」

ラーシェナは同じ深凌の楔魔である魔神の名を口にした。

「未だ行方が知れません。この前会ったときは砂漠で暴れていまし

たが……ぱったりと。何者かが介入したと思われます」

「なるほどな。若輩とはいえ同志を失ったのは手痛いな」

「是非もない。……注意だけは怠るでないぞ」

「はい」

——魔神らは次なる手を打つべく、暗い空間で密談を続けた……。

13話 出立（後書き）

今回短め。いつもの半分位。

ネタ切れと章末ってというのが重なって増やせなかった。

というわけでネタの募集も開始する。詳細は以下より。

途中出てきた謎の語句^{ウンデカ}Undecaについては設定集参照。

……感想来ねえ……。いや、まあいいけどね、別にさあ……。別に……（ry

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どうしても登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点にお願いします。

NEW!!

ネタ募集中。

投稿方法は自由。こんなのがあったらいいな〜てきな曖昧な文だったり、細かく場面設定が成されていてもok。ただし採用するかは不明。あくまで発想の参考にする程度の場合多し。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

14話 仲間を求めてセトリへ（前書き）

今話について

VERTICAの三章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

14話 仲間を求めてセトリへ

南へ指針を取り、旅を続けていると分体からの定期連絡があった。

ベルゼビュード宮殿浮上――

どうやら犯人はブレアードらしい。

またか、またカッサレなのか。いいかげんにして欲しいと思うこの変態一族。

メンフィル王がブレアード迷宮の中心部を掌握すると共に魔人ブレアードが現れ宮殿を浮上させたようだ。

とにかく何かしら起こるだろうことは予想に難くない。

文体からの情報から察するに、理の改変規模ではないものの世界の平穏が無くなるくらいことは企んでいそうだ。

それは面倒だ。

数百回ぶりに長命を約束された転生をしたんだ。

俺の平穏は誰にも崩させん。

まあもちろん自分の手で解決することはない。

面白くないから。

さつきと言っていることが矛盾しているようだが、結局のところ俺の行動指針は1つだけだ。

楽しければいい。

言っておくが快樂主義者ではないし麻薬常習のようなことをしているわけでもない。

要はエンジョイしようぜってこと。

しかし恐らくエクリアたちのレベルアップはこの事件の解決までに間に合わないだろう。

ならば質より量だ。

手駒になってくれそうな人をあたってみるとしよう。

現在地はデジエネール地方最南端。

南に進んでいくとセテトリ地方に辿り着く。

亜人域を含めた人間の勢力の及んでいないである無人域にいくつか心当たりがある。

聖山ミサンシエルの頂に立つミサンシエル大聖堂。

ロセアン山脈の奥地、常にマグマが河のように流れ続ける溶岩地帯にある稲荷の神殿。

他にも力のあるものが居る所はあるが、理性を持つ有力者が居る所

はこのあたりだろう。

ふむ、さて、どちらから行くべきであろうか。

……普通に近い方からでいいか。

「全員集合」

適当に散って散歩なり何なりしていた奴らをキャンプ拠点に呼び戻す。

「「はい」「……きた」

そういえば紹介してなかったような気がするから紹介しておく。

陽気な声で返事してくれた一人がアナスタシア。種族名はアナスタシア（紫の珍獣と読む）。

相性はシアで、一部の人達からの通称であるナスというのは本来の姿がナスそっくりな紫の珍獣だからである。

本人はそれをコンプレックスに思っており、からかうとすごく面白い。

粉微塵にされる覚悟があるのならやってみるといいだろう。

古神は神話や伝説、聖書によって語られ、人間族が高度科学文明を築いた世界、イアスⅡステリナに起源を持っているため実はかなりの知識人。

でもアホの子。

珍獣と言いはしたがこれでも最上位の精霊で、数えきれないほど分体を持っている。

それを本人が気づいていないのでやっぱりアホの子だろう。

一体でも分体が倒されて本体に還元されればさすがに気付くだろうが、分体もかなり戦闘力が高くなりかなりの危機回避能力も備え、数が多いくせに遭遇率が低いがため誰かに倒されるのはないだろう。

面白いからこっちもノータッチ。

ぼそつと呟くように言ったのが瑠璃。種族名はブラックエウシュリーちゃん。

『ちゃん』まで含めて種族名だ。しかも単一種族。メイド天使は全員そうだ。エウシュリーちゃん然り、エウクレイアさん然り。

一体誰が何処でどうやって名付けてそしてどうやってそれを知ったのか……本人達は『電波を受信した』と言っていた。

瑠璃というのは俺がつけた名前で、それまでは種族名を使っていたらしい。

エウシュリーと紛らわしい上にゴロが悪かったので名前をつけた。

本人は顔にでないが喜んでいた。

家事一般は壊滅的に苦手で、そのためやや（かなり）ズボラ。

壊滅的家事の腕を逆に利用して掃除をしようとすることで相手をズタズタにするという奇抜な戦闘方法を持つ。

カップ麺厨で、いつも謎の空間に手をつ突っ込んでカップ麺を取り出している。

きつと異世界（例：地球）や過去世界（例：イアス＝ステリナ）などにつながっているのだろう。

あまりのカップ麺好きにカップ麺拳というヤカン（常に沸騰水満タン）とカップ麺（減らない伸びない）を使った武術（笑）を開発。

（笑）とつけたがあなどるなかれ。その気になれば隕石を破壊できる。

そして最後に最近キャラ崩壊が始まってきているアイドス。

微クーツンデレな性格は幻想入りした……わけではない。

対俺以外の性格はちゃんと微クーツンデレである。

まあ女神アイドスについての説明は省略する。

「これからの行動指針が決まった。パーティーメンバーを増やす」

「……どうやって？」

「ロセアン溶岩地帯、ミサンシエル聖山」

「なるほど」

他の二人もあゝとでも言うかのように頷いて納得していた。

「どついうこと？」

訂正。アイドスは頷いてみただけだったようだ。

アイドスの加入は最近だったから仕方ないといえば仕方ない。

「知り合いがいる」

「なるほど」

「出発は今直ぐ。ロセアン溶岩地帯に先に行く」

「了解」

14話 仲間を求めてセトリへ（後書き）

前回よりも短くなっているこの現状。

というのも、今週色々リアルの方で忙しくって、いつもちょこちょこ書いてた時間がとれなかったんです。

今日急ピッチで仕上げようとしたんですけど無理でした。

続きは出来上がり次第、この本文の後ろにくっつけようと思います。

あとは……感想くれ。ネタくれ。

そんなくらい。

あ、リウイの話は必要最低限以外はなくすことにしました。

なくてもストーリーの把握はできそう、だと判断。

ですので、今まであげていた奴は話数を消すことにします。

でも、今ちよつと眠いんでその作業はまた今度。

最後に、読者の方々に感謝を述べ……寝る。

おやすみ〜

z z z z z z

z z z z

z z

z

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どいつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原文文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

ネタ募集中。

投稿方法は自由。こんなのがあったらいいな／てきな曖昧な文だったり、細かく場面設定が成されていてもok。ただし採用するかは不明。あくまで発想の参考にする程度の場合多し。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はごしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください

15 話目 九尾狐の神域（前書き）

今話について

VERTICAの三章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

「（）」 セリカ心話

（ ） ハイシェラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシェラ思考

「「」」 セリカ思考

15話目 九尾狐の神域

ここからだと言セアン山脈は……あっちの方角だな。よし、

「行くぞ」

灼熱の溶岩地帯をスルーして目的地へ到達する。

「たのもー!!」

目の前にある木製の大門へ向かって大声を張り上げた。

軋むような音を鳴らしながらゆっくりと内側に門が開かれていき、
徐々にその内部を明らかにする。

門を潜ると急に涼しくなり、少しメタリックな雰囲気を感じるマグ
マへと直接根を張らした桜がある。

その桜の枝の上に回廊が組み立てられ奥へと伸びている。

外からの光は一切通さず、マグマと緑蛍の光によって絶えず淡く光
り続けていた。

「綺麗……」

「そう言えばアイドスは初めて来たのだったな」

「うん……」

幻想的な光景に魅了されながらのうわのそらでの生返事が返ってくる。

「『神域』から漏れ出る力場が影響した結果だ。マグマは液体の状態を保ちながら水のように冷え、それを養分とする桜が自生する」

「桜って……二つ回廊が終わってから絶滅したんじゃない……」

「『神域』の力が桜の進化を促したんだね。だからこの先は一種の異界になってるんだよ」

久しぶりにアホの子じゃないアナスタシアを見た。

降り続ける桜の雨を受けながら、一本道の渡り廊下を歩いて行く。

木の床独特の響くような音が心地いい。

単調なリズムの中に心に訴えかけてくるものがある。

それが『懐かしい』という感情であることはとっくに分かっていた。

見るとアナスタシアも同じように目を瞑り四つの足音に耳を傾かせながら歩いていた。

とん、とん、とん……こつ、こつ、こつ。

音の種類が変わった。

いつのまにかマグマは見当たらず蛍の光もない。代わりといったように現れてきたのは宙に浮かぶ火の玉だ。

ひとだまのようにふらふらと点在して浮いているのではなく、回廊に沿って規則的に浮かんでいる。

暗すぎず、明るすぎず。

更に進んでいくと石畳の床を照らしていた焰は薄れて一点の光もない空間に入った。

「何……ここ？」

上下左右も後ろも認識できない闇のなかでアイドスは言った。

「領域に入ったものの心の闇を映し出す神殿防衛用の結界だ」

いつの間にか一同は闇の中を抜けており巨大な桜を眼前にしていた。

「だが既に心の闇を解決しているものに対しては効果はない。お前は既に心の闇と向き合っただろう？」

主に訓練とか訓練とか訓練で。

屋敷に『VS闇の自分』が出来る特殊訓練施設があったはずだからな。

道の遙か先の先に巨大な根元が見て取れるとてつもなく巨大な桜。

降り注ぐ花びらは一枚一枚が淡く桃色に発光しており、それだけでこの閉鎖された洞窟が、真昼のような明るさを保っている。

「さて」

——行くか。

無拍子で最大加速。

アナスタシアと瑠璃が追従して加速し、少し遅れてアイドスも加速する。

ここと桜の巨木の根元の間では神域の力場の外膜があり、普通に歩いて行こうとしても同じ空間を永遠に歩き続けることになる。

この外膜を抜ける方法は力場の影響を絶つまたは無視するということで、超高速での突破、魔術などでの影響遮断、転移などによる直接移動などが挙げられる。

しかし空間のループのほか、距離の引き伸ばしやもされているので光速であっても五秒ほど掛かる。

だが魔術的ものを用いる方法を利用するのは非常にエネルギーを消費するため、結局、走って突破が最も効率がいい。

そうして根の下——の神社の前までやって来た。

その本殿に安置されているのは、紛れも無く『神』であり、魔神や古神は勿論、現神などの神々とは一線を画した存在。

『次元を昇った存在』たる彼が『生きていた頃』の肉体がご身体として祀られている。

『それ』は、『彼』がこの世界を眺めるための瞳であり、『彼』がこの世界に降りるための器であり、『彼』の意思を伝えるための端末である。

「いつまでばーっとしておるのじゃ、主」

そう言いながら現れた熟年の女性。

手には煙管を持ち、ふうつと煙を吐く様は着崩された着物と相まって妙に色っぽい。その胸部に備わる巨大なものが更にそれに拍車をかけている。

黄金色の猫目の瞳に同じ色の『狐耳』。着物の裏からうまく出された九本の狐尾。

即ち、彼女は人型に至った九尾の妖狐である。

この『神殿』に祀られた者と嘗て配偶関係にあり、今もなお、この神殿の警護に勤めている。

「狐伯蓮」

「久方ぶりじゃな」

「ああ」

「此度の土産は何ぞ？」

「酒と煙管用の煙草……どちらを所望する？」

「決まっておろう。両方だ」

九本の内の二本を巧みに扱い、取り出した酒瓶と刻み煙草の入った瓶を奪うようにして取っていく。

まあ、そんなことなど予想はついていたわけだが。

「して用件を聞こうか」

「単刀直入に言おう……。お前が、必要だ」

一字一句聞き逃すまいとでもいうふうに構えていた彼女に対して言葉を放つ。

「……罪なやつじゃのう」

顔を染めながらも呆れたように返事を返す。

「自覚はある」

「……しかし、我には」

——許可しよう——

「邪魔してるぞ稲荷の」

——よい……我が位より遠く高き所に存在する者なればこそだ——

「それよりもいいのか？お前の妻の一人を口説いているようなもんだが」

——ああ、その許可だ——

「お前ならそう言うと思ったよ」

——別に私の妻が一人というわけでもない上、狐伯蓮も我と同じかそれ以上にお前を慕っているようだから——

「それに？」

——お前ならば狐伯蓮を幸せにしてくれると、そう確信できるのだ——

「そりゃあ、当然だろう」

——と、言うわけだ狐伯蓮。たまに顔を見せてくれよ。そうそう子供もだ——

「い、このつ馬鹿者めが!？」

——あつはつは——ではな——

当事者と観客をまるつきり放置し続けていた会話はこれで終わった。

「さて、一緒に来てくれるな？」

「……ああ、よろしく頼むぞ、主」

15話目 九尾狐の神域（後書き）

質問

今ちよつと悩んでることがありまして……

この話のサブタイトルとかも（自分的には）微妙だし、話の句切れがわかりにくいし、いつその事（原作の）章ごとに話をまとめようかな……って考えてます。

で、既に終わってるものに関しては一章二章……とまとめるか？って考えてるのです。

例えば06話〜09話を一つの話にまとめようかって考えてます。意見の募集は三章が終わるまでです。

賛成か反対か。どちらかと言えばでいいので意見をよろしくお願いします。

閑話休題

前回の続き。

結局文の追加をしなかった挙句またしても短い。

こりゃ本格的にスランプだな……。

適当にやってた結果がこれだよ！！

物語のおおまかな道筋をもっと考えてやればよかったと今さら反省。しかもリアルのほうがまじ忙しくなってきたため今後こんな感じが続く。

どうしよう……。

どうでもいいけどサブタイトルがダンジョン名をもらかぶりっていうかpak（ry

あ、文の量が少なくなっても更新速度は落とさないつもりだからよろしく。

感想もよろしく。

意見もよろしく。

ネタもよろしく。

よろしく。

よろ (ry

早すぎるお知らせ

まじこいSが今度出るので今適当に構成（大まかなストーリー）を練ってたりします。こっちの方はもう構成をしつかり練ってから本文に入るつもりで居るのです。……二の舞にならないように。本文事は発売されてプレイし終わってから構成の修正をして書くという流れで行くつもりです。

というわけでだいぶ先の話ですがよろしく。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からないと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どいつでも登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル＝リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほ

うが いいものを」「で括って感想の一言の方どうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。
原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

ネタ募集中。

投稿方法は自由。こんなのがあったらいいな〜てきな曖昧な文だったり、細かく場面設定が成されていてもok。ただし採用するかは不明。あくまで発想の参考にする程度の場合多し。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

16話 聖山ミサンシエル（前書き）

今話について

VERTAの三章、セリカサイドになります。

括弧の使い分けについて

「」 通常会話

（ ） 「」 セリカ心話

（ ） ハイシエラ心話、まれに補足の括弧

（「」） ハイシエラ思考

「「」」 セリカ思考

16話 聖山ミサンシエル

「……そういえば主」

「何だ？」

「何の用事で妾を誘ったのだ。ただの告白とも思えん」

「まあ、確かに本来の用事は別だが……もう一人揃ってから説明しよう」

そんなこんなで、九尾狐の狐伯蓮を仲間に加え旅を続ける一行。

音速突破のできない仲間が加わったため此处からはスピードが落ちる……なんてことはない。

神域の力が及ぶ範囲から外れるとセリ力はおもむろに、いつもの如く取り出した刀を振った。

刀の軌跡に合わせてスーッと空が裂き、出来た隙間が広がる。

別の風景を映すその隙間はやがて人一人通れる大きさにまで拡張され固定した。

「……」

開かれた穴の中にさっさと入っていく仲間を見て呆然とする狐伯蓮。

「どうしたのー？」

何時になっても来ないのを心配したのか、穴から赤髪の顔がヌツと出てきて尋ねた。

「い、いや。何でもない」

セリカの規格外っぷりに驚き呆れて固まってしまっただけの話であるが、残念なことに狐伯蓮も規格外のメンバー入りは確定している。

なぜなら他の仲間も同じことができるのだから。

なにはともあれ一行が通り過ぎたその穴の先には断崖絶壁が待ち受けていた。

「ここを……昇るのか？」

狐伯蓮は直ぐ目の前に現れた巨大な岩壁を前に呟いた。

「うんそつだよ」

ナスの子がそれに返答。

「ここを……昇るのか……」

現実を認めた狐伯蓮は再び絶壁に向かい合い諦めたように言った。

「いや、妾も九尾である以上この程度のことはできなくはないのだ

が……」

それでもやっぱりしんどいらしい。

聖山ミサンシエルは比較的緩やかな斜面と断崖とでできている山だ。

切る方向から切れば綺麗な直角三角形が見れるだろう。

標高はメートル法で9558メートル。

少し離れたところに北方面へ伸びる山脈が有るだけで平地にどんと居座る形で存在している。

これらの特徴から古くは「平原の主」として畏れ祀られた。

頂上部分にある大広場に建てられていた大聖堂に人々が気付くのはこの地に人が住み着いて千年後。

とある少年が登頂を果たした時のことである。

絶壁の方は常にぶら下がらなければならぬ様な傾斜の岩肌が三キロ続く地点すらあり、人間に登れるはずもない。

必然、人間や多くの人外にとっての登頂ルートは比較的緩やかな斜面の方となり、そちらの設備が整えられていき周辺が活発化する。

逆に言えば絶壁が切り立つこちらは未開拓地域ということであり、北方に在る山脈に連なるように密林地帯が広がっている。

ただこちらを昇るものがないのか？　というとそうでもなく、何

らかの飛行手段を持つ者などにとってはむしろ此方のほうが楽で早い。

絶壁側の大体標高六千メートル地点から神域の加護に入るからだ。

なぜなら、大聖堂の主たちの通り道が絶壁ルートなのだから。つまり斜面の方はあまり神域の影響がない。

話を本題に戻そう。

まず最初に隠れ天才娘と限定アホの子がおもむろに準備運動を始める。

屈伸、伸脚、前屈、体側……とごく一般的な普通の準備運動をやり終えた二人は、

「競争しよう！」

「いいねー！」

と言い出して走りだした。『壁』を。

ドドドドドド……と音を鳴らし、岩壁の表面を削り落しながら一気に距離を離れていき、あっという間に蟻のような大きさになった。削れた岩石は大きい音を立てながら墜落して、山のように積み重なっていく。

最後の岩石が落ちてきたときには既に狐伯蓮とセリカしか残っていなかった。

瑠璃はいつの間にか翼で飛んでいったようだ。

アナスタシアも翼を持っているのだがそれを使うという発想が出てこなかったらしい。

やはりアホの子なのか。

「ほら、さつさと行くぞ」

「え、ちょ」

いつまでも呆けている狐伯蓮にセリカはお姫様抱っこを実行。そのまま一足に跳んだ。

もし人間であつたなら体の各種機関が『酔い』を起こしてご臨終していたであろうスカイダイビングならぬスカイ『に』ダイビングである。

そうして登った先には……尖頭アーチの入口があつた。

いわゆる玄関口である。

結局、競争はアナスタシアが勝つたらしい。

アイドスが言うには、『崖すれすれに玄関というあまりにも予想外の光景に少し硬直して百メートルほど落ちてしまった』とのことだ。

逆側を堅実に登ったのしてもそこにあるのは『大聖堂の背』という予想外の光景で、初登頂を果たした少年が残した手記には驚きのあ

まり倒れてしまったと書かれている。

その少年がやって来たことをきっかけに参拝用の『祠』的なものが山の中腹に建てられたらしいので、その光景にびっくりする人間はもうあまりいないことだろう。

普通逆だろ！ というツツコミは残念ながら通用しない。

先程少しヒントを与えていた気もするが此処を管理して此処に住み着いているのは『天使』だからである。

ちなみにこの入口は基本的に飛び込めるように作られている。

天使の羽は片翼の長さが身長と同じと言われる。

その羽根を広げた状態で飛び込むのだから横幅は必要。

かなり勢い良く上昇してくるのだから高さが足りなければ入り口の上と衝突するだろう。

そう言った事情からここの入口はでかい。普通の聖堂の入口の二倍くらいだろう。

ドアが開いていないときは一旦降りて開ける必要があるが、基本的には他の天使がいるのでドアは開けてもらえばいい。

その時、背後に気配を感じた。

ほのかに香る花の匂い。風に靡く衣の音。そして――

「ああ、この感じ久しぶり」

そしていきなり抱きついてきた。

「初っ端からカリスマブレイクすんな」

突然背後から現れ抱きついてきて『熱い』ほどに頬ずりをしてくる者に言った。

ほんとに熱い。摩擦で皮膚がめくれて骨が露出するほどだ。俺だからそうならないが……殺人頬ずりってなんなんだよ。

「いいのよ。貴方限定で」

俺の腕に抱かれている狐伯蓮は……目を点にして口を大きく開けてポカーンとしている。

見てみるとアイドスも同じようにあっけにとられている。

「さて、俺たちは」

「たち？」

話の最中に反応してぐるっと周りを見る。

「……あれ？もしかして見られてた？」

一斉に頷く皆。

「ま、まあ、そんなこともあるわね」

何事もなかったかのように俺から離れごまかしに入るが、正直遅いと思う。

「で」

彼女の方に向き話し始める。

「お前の強力が欲しくて――」

「行く。行きます。行かせてください！」

二人目。パーティー加入。

16話 聖山ミサンシエル（後書き）

詳しい紹介は次回。

まあ知ってる人はわかるだろう。

性格ぶつ壊れすぎてる気もするけど、気にしない。

俺も書いてて思った。誰こいつ？って。

セリカの言葉遣いが安定してない気がする……。

でもなー自分の技量じゃなーむりなんだよなー。

ああ、でも「カリスマブレイク」とかいう言葉は長生きの中で知ったことになってますのであしからず。

ミサンシエル大聖堂はミラノ大聖堂の入口を二倍くらいにして崖すれすれに向けて建ってる的なイメージでよろ。

いや、別に他の聖堂イメージしてもいいけど自分の中ではそんな感じ。

後はいつもと一緒。

感想よこせー。

せめて質問の回答くらい欲しいぜー。

疑問があつたら感想になー。

質問

今ちよつと悩んでることがあります……

この話のサブタイトルとかも（自分的には）微妙だし、話の句切れがわかりにくいし、いつその事（原作の）章ごとに話をまとめようかな……って考えてます。

で、既に終わってるものに関しては一章二章……とまとめるか？っ

て考えてるのです。

例えば06話〜09話を一つの話にまとめようかって考えてます。意見の募集は三章が終わるまでです。

賛成か反対か。どちらかと言えばでいいので意見をよろしく願います。

作者から読者様に永続依頼

作品中に登場するキャラクターの描写についてヘルプしてください。作者はファクションに疎く文才があるわけでもないので下手をすれば「青い目の〜」とか程度の正直言って想像しにくい描写になる可能性が高——いえ、なります。

原作を知っていれば分かるかも知れませんがそうでない方は全然分からなと思います。ですので、できるだけ細かく（特に姿形の描写を）。文章にしても箇条書きにしても良いので感想の「一言」の方にお寄せください。

戦女神シリーズ・神採りアルケミーマイスターに登場するキャラクターであれば、どうしても登場可能性があります。作者が他のゲーム（姫狩りとか冥府の奴隷とか）をプレイすることで増える可能性はありますが、デイル・リフィーナに登場するキャラ以外は出しません。現時点ではそう考えてます。

小説検索の際のキーワードについて、入れて欲しいもの、入れたほうがいいものを「」で括って感想の一言の方にどうぞ。

作者は著作権のラインがおぼろげにしか分かっていません。

原作から完全に乖離するまでは原作文章のトレースです。

その上で、この表記はさすがにやめたほうがいいなどの指摘があれば感想の悪い点に願います。

ネタ募集中。

投稿方法は自由。こんなのがあったらいいな、てきな曖昧な文だったり、細かく場面設定が成されていてもok。ただし採用するかは不明。あくまで発想の参考にする程度の場合多し。

誤字、誤表記や気になる点等の指摘はどしどしお願いします。

現在、感想を非ユーザーにも開放してます。マナーを守って投稿してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456w/>

流久の転生者、神殺しとなりて

2011年11月13日00時11分発行